
亡国の幻将

モアイ・イースター・タヌキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡国の幻将

【Nコード】

N0693X

【作者名】

モアイ・イースター・タヌキ

【あらすじ】

高二病と大二病を併発した作者が鬱屈とした日々の中で書いたファンタジーな小説です。

古代風の異世界を舞台にして、登場人物たちが馬に乗ったり、剣を振ったり、矢を撃ったり、本を読んだり、相撲をとったり。

1・戦場後地にて

> i 3 1 9 4 5 — 4 0 5 7 <

見渡す限りの屍しかばねの群れ。青々とした草原に横たわる死体には、もうピクリとも動く様子はないけれど、ついさっきまで、ほんのついさっきまで、魂が宿っていたのだ。命がほとばしっていたのだ。

その風景を見ていたのは、夏の晴れ空のような、はっきりとした青色の瞳だった。彼は…… シャンティは自分のすぐ足もとにも転がっている死体を踏みつけないように、下を向きながら、とぼとぼと歩いた。

そよ風が彼の豊かな金髪とマントを揺らし、同時に血から発せられる鉄の臭いを彼の鼻に運んだ。息を吸う際にその匂いを嗅いだ彼は一層気が滅入ったかのようにがっくりと肩を落とした。下を向いていたので、彼には空の色はわからなかったが、きつとこの状況にはおおよそ、うってつけとは言えない晴天が広がっているのだ、と彼は思った。

「こっちはカバルス同盟国兵」ふと目についた死体を見つめながらそう呟いて、すぐ隣を見た。そこにも死体が寝転がっている。「こっちは我らがサウルス兵だ」

シャンティはくだらない、と言うように目を瞑つむって、下唇を噛みしめながら首を振った。そんなことをしても、目を開けばまた同じ光景が広がっているのは彼にも分かっていた。

十九歳にもなつて、こんなちゃっちな現実逃避だなんて、我ながらみつともない。自分の行動を卑下しながらも、彼の目は閉じられたままだった。それはどこことなく祈りにも似ている。

「シャンティ！」不意に怒号が響いた。シャンティはびっくりして声の方を見た。そっちには、青色の瞳、長い金髪、つまりシャンティとほとんど同じ顔の青年が、すらりとした馬に乗ってムスツとし

た顔で立っていた。シャンティと相手、両者の端的な違いは髪の長さ・目の吊りあがり方だけだ。馬上の青年には多くの騎兵が付き従っており、彼ら騎兵は自分の主である青年を中心にして堅固な感じで彼を守っていた。「近衛兵団はどうした？ 馬は？ なぜ、一人でうつろっている？」

「ジニー、そんなに怒るよなことじゃないよ。なにせ、もう戦争は終わったんだから。それでね、さっきの質問だけど……近衛兵団には死体に群がるカラスを追い払うように頼んだんだ。馬は……」といった後、シャンティは少し困ったように小高い丘の上に目をやった。そこには大きな白馬とその馬の手綱を掴んでいる男がいた。白馬はどうも男の手に負えないようで、後ろ足を蹴りあげたり頭を激しくがくがく振りまわしたりして、男を困らせている。「あの子だからね」

ジニーと呼ばれた彼は、本名をジャーニイという。シャンティの双子の兄でもある。彼は不機嫌そうな顔を丘の上に向けると、すぐさまシャンティに視線を戻して、また怒鳴り声をあげた。

「あんなくだらない馬はさっさと捨てる。それに、お前、近衛兵団つてのがどういう組織なのかわかってるのか？ 近衛兵団はおれたち王族を守るための組織だ」厳密に言えば国家元首を守る組織が近衛であり、その他は親衛という言葉を使うべきであるが、彼らの国ではそれを分けない。「お前はそれを、死体なんかの、それもカバールの死体なんかを守るために使うなんて……。おい、これから先はどんなことがあっても自分の身辺から近衛兵団を遠ざけるな。お前は……」

ジャーニイが小言を言いだすとシャンティは困ったような笑みを返した。

「どんなことがあっても……とは言っけどねえ、ジニー」シャンティは同じ表情のまま、この陰惨たる草原のどこかの虚空に目を移した。「なにも起こりはしないさ。なにせ、すべてはもう終わったあと……だろ？」

「……」ジャーニイは呆れたという感じの顔をシャンティに向けて、それでも彼の抱いた無常感と同じようなものを自分の胸にも感じつつ言った。「カバルスの王族や軍人、職民議員との講和が成立すれば、ひとまずは決着さ。けれどもな、シャンティ。終わったのは全てじゃない。今回の戦争が終わったに過ぎない。それだけに過ぎない。そうだ！ 父上はまだ征服を止めはしない、版図の拡大を終わらせはしない、さらなる国の繁栄を諦めはしない。この戦争が終わっても、またすぐに次の戦争だ。それも全て国のためだ、国民のためだ。馬鹿みたいに本ばかり読んでいるお前なら、わかってるはずだろう、シャンティ？ そして父上の息子であるおれたちは次の戦争にも参加せねばならない。誇り高く、なおかつ、民に畏怖・畏敬される王族として……次世代の王の候補として」

「そうだね……」視線を虚空から兄に移してシャンティは言った。

「そんな、おおよそ崇高で誉れ高い大義名分……全く持つて、糞くらえだけれども、それでも戦わなくちゃならないのは事実だ」

ジャーニイはシャンティのすぐ近くまで寄ってきて、馬の上から手を伸ばした。ジャーニイが近くの兵士に「おれの馬に乗せる。手伝ってやれ」と言うと、一人の近衛兵が馬を下りてシャンティの足を持ち上げた。

この時代にはまだ鎧が発明されておらず、乗るのにも人の手を借りなければならぬ。この鎧がないばかりに、この時代に騎乗には色々な弊害が発生していた。が、話からそれるので詳しくは話さない。

で、シャンティがジャーニイの馬の背中に乗り終えると、ちょうどある知らせが届いた。知らせを届けたのはシャンティの忠実な側仕え、つまりは侍従であり、さらにはシャンティの近衛兵団の隊長であり、はたまた家庭教師でもある頬髭びつりのウィス力だった。

「ジャーニイ様、シャンティ様」

ウィス力は少し慌てた様子で馬を走らせてきた。

「ウイスカ、どうしたんだい？」シャンティが身を乗り出して聞く。馬上が不安定になって、ジャーニイはちょっとシャンティを怒った。怒りはシャンティだけでなく、近衛兵団の隊長の身分でありながら自分の主のもとを離れたウイスカにも及ぶ。「ああ、もう。はいはい、わかったよ。小言なら後で聞くから。それよりも、今回は先にウイスカの話しを聞こう。で、ウイスカ？」

要件は？

「はい。実は、つい先ほど私の息子が、ここから少し離れた所で二人のカバルス人を見つけまして、その片方が軍人でございます。で、もう片方が、少し衣類が汚れておりますが、私が見た感じではおそらく……カバルスの王族かと思われます」

シャンティとジャーニイは目を丸くして見合わせた。目が合うと同時に頷きあつて、すぐに現場に案内するようにウイスカに頼んだ。「はっ、こちらでございます」

ウイスカは馬の腹を蹴りながら、手綱を引く。自分の体の一部のように馬をひよいと操って、目的地の方向に翻る。彼はシャンティたちに目配せして、もう一度馬の腹を蹴った。目的に向けて走りだした彼の後を追ってシャンティとジャーニイ、そして彼の近衛兵団も馬の腹を蹴って駆けだす。

一行は障害物のように死体が散乱する草原を走った。ウイスカを追いかけて始めてしばらくすると、シャンティはそこいら中からぼきぼき、と軽快な音がするのに気がついた。ちらりと下を向いてみると、ジャーニイ含む、全ての騎兵が死体の骨を遠慮もなく踏みならしている音だと知った。

シャンティは肝を冷やし、大声で「止まれ」の声を発したが、ほとんど間をおかずにジャーニイは「いや、止まるな」の声を発した。近衛兵たちは自分たちの主であるジャーニイの命令通り馬を走らせ続けていたが、やはり、少し困惑した表情を浮かべた。近衛兵団の中にいたジャーニイの侍従であり、さらにはジャーニイの近衛兵団の隊長であり、はたまた家庭教師でもある顎鬚びっしりのベアード

は、私は慣れたものだ、と言う感じに苦笑を浮かべていた。

ついでの話だけれど、シャンティとジャーニイの両従者は共にバルムという姓であるが、二人に血縁関係はない。

そうこうしているうちにシャンティとジャーニイの喧嘩が始まっていた。

「ジ、ジニー。何をやっているのかわかっているのか？ ジニー、彼らは」と、シャンティは顔を真っ青にしながら死体を指さした。

「彼らは終戦が決まると同時に、カバルスの人たちによって回収され、それぞれがそれぞれの家族の下に戻って行くんだ。それなのにっ」

「うるさい、今はそれどころじゃない。だいたい、カバルスの兵隊など」

「カバルス人だけじゃなくて、サウルス人も踏んでるよ、君は」

「それならば、死体などを気遣ってそろりそろりと歩けというのか？ ふざけるな！ この数の騎兵がそんなことをしてみる、王家の誉れも一瞬にして地に落ちるわ！」

「誉れ？ ああ、我が兄にしてなんとも愚かなで浅慮な発言だ！

何が誉れだ。自尊心、自尊心の間違いだろう？」

「愚かで浅慮？ まるで、自分の頭脳は賢しく明晰であるような言い方だがな、お前なんぞは本の読み過ぎで、いつまでたってもお子様な幻想から抜け出せない精神未熟者じゃないか！」

「ああ！ 君、ぼくならまだしも、偉大なる先人たちの残した金言や知識、知恵、思想をも侮辱するなんて……暴言だ、それは暴言だぞ。頼むから取り消してくれ、そうじゃないと後ろから……」

「御二方、つきましたぞ！」二人の喧嘩を仲裁したのはシャンティの侍従ウィスカだった。

二人は一旦休戦ということにして、本来の目的である戦場後に迷い込んだカバルス人の方に集中することにした。

二人のカバルス人の姿は馬の上からでは見えなかった。なぜならカバルス人がいるであろう所にはシャンティの近衛兵団が群がって

いたからだ。シャンティが「開けてくれないか？」と優しいげに命令すると、彼を主と認める近衛兵団は左右に開いて道を作った。

道の奥にはカバルス軍の軍装をつけた大きな体の男がいて、その大きな背中にいる、フードをかぶった小柄な人を隠すように胸を張って立っていた。

彼の髪は白髪交じりの黒い髪、短く切りそろえられたそれはツンツンにとんがっている。目は黒く、鋭く、多くの敵兵に囲まれているのに、その瞳のどこにも恐怖心は見えなかった。右手にはカバルス地方特有の形をなした剣が握られ、その切っ先は地面に向けられている。口元は、口角が上がっている。微笑んでいるようだった。髪のにこそ白髪は交じっているが、彼自身の体つきは若者のそれである。

シャンティが応対すべく馬を下りると、ジャーニイもなんとなく下りた。本来ならば、敗北国の敵兵を相手にするのだから礼儀を欠こうがどうでもいいはずで、馬の上からでもよかったわけだが、シャンティがあまりにも当たり前のように馬を下りるのでジャーニイも下りてしまった。ジャーニイは地面に足をつけた瞬間、周りの近衛兵団がちよつとざわつくのを見て、自分がつまらないことをしたと気がつき、何となく恥ずかしく思った。とりあえずシャンティを恨むことにした。

シャンティはそんなジャーニイの想いも知らないで、彼の方を向くと小さな声で「ぼくが応対するよ」と微笑みかけた。ジャーニイは敵わないという感じに「どうぞ」と手を指示す。もともと、ジャーニイは言語学が苦手であり、カバルス語もそれほど習熟してはいなかったもので、始めから応対などをするつもりもなかったわけだけれど。

満面の笑みを浮かべてカバルス人の方に振り返ると、シャンティは流暢なカバルス語で挨拶し始めた。

「はじめまして！　ぼくはサウルス地方を治める王族レジエム、の現王シユラクの三男であるシャンティと言います」彼はそれでも無

表情なカバルス人の方へ、彼も恐怖を感じていないかのように歩きます。「いいえ、警戒しないでください。ぼくたちはあなたたちに危害を加えたり、辱めを与えたりは、一切しません。だから、まずその手に握っている剣を離してはいただけないでしょうか？」

シャンティがそこまで言っても通じていないのか、カバルス人は剣を離そうとはしなかった。シャンティは無言のまま彼を見つめ続けた。辺りに重苦しい空気が漂い始める。特に、シャンティの近衛兵団は相手の一挙手一投足を食い入るように見つめていた。彼らのその行動は、シャンティにもしものことがあると自分たちは自害せねばならない、という恐怖から来ている。けれども、もちろんそれだけではない。勤労の一番の理由を上げるならば、この優しく聡明で誰にも分け隔てない王子への愛情こそが、それだと言えるだろう。

カバルス人は沈黙を保ったまま、剣を持ちあげた。近衛兵団が一斉に構え、誰かがシャンティの服を掴んだ。カバルス人は嘲笑のような表情を少し浮かべて、空いている方の手で、自分の剣をつんとつついた。彼は流暢なサウルス語でしゃべった。

「お前の兵士たちが一人残らず剣を地面に捨ててくれるなら、おれも捨ててやる」

「よし、そうしよう」シャンティは間髪いれずに答えを返した。「みんな、剣を地面においてくれ」

兵士たちは啞然としていた。そんな彼と長年連れ添った従者ウィスカも、さすがに何か口を挟もうとしたが、それをするまでもなくジャーニーが怒鳴り声をあげた。

「何が、剣を地面においてくれ、だ。シャンティ、それは勝利国の王族であるおれたちがすることではない」ジャーニーは兵士たちの間を縫いながらシャンティのもとにやってきて、カバルス人の方を睨みつけながら続く言葉を言った。「蛮族の軍人よ。どうやら、お前はサウルス語に通じているみたいだから、この蛮族の地では知識人のようだ。しかしその識者もこの世の道理には通じていないらしい。これから我が高貴なるサウルス国の一州の、その一員とな

るお前に、このおれが直々にこの世の道理というものを教授してやるわ」

そう言うとジャーニイは自分の近衛兵団の方へ向いて命令を発した。

「我が身を守る近衛兵たちよ、我が戦友たちよ、剣を……」そこまですぐの瞬間、ジャーニイの右頬に衝撃が走って、次の瞬間には地面に伏していた。眼前に広がる蒼天を見て、ジャーニイは瞬時に、しまった、敵に先手を取られてしまった、と感じた。

しかしそうではなかった。カバルス人はさっきのポーズからちよつとも動いてはいない。けれども、さっきまでとは違い、顔には少しばかりの驚きの表情が見えた。

「すまない」カバルス人に対してそう言ったシャンティの左の掌はさっきまで、ジャーニイの顔があった所に突き出されていた。ここまですぐ後は言わずもがな。ジャーニイを突き倒したのはシャンティである。「彼はぼくの兄でね、弟想いなのはいいけれども、激情家なのが玉に傷だ。まあ、何もなかったと思ってくれれば、それで万事オーケー。よし、それじゃあ、みんな……」

シャンティが屈託のない笑顔で振り向くと、近衛兵団も、仕方がない、と言う風に苦笑を浮かべて地面に剣を置いた。

「待て、待て待て」ジャーニイは顔を真っ赤にして立ちあがった。マントについた土を払い、胸に手を当てて息を落ち着け、準備が整うとカバルス人を指さして例のごとく怒鳴りを上げた。「なんで、そんなことをする。おれを地面に押し倒してまで、なぜ蛮族の言うことを聞く。シャンティ？ おれたちは勝利者だぞ、奴らは敗北者だ。これから奴らの国を潰し、奴らを我らの配下となす。そうなれば奴らの全ての生殺与奪の権利はおれたちにあり、人種として高みにあるのはサウルス人だと、証明せしめて、遥かなる歴史の上にも、既成事実然とそれを刻みつける。そんなおれたちが、なぜ………考えても見ろ、奴のあの態度は侮辱罪だぞ。違うか？ どうだ？」

「ぜんぜん違うね。というか、君の言葉は全くもって聞くに堪えない」

い。人種としての高み？ 人種間に高低なんかあるのかい？ ぼくは聞いたことはないぞ。あつたとしても、それがいつわかった。いつだ？ もしかして、今回の戦争でそれが証明されたとでも？ 馬鹿言っちゃあいけない。今回の戦争ではそんなつまらない証明なんてされていない。我々サウルス軍が我々の兵数の三分の一ほどの兵数しかもたないカバルス軍から大損害を受けながらも、なんとか辛勝をもぎ取った……今回の戦争は、その事実しか生んじやいない。人種の優劣など……」

「王族の誇りを！」ジャーニイはシャンティの片手で胸倉をつかむと、さっきの逆襲とばかりに空いている方の手でビンタを打った。

「注入してやる！」

「なにが！」シャンティは胸倉を掴んでいる方に噛みつきながら叫んだ。「誇りだ！」

歴史だなんだ、証明だなんだ、優劣だなんだ、誇りだなんだ、と口走ってはいるものの、それは結局のところ、みつともない兄弟喧嘩でしかなかった。彼らは臆面も恥も外聞もなく、自分を育てた従者の前で、自分を主と認める兵士の前で、はつきりとした身分もわからない異邦人の前で、世にも低俗で微笑ましい戦争をおっはじめた。

「お、王子を」ウイスカとベアードの両従者があたふたしながら兵士に命令した。「王子たちを止める」

上司の声にハツとして、「おお、そうだ。止めなきゃあ」と我に返った近衛兵たちがわらわらと王子たちに取りつき始めると喧嘩は強制的に収まった。けれども当の本人たちはまだやり足りないようで、顔を張らして、一方は泣きじゃくりながら、一方は癇癢を起しながら相手を睨みつけていた。

不意に、地面に金属の落ちる音がした。

「姫」

と、握っていた剣をはたき落とされたカバルス人は、さっきまで自分の後ろに身を潜めていた女性を見つめながら言った。

シャンティは、そのとき初めて、そのカバルス人の瞳に何らかの光が宿ったのを見た。

「ギャロップ、もういいわ。あの方たちは私たちに害を与えるような方々ではないし、それに……」カバルス人の女性は思慮深そうなそれでいて優しい表情を相手に向けて言った。「ええ、もういいの。うん、ここまで……楽しかった」

それに彼女は美しかった。

一人、とある理由から彼女の虜にならなかったシャンティは周りを見渡した。若い兵士も、古参の兵士も、ジャーニイも、誰もが皆、その女性の美しさに見とれていた。息をのんで、目をいっぱいに広げ、頭をからっぽにして、彼女の全てを、自分の頭の中にあるキャンパスに収めようとしているみたいだった。なるほど、衣類をいくらか代えたとしても、日々の生活で身についたその人間の持つ高貴さと言つものはそうそう隠せるものではない。ギャロップと呼ばれた男の顔を見る彼女の顔は、名状しがたい究極さ、と言つものを表わしているようにも思えた。

彼女は熱を持った目でひとしきりギャロップを見つめた後、そつと流れるように目をそらした。ほとんどすべての人々は彼女の仕草だけをつぶさに観察していたが、シャンティだけはギャロップを見ていた。そして、彼は、何十人の兵士たちに剣を突き付けられてもひるみもしなかった軍人ギャロップの何かが崩れるのを見てとった。膨大な数の日記や著作を後世に残したこの筆まめ王子シャンティは、ある日の日記の中にこのような記述をしている。

『ヒツパリオン・ユルシュ……亡国の幻将ギャロップが、戦争のほか唯一愛した者』と。

カバルス人の二人がジャーニイとシャンティの双子の王子に保護されてすぐに、サウルス国とカバルス同盟国間の講和が結ばれた由の報告が知らされた。

この講和の後、カバルス地方に多く存在する部族の内、その大半

の部族を治めカバルス地方の盟主として存在していたカバルス同盟国は独立国としての機能を失うことが決まった。カバルス同盟国はそのとき持っていた領土を全てサウルス国のものとすると同時に、サウルス国の一地域となる。

1・戦場後地にて（後書き）

読みにくいのもご愛嬌、と言つことでもよろしくお願いいたします。

2・サウルス国史

> i 3 1 9 5 3 — 4 0 5 7 <

この時代の数少ない大国であるサウルス国も、誕生した当初は小さな都市でしかなく、また、侵略や征服を繰り返して領土を拡大するような、ある種の病にも似た性質を持ち合わせてはいなかった。

小都市サウルスのあったコミッセオ地方は多種多様な文化の交わる地で、緩衝地帯とも言えるようなあやふやな地域だった。それは特殊な立地に端を発している。

そのコミッセオ地方より遙か遙か東にはウアズマ地方と呼ばれる華々しい文化を持った地域があった。絨毯などの毛織物や、金細工、農耕法、薬学、戦争学、思想……多くの物が生み出され、それは高い山や灼熱の砂漠や流れの急な川や深く険しい森を越えて、さらにコミッセオ地方のすぐ東の、常時民族間で戦争を起こしあっている蛮族の地・小ウアズマ地方を越えてやっと西のコミッセオに伝えられた。

> i 3 1 9 5 4 — 4 0 5 7 <

そのコミッセオ地方と小ウアズマ地方を陸路で結ぶ道は呆れるほどに少ない。と言うよりもほぼ一本しかない。通称 竜の鼻の穴と呼ばれる一本道は、南北の海がこの二つの地方を切り離そうとするように、ぐくぐつと陸地に食い込んでいて生きている。その一本道もそうたやすく踏破できるようなものではなく、大集団での移動が困難なので、その時代の後進地方であったコミッセオは他の蛮族たちからの侵略を受けないで済んだ。

コミッセオの北には優れた建築技術と教育制度、さらには解剖学、地図学の知識を持つモーキリニア地方がある。さらに言えばその北には偉大なる遠征王が築いた国があったがこれはあまり関係ない。それで話を戻すが、コミッセオとモーキリニアを結ぶのも海によって自然に作られた一本道で、これはコミッセオの北西にある。し

かし、この一本道はそれほど険しくはなく、たびたび北からの侵略を受けていたので、コミッセオの北部に栄えていた王国カンプトケファレは防衛を容易にするために海をつなげて小さな川を作った。

潮の川 と呼ばれるこの防衛線はうまく機能した。

西には、からりとした風土のカバルス地方があった。騎馬技術と牧畜の知恵が蓄積されており、草原の多さなどから良馬の産地としても知られている。コミッセオとカバルスをつなぐ道はいくらもあるが、世界地図を見ると、やはり海によって陸地がきゅっとすぼまっているように見える。

つまるところ、コミッセオ地方は訪れるための通路の小ささと少なさから他地方からの侵略を受けにくい性質を持っていたのだ。そして文化と知識を有した人間の往来は何とかできるせいか、各地の文化が入り混じったあやふやな特色を持つことになる。

もう一度地図で見てみる。少しすれば気が付くが、コミッセオ地方は竜の頭のような面白い形をしており、前述の 竜の鼻の穴 と言う一本道も、ちょうど竜の鼻に見える辺りに道があるから称されたものである。この地方は地図技術の進化した中世にはその形から竜頭地方とも呼ばれ、豊かな文化の発信地に成長していた。

さて、話を小都市サウルスに戻す。

小都市サウルスは聖獣信仰せいじゅうのしんぎょうの対象を竜としている小都市で、コミッセオ地方の中心近くに存在していた。その立地のせいかコミッセオ内に存立する数国からたびたび略奪を受けたり、国同士の戦争の宿营地などとして都市の宿舎と食料を差し出すことを強要されたりした。

サウルスの長であったサウルス・ジャクナー世はその状況を打破するために富みを蓄え、兵士を鍛え、他国との戦争より疲弊していたコミッセオ南部グナトウス王国に侵攻した。一三二年の冬のことである。

彼らが掲げた旗は深紅に染め抜かれた布に竜の紋様もんようが金糸で縫い

付けられていた。それを見た兵士隊は自分たちが聖獣に守られているのだと確信した。団結力高き彼ら歩兵の密集隊形によりグナトウスは瞬く間に落とされた。ジャクナ一世はグナトウス王族と貴族を抹殺し、代わりに自分の親族を領主とした。ジャクナ一世は誉れある歩兵部隊と共に小都市サウルスに凱旋し、市民に歓呼と（冬の時節にどうやって手に入れたのか）花吹雪で迎えられた。さらに新王国サウルス建国の由をコミッセオ内の各王国に到達する。グナトウスはサウルス国南部グナトウス地域と呼ばれることになる。

さて、地味豊かな南部の土地を手にしたことで彼らの国力は大きく増大したが、ジャクナ一世の親族はグナトウスの統治に失敗。グナトウスの民衆は暴徒と化した。一三七年、ジャクナ一世は嫡男のジャクナ二世を派遣し、彼はまだ若いにもかかわらず、父の期待にこたえてその翌年に暴動を治める。

ジャクナ一世の執った「前支配者の血筋の抹消」という行動は後世に書かれた「君主論」にしてみれば満点を与えられるものだった。しかし、この時グナトウスの鎮定にあたったジャクナ二世は「今回の南部暴動は、元からいた支配者を全て殺してしまったせいだ」と考え、これを何らかの書物に記録しているが、何に記録したのかはわからない。けれどもこれが後のサウルス国の領地支配方法の確立につながる。

ジャクナ二世が南部を平穏に治めているのを見た父ジャクナ一世は彼に王位を譲ることを決意し、ジャクナ二世は一四三年に戴冠を果たした。

ジャクナ二世はグナトウスを気に掛けながらサウルス国をうまく統治していくが、コミッセオ北部の王国カンプトケファレからのたびたびの侵攻には辟易していたようだった。

他国からの侵略行為に頭を悩ます父を見て育ったシハルクは「豊かな国力を持つ国は他国からの侵略の的にされやすい」という事実を知る。同時に「自国の平和を維持するために他国との戦争を辞さない」という彼の、否や、サウルス国の理念を確立した。

シハルクは後のことを考え早くから軍隊の育成に努めていた。中でも、戦争に際して自分の周りにいて自分を守り、時には自分の命令を忠実に聞き、その通りに戦争をコントロールする心身ともに屈強な精鋭兵団の育成を重視した。これは後の近衛兵団の走りである。彼は一七一年の王位継承の戴冠式の後、すぐに北部に進攻しようとし始めた。

が、過去の南部鎮定の際にグナトウス民に色々な優遇を与え、その後も民に尽くしてくれた名君ジャクナ二世の引退と共に、南部民の間に次王への不安感が強まってくる。それはすぐに広がって南部グナトウスではまたしても反乱が起こった。彼はまず、その鎮定をしなければならなかった。サウルス軍とグナトウス反乱軍の間で一度の会戦が行われた。この時の戦況はコミツセオ地方の他の二国のスパイによって各々の国に伝えられ、その内容を聞いた二国の王族は戦々恐々とした。それほどにサウルス軍の力はすさまじかったのだ。

南部鎮定後すぐに北部に向かったシハルクはじわじわとカンプトケファレ国を侵略していった。カンプトケファレはこの侵攻を予期しており（サウルスが小都市だった頃、彼らを一番いじめていたのが南部の国グナトウスと北部の国カンプトケファレだったから）、国内のいたるところに防備軍を敷いていたが、それでもサウルス軍の猛攻は止められなかった。

シハルクとサウルス軍はついにカンプトケファレの王都ウチノホークをぐるりと囲い、攻城戦を開始。数日後には陥落せしめ、シハルクは兵たちに二日の略奪を許すとともに、カンプトケファレとの「講和」を結んだ。

シハルクは前述したジャクナ二世の考えを残したメモをすでに読んでおり、カンプトケファレ国の王族を民衆の前ですぐに斬首するようなことはなかった。しかし、彼はカンプトケファレ王族を殺す。ただ、その行為に対して、カンプトケファレ民に王族殺しを認めさせる、ある程度の正当性を求めていた。

彼はまず自国の法廷にカンプトケファレ王族を呼びよせ、そこで今回の戦争の責任としての処刑を要求し、当たり前だが、これが法廷によって認められる。シハルクは法律の上でカンプトケファレ王族と今回の戦争に加わった上級將軍たちを戦争犯罪人として処罰することを発表した。同時に、カンプトケファレ内の親サウルス派の貴族を「サウルス国北部カンプトケファレ地域監督者」として取立て、その上にフィクサーのような立場としてサウルス王族を「カンプトケファレ総督」と言う役職で置いた。これが功を奏してくるとシハルクは南部にも同じ処置を施そうとするが、南部は王族だけでなく、その他の貴族も全て殺されていたせいで実施できなかった。それでも一部の北部市民の不安は収まらず、シハルクが北部市民の保護を法律として公布すると、市民はやつと彼らを新たな支配者と認め始めた。

シハルクは国内で大きな裁判が起こった時は自ら出向き、公正なしかし、ややサウルス側よりの判定を下した。それでも、この時代においては他の裁判官と比べ相対的に公正な裁判を行っていたせい、彼は後に「法務王」と冠されることもある。

北部の治安が穏やかになり始めた一七四年の夏頃、シハルクはまだ幼い息子たちを書記などの役職で従軍させコミッセオ東部を支配していたヘドロケラス王国に侵攻し、^{またた}瞬^まく間にこれを成功させる。ヘドロケラスの統治にも今までと同じ方法を取り、この国をサウルス国の一部とした由をコミッセオ地方全域に公布した。つまりは、サウルス国はコミッセオ地方を平らげたわけである。

この事実^に気を良くした彼は「コミッセオ地方をサウルス地方と称するように」との書簡を小ウアズマ、モーキリニア、北の王国群カバルスの各地方に送った。これより先、現在に至るまで元コミッセオだったこの地方はサウルス地方と呼ばれることになる。

サウルス地方を併呑し、サウルス地方各地域の平和を維持し始める政策を施し始めると、シハルクの自由な時間は格段に増えた。そうなるにつまらないことを考えてしまうのが人の常である。

「……各国から考えて私たちの都は、サウルス地方のサウルス国の中央部の王都サウルスとなる」シハルクは何となくそれが嫌だった。「新しく決めた名前に関する法律では、公で名乗るとき出身地域名、出身町村名、家名、そして自分の名前を順々に言うことになっている。となると、私の名前は……サウルス・サウルス・サウルス・シハルクとなる」

大体、サウルスと言う名前はサウルスの王族の身が使えたものであったはずが、新しい法律では、出身地によつては一般人にも使われるようになる。そうになると、サウルスの名前も羨望のまなざしでは見られなくなるのだ。

「まあ……しかし、サウルスの名が庶民に溶け込むいい機会かもしれない」

シハルクは簡単にその不満を投げ出して、次には「いつそ、自分の名前をサウルスにし、サウルス・サウルス・サウルス・サウルスとして箔をつけようかしらん」とも思ったが、子供たちが何となく居た堪れなくなってやめた。彼の名前に関する葛藤は息子たちへの手紙の中で書かれており、この話は中世に「シハルク王の葛藤」と言う名の喜劇として発表された。

話しを戻す。それで結局、彼は他を変えることにした。

まず、王都をその時より少し北に建設し始め、そこを新王都「センチュリオン」とした。これで彼の名前はサウルス・センチュリオン・サウルス・シハルクとなった。

こうなると間に挟まれたサウルスがみずばらしい。彼は新しい家名を考えることにした。サウルスと言う家名を捨てるのは先人への無礼に当たるかもしれないとは感じたが、最初にサウルスがあるので、その時感じたことには目をつぶることにした。

彼は、王の意味がある「レジエム」を家名にすることに決め、これでサウルス・センチュリオン・レジエム・シハルクの名前が出来上がった。

一八〇年から建設を開始したセンチュリオンは一八九年に完成。

少し長くなつたが、サウルス国の基盤はこのように出来上がったことになる。

シハルクの次の王がシャンティたちの父親であるシュラクであつた。ライオンの鬣たてがみのような、金髪でばさばさの髪の毛と髭ひげを持つた彼は、シハルクが東部ヘドロケラス国を攻めた時に、些細な役職で従軍した三人の息子の末弟であつた。

彼はその後、各地の小さな反乱などを素早く鎮定した武功や軍内で高まつた名声によつてシハルクから次王に選出される。次王に選出された時、彼はすでに三十歳を越えていた。

一九八年、シュラク三十二歳の春。戴冠と共に彼はサウルス地方を飛び出した。二人の兄や先祖の育てた兵隊たちと共に東へ向かい、竜の鼻の穴の一本道を通り小ウアズマ地方に侵略を開始した。

まだ小部族同士で交戦していた時代の小ウアズマ兵などはサウルス軍の敵にならなかつた。サウルス軍は、まるで足元の小石を蹴飛ばすように小ウアズマ兵を撃退していった。

どんどん小ウアズマの奥地へ進んでいったが、それがまづかつた。勝手知らぬ奥地に踏み込み過ぎ、さらに、完全に支配したと思つた部族の反乱からサウルス軍の補給線は分断された。彼らは現地調達により何とか食いつなごうとし、少数単で各地の村を荒らしまわつたが、それもいけなかつた。各地の村の戦士たちは珍しく手を取り合つて自警団を組み、地の利を生かしたゲリラ作戦に出た。

サウルス軍は苦境に立たされた。雨が常時しとすと降る小ウアズマでは、大勢で固まっていると糞尿の始末などのせいで衛生状態は急激に悪くなる。食料部族のせいで十分な栄養を取れず、一度病が発生するとその感染拡大を止める術もなかつた。

二〇三年。五年にも及ぶ遠征の末、ついにシュラク王はサウルス地方への撤退を決意。サウルス軍はゲリラに応戦しながら何とか竜の鼻の穴を通つたが彼の二人の兄はすでに死んでいた。これに関して、現代の歴史研究家は『シュラクは目の上のたんこぶで、さらに

は近未来的に脅威にもなりうる二人の兄をこの逃亡劇の最中に殺した。なぜなら、まとまりのない蛮族相手にこのような大敗を喫してしまったのだから、帰った際には兄への譲位を求められる危険性が出てくるからである。現に、軍部内ではすでに二人の兄を取り巻く派閥が出来上がっていた』と記述している。この記述の正誤はわからないが、事実としてサウルス軍は初めての敗北を喫してしまった。シュラクはサウルス国に戻ると、反乱が起こらないように気を配った。まず竜の鼻の穴に大きな砦を設け、小ウアズマの蛮族が侵攻してこないようにして、国内の不安を和らげた。さらに各地域を親善訪問し、「この先十数年は他国・他地方への侵略を行うことをせず、国内のさらなる発展に取り組むことを約束する」と演説してまわった。

そんな二〇四年頃、シュラクは三十八歳にして初めての子供を手に入れた。燃えるような赤色の毛を生やした男の子であった。彼はジャクナ三世と名付けられ、シュラクは隠されていた親馬鹿の才を発揮して彼を可愛がった。その二年後には他の妃との間に双子の男の子が生まれる。兄の方がジャーニィで弟がシャンティである。王位継承権第一位はジャクナ三世。第二位はジャーニィ。第三位はシャンティとされた。この後もシュラクは数人子供を作った。

二二四年、嫡男ジャクナが二十歳になったに際し、西のカバルス地方への侵攻を開始する。小ウアズマとの戦さに使う馬を求めての行動である。そして、その遠征にはジャクナ王子と双子の王子も將軍として参加することになる。

2・サウルス国史（後書き）

名前の語順からすると、サウルス国では日本語みたいな語順の言葉を使っているんだろうか。とか考えてはいけません。僕は深く考えてないのです。

3・シャンティとギャロップ

> i 3 2 0 0 5 — 4 0 5 7 <

シャンティ王子が手に持つ「西方馬族」という名うたれたパピルス製の巻物にはこんな内容が書かれている。

『カバルス地方。良馬や毛類の産地にして狩猟民族、遊牧民族の多く住む地方。そこに住む多くの部族は、古来お互いのことをあまり気にせず自由に暮らしていた。けれどもカバルスから南にだいぶん行った所に存在するイハテリオ地方に存在する一国・ナランの技術者がこの地方に訪れ、一つ所に住み始める様になると、遊牧民たちはその技術に感心し、徐々に彼ら技術者と共に都市を形作ることになる。都市と呼ばれ出した頃には、すでに彼らは一角獣を聖獣として信仰していた。』

『都市を作る時に尽力したヒツパリオン族はこの都市の有力者となる。都市が栄え始めると、その富に惹かれた貧困部族が都市を襲撃し始めた。ヒツパリオン族はこれを撃退していくが、都市への襲撃はその苛烈さを増していく。ヒツパリオン族はカバルス東部で最強とされていたエウクス族に対し助力を求める書簡を送り、カバルス族は都市のために傭兵として働き、その見返りとして富を享受していく。』

『ヒツパリオン族は技術者（この時には職人と呼ばれ始めている）と話し合い、貧困部族の受け入れを始め、彼らには馬を捨てさせる代わりに都市の衛生管理などの職を与えた。』

『多くの部族を手際よくまとめ上げたヒツパリオン族はその功績により族長とその家族を王族として、最初期からいた部族の有力者を貴族として都市市民から認められることになる。彼らは名無しだった都市をヒツパリオンと名付け、同時にそこを王都としてカバルス同盟国を立ち上げる。』

『カバルス同盟国は来るもの拒まず、去る者追わずの自由な環境だ

った。国内の法律や大規模な工事は話し合い、つまり議会によって決定されていた。この議会での最有力者はヒツパリオン王族と貴族階級。次に有力なのは職業ごとに代表者を投票で決めて適時選出される多数の職人議員。市民が代表を投票で決めて適時選出される少数の市民議員。』

この部分はかなり重要である。詳しくこの後の「西方馬賊」を読めば彼らのそれが、寡頭制の民主主義とはやや異なっているのがわかる。とはいえ、王族の票と市民議員の票の価値には差があったらしい。まあ、「民主主義的な君主制」ということだろう。

『他の有力者は軍人である。彼らは都市の外に本拠地を置く民族がらなり、多くの民族がいるが、その代表がエウクス族である。彼らはその強さと職業的な態度から 生まれながらの傭兵 とも称される。彼ら軍人は、一定期間毎に交代で都市に住みこみ、その都市を守る。また有事の際には残りの民族をも結集して軍団を作ることもある。このような大規模な軍事行動の場合にも、議会の決定が必要となる。なお、軍人は議会に参加する権利を有しておらず、これに關しての理由はわからない。』

これに関する理由は後世の著作に詳細が記されており、なんでも、国が作られる以前の議会で軍人が彼らのお得意の暴力により議会を裏から牛耳ろうとしたことがあったらしい。これをした民族は先天^{がらの}の傭兵エウクス族によって掃討された。

文民統制などの政治と軍事の分離は今となつては常識であり、少し考えれば大体の予想はつくし、このすぐ後にほとんど答えを自分で言っているが、この本が書かれた時代には議会すら珍しいものであるから、このような考察の際にはふとした漏れが散見されても仕方のないことではある。

『重要なことは、この議会に参加する議員とその家族、職人の親方階級者とその家族、そして軍人とその家族には王族と結婚する権利が認められていないことである。これは王族が議員と結託して好きに議会を操らないように、王族が軍人と結託して議会をないがしろ

にしないようにするためである。つまり王族の結婚は、王族同士、もしくは貴族との結婚、議員を親族に持たない市民、傭兵業を行わず放牧などで暮らしをする同盟国部族、それらに限られる』

ここでシャンティは巻物を閉じ、少し息を吐いた。

彼はカバルス同盟国の王都ヒツパリオンの離宮のすぐそばにある木陰でそれを読んでいた。同じ木陰で愛馬ルルディファイロは心地よさそうに草の布団に寝転がって眠っていた。

遠くからからの乾いた風が吹いてきた。時刻は昼過ぎで、太陽の光が活発に侵略をしてきて皆を辟易させる頃合いである。けれどもカバルス地方はサウルス地方よりも湿度が低く、気温が暑くてもそれほど気にはならない。

シャンティは木陰から出て辺りを見渡した。草原の国であることは知っていたけれども、都市の様相は思っていたよりもごちゃごちゃとしていて、その賑やかさはセンチュリオンにも負けてはいなかった。それでも建物の姿かたちは質素で、機能性だけを追求しているようで、彼は何となく先進的だと思った。

「王子」と近くにいた従者ウイスカが声をかけた。シャンティが振り向くと、彼は庭におかれた丸テーブルの近くにいて手にポットとコップを握っていた。「ジューズをお持ちしましたが……」

飲みますか？ と訊く前にテーブルのすぐそばに置いてあった椅子に座っていた軍人工ウクス・ギャロップが返事をした。

「ああ、飲もう」彼はそう言うのと、人差し指でちよいちよいとテーブルを指さして、さあ、注げ。とジェスチャーした。敵に囲まれていてもこのように大物然とした態度をとっているが、彼は意外にも若く、歳を聞いてみるとシャンティと二つと離れていなかった。

「よし飲もう」と、シャンティが笑いながらテーブルに寄ってきて、椅子に腰を下ろすと、ウイスカは困ったようにジューズを注ぎ始めた。「ギャロップ、これは、冷水とレンゲのハチミツ、小麦粉、レモンやブドウなどの数種の果汁を混ぜ合わせたものだ。君の国にもこれと同じものはあるかい？」

「似たようなものはある」ギャロップは自分のコップに注がれたジュースを飲んで、少し驚いたような顔をしたが、すぐに平静を装った顔をした。「お前たちサウルス人はいつもこんな贅沢な物を飲んだんか」

「どうだろうか。そう言えば、子供の時はよく飲んでいたな。それと、戦さの前も兵士たちに配る。これは栄養価が高いからね。君たちの国にはそんな習慣はない？」

「カバルスは馬の国だからな、戦さの前と言えば馬の乳だ。良い、乳は良い」ギャロップは虚空を見つめながら哀愁味溢れる感じに言った。「おれも遠出して迷子になった際、食う物も飲む物も無くなった時、馬の乳から馬乳が出たのは感動した。あれ以来、おれの馬は雌馬だ。馬と言えば、お前の馬は駄馬だ」

「いきなりなんだ。いや、大体……そんなことはない！」シャンティは木陰の所にいる愛馬ルルディファイロを熱くぼいまなざしで見ながら言った。「彼は良馬だ、い・い・う・ま・だ。彼はぼくが馬主から貰ってきて、東国の栄養価の高い花を食わせて育てたんだ。だから名前もルルディファイロ！」

花好きという意味である。

「馬鹿言うな、馬ってというのは基本的に、寝るときだって立ったまま寝るもんだ。それなのに、あいつを見る。寝転がったまま本気で寝てやがる。……雌か？」

「いや、雄だ。純然たる雄だ」

「最後の希望が潰えたな」

シャンティは救いを求める様にウイスカの方を見た。ウイスカはそれに関してはギャロップと同意見、と言うように苦笑しながら首を縦に振った。

「ウイスカ、お前もか！」

シャンティとギャロップがここでこうやって和やかに会話しているのは、シャンティが父たちにそれを頼んだからである。

戦場後地から帰ったシャンティたちは、軍人ギャロップと姫ユル

シュを王族や貴族の間に連れていった。まだ講和が決定したばかりなので、ヒツパリオン王族もまだ裁判にはかけられておらず、ユルシュは彼らの元に帰ることになった。一方、軍人であるギャロップは捕虜が集められた場所に行くはずだったがシャンティがそれを引き留め、息子には弱いシュラク王はシャンティに彼を自由にする権利を与えた。

サウルス国はこの後、自国の法律に基づいた裁判をする予定であるが、それは難航しているようだった。サウルス国の戦争後裁判は通常、敵国の王族、貴族など有力者階級、上級將軍などを呼び寄せて、戦争の責任をとらせるものだが、今回の激しい戦争で敵国の隊長階級以上の兵を九十五パーセント以上失っており、大規模指揮をした將軍クラスはひとりも生き残っていないとされていた。その責任をとらせる相手が極端に少なかったのだ。

その事実を知ったサウルス軍内の、同じ処置を受けたことのある地方出身有力者は「今回に関しては、戦争責任はすでにとられているのではないか」とシュラク王に進言した。しかし前支配者の抹殺は新しい領土を治めるためには必要なことである。

「けれども、今回の戦争は今までのそれとは少し毛色が違うんだ」
シャンティはギャロップを励ますような、優しい口調で言った。「今までの戦争ではこんなに多くの兵は死ななかった。自国兵も敵国兵も……。大体、王族の抹消は新領地を治めやすくするためにするための行動だ。けどね、今回、もしこれ以上の仕打ちをカバルス同盟国に求めるものならばそれこそ、カバルス同盟国の人々は黙っていないだろう」

「確かに、カバルス同盟国は三万以上もの死者を出した。けれども！……お前たちは、はん、勝利者のくせに四万人の死者を出した」
ギャロップはシャンティの樂觀思考をはねのける様に言い返す。「こんな様で、カバルス同盟国の有力者に手を出さない、じゃあ、サウルス国側から不満が吹き出るぜ」

「それでも……カバルス地方でまた君たちと戦争をするよりかは、

いくらか楽さ」

シャンティがあっけらかんと皮肉を受け止め、捉えようによってはそれ以上の皮肉にもとれる言葉を、屈託のない笑顔で返すと、ギヤロップはなんだか自分がバカらしくなって顔をそらした。

「ところで……お前はなんでおれを引き取った。まさか、ホモなんじゃあるまいな。悪いが、おれはそんな趣味に付き合うくらいなら死ぬことを選ぶぜ」

「ならば君は一命を取り留めたね、運がいい。なに、ぼくは見ての通り……」シャンティは手に持っていた巻物を見せた。「歴史やら物語やらが好きだね。つまり、ぼくは知りたいのさ、君の物語を……。とはいっても、君の出生時から語ってもらう気はない。いや、後々話してもらうかもしれないが……そんなに睨まないでくれないか？ うん、なに、まあ、で？ 聞かせてくれるかい？ 君が、ユルシュ姫と二人きりであそこにいた理由を」

シャンティがそこまで言うのと、ギヤロップはいつも通りの無表情で彼を見つめた。ウィスカも少し興味があるようでそつと耳を澄ました。シャンティはギヤロップが何も言わないので、再度催促するように、そつと首を傾けた。「言ってくれないのかい」と。

ギヤロップはあごひげをさすりながら言う。

「理由つて……お前、聞かなくてもわかってるはずだぜ。おれは王族を守る軍人なんだぞ。あそこにいたのだって、あいつを逃がすのに良い道だと思っただけさ」

それは、定型文とも取れる発言で、それでもシャンティはがっかりすることもなく返した。

「あの道を選んだ理由はたぶん君の言った通りだろうね。それでも君と彼女の関係はそうじゃないはずだよ」

「その巻物で読んでないのか？」ギヤロップはシャンティの手にある巻物を指さした。

「……君と彼女の関係はこれには載ってない」と言う言葉を、途中まで言っただけで止めた。これは辛辣で卑劣な挑発ともとれ

る言葉だ。「いや……」

「ふん、本当さ」ギャロップの方も、シャンティの中でなんらかの自責の念が生まれたことを感じ取って、気のせいか彼を励ますように言った。「あいつとおれは何でもない。なんせ、王族と軍人だからな」

そう言った後、ギャロップは奇妙に清々しそうな顔つきになった。シャンティはハツとして、思わず巻物を握り締めた。その巻物の中には、王族と軍人の婚姻は認められていない、と書かれている。そしてシャンティは彼のその言葉を聞いて、顔つきを見て、知った。

この人は、まだ彼女に想いすら告げていないんだ。

残酷すぎる。と、彼は齒ぎしりした。さっきはああ言っただけで、おそらくヒツパリオン王族は殺されるのだ。そして彼はこれから先、自分のその想いを、一生告げることもできずに生きていくのだ。そう思うと、ついさっきまで存在すら知らなかったギャロップのための涙が、急に込み上げてきた。

シャンティが突如として泣き始めたのを見てウイス力は駆けよった。彼は、シャンティがどういう考えの果てに泣きだしたのかは知らなかったが、それでも、自分が愛し育てたこの王子が泣くのはいっただって誰かのためだということを彼は誰よりも知っていた。ウイス力はギャロップの方を見た。彼はやはり無表情で、今はもうシャンティすら見ていなかった。

「シャンティ！」怒鳴り声が聞こえた。こうやって怒鳴り声でシャンティを呼ぶと共に現れるのは彼の兄のジャーニー一人しかない。彼は原っぱを全速力で駆けてきて、しくしくと泣く弟の元に馳せ参じた。ウイス力の方を向くと、やけに苛々しながら、怒りを隠しもせずに聞いた。「おい、どうした。何があった。まさか……」

ジャーニーはギャロップの方を見た。ギャロップの方も彼を見かえず。

「まさか」つまらなそうに彼は言った。「勝手に泣きだした」

「ふん」ジャーニーの方もつまらなそうにそっぽを向いた。「そん

な、とこだろうな。……おい、んなことよりも、シャンティ。今回の件、決着がついたぞ」

「……何だって？」シャンティはびっくりとした。潤む瞳をジャーニイに投げかける。「……それで？」

「王族は貴族階級に格下げ、同時に現王はサウルス国西部カバルス地域監督者任命。その他有力者もその地位の剥奪など軽めの刑罰で済み、軍人は……なんせ、末端の奴らばかりだからな、殺しても何の効果もない。……とはいっても、それを決める裁判はこれから行われるわけだから、小さなことは計画と変わってくると思うが」

「……驚いた」シャンティは立ちあがってジャーニイの肩を掴んだ。その顔にはもう涙は浮かんでいなかった。それどころか、晴れ晴れとした表情と眩しいばかりの瞳の輝きを見せていた。「父上たちはなんで、そんなに寛大な処置を？」

するとジャーニイは心底嫌そうな顔を浮かべ、本当に吐き捨てる様に言った。

「ジャクナの進言のせいさ……ジャクナが、ヒッパリオンの姫様に惚れたんだ。そうになると……姫様一人だけ残すわけにはいかないだろう？」シャンティは眉毛を八の字にして、我が耳を疑っているかのような表情をした。ジャーニイはそんな彼のことも見ずに続ける。「我らが兄上、ジャクナ三世王太子はヒッパリオン・ユルシュを手に入れるために、より良き統治方法と、国内主力意見を無視するわけだ！ お笑いだぜ。父上もあんな馬鹿の言うことを聞くだなんて……全く、全く……」

ジャーニイはシャンティの手を払った。彼の機嫌の悪さは、兄であるジャクナの我が儘だけに端を発していないのはシャンティにはわかっていたが、それでも今一番心配だったのはギャロップの様子だった。

彼はギャロップの顔が見られなかった。ずっと不機嫌そうにしていて兄の足元を見てそれをやり過ごそうとした。すると、後ろで彼の立ちあがる音がした。シャンティはすぐさま振り向いた。

「そうか、結婚が決まったか」ギャロツプはやっぱり無表情だった。
「なら、お祝いを言つてやらんといかん」

二二五年。サウルス国、カバルス同盟国の戦争は講和が結ばれて終わった。カバルス戦役 と呼ばれることになるこの戦争の勝利により、サウルス国は新たな領土と良馬を大量に手に入れた。

前述しているが、再度言う。カバルス同盟国はサウルス国西部カバルス地域として独立国としての機能を失うことが決まり、その時持っていた領土を全てサウルス国のものとすると同時に、カバルス国の一地域となる。長い期間をかけてそのノウハウを蓄積してきた民主議会はいとも簡単に取り潰された。

サウルス国王太子（王位継承権第一位）ジャクナ三世はカバルス地域貴族ヒツパリオン・ユルシュを妃として迎え、元王都、現西部首都ヒツパリオンにて派手な祝言を行った。

サウルス軍はその一部をヒツパリオンに残すと帰路についた。手に入れた良馬や財貨や捕虜や奴隷……そして王太子の姫君を連れて戻ってきた彼らはセンチュリオンに凱旋帰国を果たし、彼らはシハルクの作った凱旋門を潜った。

帰国と共にシユラクはサウルス国内各地域の有力者を王都に招き、息子と妃の二度目になる祝言をあげさせた。集まってきた有力者たちは王太子の妃の美しさに驚いているようだった。

この時代の書物の中にこんな話が載っている。『「まさか、あんなに美しく高貴な乙女が蛮族たちの土地にいるなんて」と誰かが言う、それを聞いたある者は「まさか、あんな蛮族の女が高貴な王太子妃の地位にいるなんて」と言った。人々は哄笑して王太子の好色を笑った。』これは、小さな不和の現れで、次王になるであろうジャクナ三世への小さな不信感を証明する言葉だった。

3 シャンティとギャロップ (後書き)

上の画像はシャン太郎ですが、画像でけえ。

4・戦争の真ん中の軍人

> i 3 2 0 3 6 — 4 0 5 7 <

戦争の一年後、二二六年の秋。カバルスの各地では今でも小規模部族の反乱が起こっていたが、サウルス国全体で考えると平穏とも捉えることができた。

御年六十二歳にもなったシユラク王は王都にて、休養をとりながら、次の遠征のことを考えていた。彼はそろそろ王位継承をするべき頃合いだと考えながらもそれを決断できずにいた。彼は王位継承権第一位のジャクナのことを愛していたし、ジャクナはこれまで見る限り戦争もそつなくこなし、政治の才能もあるようだった。しかしふとした瞬間の彼の浅慮がシユラク王を不安にさせるのだった。

現に独断で蛮族の姫を妃に迎えることを決め、その行為を是正するために他の王族を生かすことにした、そのことにだつて民衆たちは、今はもう目に見える形で不満を表し始めている。王都センチュリオン内では息子や親友や恋人をカバルス人に殺された人々が「カバルス人を王都から追い出せ」とふとした拍子に叫んでいる。それはまぎれもなく王太子妃に向けられたものである。

「ジャクナは……。では誰なら？ 第二位のジャーニイや第三位のシャンティは？」と彼は王宮の政務室で独り自問した。「ジャーニイは貴族内での人気もあり、リーダーシップも取れる。戦史の研究にも余念がないし、カバルス戦役が終わってから熱っぽく騎兵の増員を語ってきて新しい物をとりいれようとする向上心もあるでも、自分のことに目が行き過ぎているせいか他の人をぞんざいに扱いすぎる。穏健派にはあまり良い印象を持たれていないようだ。それに反してシャンティは優しく温厚で、多くの臣下からも信頼を集めている。けれども、彼の優しさは平時には大きな才能だが、戦争、侵略、領地拡大を求めるサウルス国にはまだまだ不要だ。それでもシャンティなら今はもう反乱の兆しすら見えない南部グナトウ

スの良き領主、総督として多くの民からも信頼を集めるだろう」

シユラク王はこんなことを考えて、なんだか自分がずいぶん歳をとったことを感じた。

「悩んでいてもしょうがない。……気が付けば、私は六十二歳で、父上の亡くなった歳も越してしまっただが、私はまだ生きることができるだろうさ。なあに、死ぬまでに決めればいい。ゆっくり考えよう。もし突然死んでしまったとしても、あの三人ならうまくやっていけるはずだ。そうだ、私も、三兄弟だったのだ……私たち兄弟も……」

そうやって。今回も結論を先延ばしにすることを決めると、すつと胸が軽くなつて、彼はすうすう息を立てながら昼寝を始めた。

ギャロップはカバルス地域から派遣されたユルシュ姫近衛騎兵隊としてサウルス国に来ていた。とはいえ、サウルス国内の、しかも王都センチュリオンでは彼らの肩身は狭く、訓練一つするのに何度も嫌な思いをしなければならず、ギャロップを除くカバルス騎兵の士気はいまいち高まらずにいた。

ギャロップがむつつりしながら、王太子妃ユルシュのために新たに作られた離宮内をがに股でぶらついて……もとい、がに股でパトリールしていると、向こうの角の所から兵士たちの笑い声が聞こえてきた。ギャロップは来たな、と思ってそこに立ち止った。やがて角を曲がってやってきたのはシャンティだった。彼は長く美しく艶のある豊かな黒髪を持った、鋭い目つききの女性を腕に抱えていた。彼女はシャンティの妻であり、名前をエレと言う。なんでも、すでに六年前も前、つまりはシャンティが十四歳のころから婚約をしていたのだそうで、三年前には結婚式もすませていたそうだった。

「ふん、シャンティ、また嫁を甘やかしているのか。ん？　今回はどういう理由で、そのマダム……エレ様の足代わりになっているのかね？」

ギャロップが笑みを作りながら聞くとシャンティの腕の中にいる

エレが夫を手で制して、代わりに答えた。

「昨日は体形管理のために中庭を散歩しまして、そのせいで今日は筋肉痛ですの。足がぴくぴくして歩きにくいから、こうやって良人におぶってもらっているのですが……あら？ どうしました？ あなたは顔がぴくぴくしていますか、もしかして、あなたも筋肉痛ですか？ 慣れぬ笑顔にもう顔の筋肉が疲れましたの？」

「ははは、いえいえ、そうではありません。まあ、どこかが傷んでいるのは事実です。腹が痛いんですよ、腹が。どうもおれはあなたに会うとなんてか腹が痛くなってしまう病でして、これをあなたの夫に聞きました所、それは精神的なダメージからくる病だ、と言われましてね。なんで、そんなものがあなたと会う時に顔を出すのか……いやはや、さっぱりわかりませんなあ」

「きつと、私の美しさにあてられてストレスを受けておいでなのね。可哀そうに」

「ははは、そうですか。あなたにも他人ひとのことを可哀そうなどと思う心がありましたか」

「わかりました？ 実は可哀そうだななんて思ってますの、私。心根を申しますと、私はあなたのことは良人おっとの持つ駄馬ルルディファイロと同じくらいの生き物だとは思ってないから……」

「ははは」と、シャンティは険悪な仲の二人の会話を中断するために無感情な風に笑った。「で、そろそろいいかい？ じゃあ、ギャロップ、ぼくはエレを義姉様おねえさまの所に送ってくるよ。ふむ、二人とも言い残したことはないようだね？ それなら良い。まあ、ルルディファイロはれっきとした良馬だということを再認識はしておいてほしいけれどね」

シャンティは悲しそうに言うギャロップの横を通り過ぎていった。

カバルス戦役でのカバルス人の勇猛さを聞いた多くの人々は、彼らが自分たちに復讐しに来るのではないかと思っている。時間と共にその恐怖や不信心は徐々に杞憂だったとわかり始めるが、戦役後

まだ一年ほどしかたっていないこの時には、依然として多くの人がカバルス人への不信感・不安感を抱いており、ギャロップが訓練一つに多くの嫌がらせを受けたのも人々のこのような感情が原因だった。

そんな中でシャンティとエレの夫婦は時々こうやってユルシユのもとに訪ねてきては、彼女の話し相手になってくれる稀有な存在だった。

少しすると、ぶらついている……もとい、パトロールしているギャロップの所にシャンティがやってきて彼を呼びとめた。

「やあ、君はまた、ぶらパトロールをしているのかい」シャンティは冷やかすような笑顔で言った。

「否や、パトロぶらつきールをしている。給料は市民の血税から出ている」

「ははは、ならばそのパトロぶらつきール……全力でやらなければ民に申し訳が立たないよ。さあ、一日に離宮を回る回数をもっと増やそうじゃないか」

彼はそう言うところに行くでもなく歩き始めた。ギャロップもそれに従って歩いきながら返す。

「馬鹿言つな。王太子妃の離宮がいつもドタバタしてるんじゃ、トラブルばかり起こっているみたいで逆に外から文句を言われるだろう」

「ふうむ。だから君は、外からの評価をあげるために兵士たちには鎧と剣と槍の切っ先を磨くように言ってるんだね。全く頭のいいことだ。けれども、その工作もこの散歩の最中に考えついたものだろう？　ならば……ああ、頭がくらくらしてきた。人とはここまで矮小になれるものかい」

「まるでおれたただけが悪いように言われるが、お前も十分に血税の無駄遣いをしているはずだと思うが？　駄馬ディファイ口の飯代とかな」

「駄馬ディファイ口……悪いが、ぼくはそんな名前の馬は飼ってい

ない」

「わからんのか、ルルディファイロのことを言っただけだぜ」

「わかってるよ」

「なんだ、ルルディファイロが駄馬だっただけだったのか」

「わかってる、ってのはそっちのことじゃない」

「ふうん」

シャンティとギャロップは、陽光が降り注ぐ離宮の中庭にある回廊に出ると、陰に隠れる様に柱にもたれかかった。柱と柱の間から光の一端が回廊内に差し込んできている。サウルス地方の気温にならないギャロップは、マントを引き寄せて体をくるもうかと思っただけとマントに手を触れた。けれども止めた。それは、彼がまだ戦士の志を忘れておらず、こんな些細なことでも自分を律して自分を鍛えているのだ、とシャンティに思わせる仕草だった。

「この頃、不思議に思うことがある」ギャロップは無表情で切り出した。シャンティは真面目な話が来るのかと思っただけ、そうではなかった。「お前はセンチリオンまでの帰路の間に、ユルシュのよきな貧乳が好きだと常々言っていたが、ところがどっこい、ふたを開けてみるとお前の妻は巨乳だった」

「ふん、君こそ馬やら牛やらと比較したりして、常々、女は巨乳がいいと言っているがね……ところがどっこい、君の好みは貧乳、スレンダータイプだ」

「お前はいつもそう言うけれど、おれはそんなことを言っただけ記憶はないぜ。大体、胸と言うのは母性の象徴であって、それが少ない女というのは母性が少ないということだ」

「そんなことはない。昔、一時期ぼくの家庭教師をしていていた嘶家の先生が胸は小さい方が知的な感じがして良い、と言っていたよ。まだ幼かったばかりもそれを聞いて、先生に対しての深い共感を覚えたんだ」

「つまりは……自分の妻は知的ではない、って暗に言っているわけだけだな。おい、それはいつも自分を尻に敷く妻へのささやかな反

攻だ。お前風に言えば、そそそ、それは君の深層意識がそう言えと言ってるんだよお！」

「まさか、それはぼくの真似？ …… 大体、彼女は十分に知的だよ。まあ、ぼくがプロポーズをした時の彼女は、もつと貧乳スレンダーだったがね」

筆まめ王子シャンティは多くの日記や書物を残している、と前述したが、彼に日記をつけることを勧めたのは家庭教師であり、侍従でもあるウイスカである。今でいう十年日記帳を二年ほどで埋め尽くすといわれる王子シャンティと、それに負けるとも劣らない侍従ウイスカの書いた書物があればこの年代のことは漏れなくわかるといわれたほど彼らの記述は膨大な量であり、また、日常で起こった数々の些細な出来事にもそれは及ぶ。

特に、ウイスカがシャンティ王子の教育の際に考えたこと、思ったことを書き記した「王育記」は近代でも教師諸君に読み継がれる名著であり、シャンティとエレの最初期の性生活を密かに盗み見て書いたとされる「王子と魔女の逢瀬」も同様、近代でも紳士諸君に読み継がれる名著である。

さて、ここではこのような話は枝葉末節であるからして本題に戻る。

シャンティは日記を日課としているが、同時に多読家でもある。彼は、その作文のわかりやすさや読書によって得た多くの知識から王の直接の依頼をよく受けた。それには特定地域の文化の要約の時もあり、この時代の女性の流行りの装飾品、はたまた過去の戦史のまとめ、などなど多様な依頼があった。そして、この時期のシャンティはカバルス戦役の克明な戦史を依頼されていた。

そのような資料は部下に頼めばいくらでも手に入るし、シユラク王は同様のことを書記官や従軍した武官・文官にも依頼していた。けれども彼らはどこまで言っても職業でそれを行っているわけだから、作成された資料の中には王への阿諛あゆ、つまり媚びやへつらいが散見され、ひどい時には、自分の印象を良くしたり、王の怒りを買

わないように「敵軍との遭遇戦、しかし自国軍は損害皆無」などと言うありえない嘘を平気で書き記す。末端で起こった出来事がちゃんと通達されないようなことは、どこでも起こりうる。どんなに規律正しい軍隊でも起こりうる。

シユラク王からしてみれば、そんな中でシャンティは王子の身分であるおかげでそんな阿諛あゆをする心配はない安心できる存在で、元来のオタク的な性質から緻密ちみつで詳細で真実味のある資料をも期待できた。

そのシャンティは今回の戦史を書くにあたって多くの資料を当たり、カバルスの歴史の書をひっくり返し、戦役に参加したサウルス兵、カバルス兵からの聞き取り調査をした。サウルス軍のたった作戦は自国内の軍人に聞けば簡単にそれを知ることができるが、いかせんカバルス軍のたった作戦は（戦場にいたシャンティですら）それがどういいう作戦なのか不明瞭だった。元カバルス同盟国の王族、貴族は「軍事に直接参加してはいないからわからない」の一点張りであるし、戦役を生き延びたカバルス軍の末端の兵士もその作戦の詳細は知らされておらず、西都ヒツパリオンにはその資料すら残されていなかった。もともと、作戦などを紙に残す習慣はないようだった。作戦・戦術の全容を知っているはずの軍部上層部の人々は激しい戦争の中で命を落としていて、調査は行き詰った。

シャンティは残された最後の望みと思って、ギャロップにそれを聞くことにしていた。

「実は今」とシャンティはおずおずと切り出した。「カバルス戦役の詳細な戦史を父上から依頼されているんだけど、カバルス軍のたった作戦の詳細が分からない。君は……それを知らないだろうか？」声に出して聞いてみると、シャンティはほっと胸のつかえが下りたような気がした。ギャロップを見た。彼はいつもと全く変わらないう無表情で、少し寒さに耐える様に身を強張らせる位の反応しかなかった。彼は口を開いた。

「知ってる」そう言った彼の表情は暗く、沈んでいて、同時に何か

を決意している様にも見えた。シャンティは想定していなかった言葉にショックを受けた。否や、想定はしていた。いくらある返答の一つとして待ち構えてはいた。けれども、彼は希望的観測として知らない、の言葉だけをずっと待っていたのだ。「知っているぜ」

シャンティは身を強張らせた。悪寒を感じながら、嫌だ、聞きたくない、と思った。秋風が彼の悪寒を強めた。寒さに耐えられず、彼は柱の陰から出て、ギャロップのいる柱の方へ数歩進んで日向に出た。

「あの戦術は 三本の角戦術 トライコーン と言う名前だ」ギャロップは穏やかな調子ですらすらといった。その最中もシャンティの心は止めろ、と叫んでいた。「不思議なことに、誰もなにも追求しなかったから言わなかったが、おれはあの戦争を指揮した將軍の一人だ。なあ、大体考えても見ろよ。おれの部族名は傭兵エウクス族として名高いエウクスなんだぜ。それにおれは部族の若き戦士にして、エウクス族長のトロットの嫡男だ。……戦争の真ん中にいないはずがない」

「けれども、君の名前の記録はない。どこにもないんだ」彼は調べ上げた事実を口にした。いまだ彼は、ギャロップは口から出まかせを言っているのだと信じていた。

「全軍総司令官たる大將軍の名はトロット。後方援護隊の將軍の名前もトロット。……ここまではあり得るがね、ところがどっこい、予備大隊の將軍名もトロットだ」ギャロップは丁寧な感じに説明を始める。「カバルスはこういうことを紙に残す習慣がないから、こちら辺は調べてもわからなかっただろうがね、後方援護主力隊と騎兵予備大隊は場所も役割も全く違う物だ。物理的に、この二つの指揮は同時にはできない」

「それで……」脳味噌と心臓が必死になって警告を発しているにもかかわらず、彼の勤勉な性質が彼に声を絞り出させた。それ以上言えない、まだ、引き返せるんだ。それ以上言つと、君は殺されてしまつかもしれない。「結局、君は何をしたんだ？」

「何をした？ 馬鹿な質問だ。何をしたも何も……第一、おれがあ

の作戦を立てた」

「この国は！」彼はついに叫んだ。眉を八の字にして、眉間にしわを作りながら説得するように叫んだ。「この国は人柱を求めている。兄の、ジャクナ三世の独断によってカバルスの王族や貴族たちは断罪されずに済んだ。軍人は殺されず、放逐ほうちくされるだけで済んだ。戦役に従軍した我が友人のサウルス兵士たちは、大切な人を失った市民は、これに対して納得していない！汚物と腐葉土ふようどの入り混じる泥のような鬱憤の溜まった心をどうかして晴らしたいと、毎朝毎夜守護聖獣に願っている！」

「それがどうしたって？　はん、おれはカバルスの軍人だ。おれは、あの戦争に関して言えば、やることをやったまで、それだけだ。それは今だってそうだ。おれは今もカバルスの軍人としてカバルスの姫を守る職についている」

「……」ギャロップの言葉の深意を瞬時に理解したシャンティは、血の代わりにひやりとした液体が体中を駆け巡っているのを切に感じていた。この告白には愛すべき人を守る意味があると？「無神経で、無愛想で、不躰で、不真面目で……そのくせ態度呆れるほどの忠誠心。……じゃあ、君はユルシュ義姉様を守るために、義姉様への誹謗や中傷を止めるために、自分が人柱になろうつてのかい？　けれども、君が死んだってカバルス人へのそれは止まらないんじゃないのか？　いや、もっとひどいことになるかもしれない」

「その時は……」ギャロップはすぐには次の言葉が継げなかった。それで、なんとかかんと吐いた次の言葉も、いつも自信満々の彼からしてみればどこか頼りなさげで、弱々（よわよわ）しかった。

「まあ、後のことをお前に頼むとするか」

「ぼくに頼む？　ふん、本当は君が楽になりたいだけじゃないのか？　義姉様おねえさまの悲しむ姿を見たくないだけじゃないのか？　まあ、どうせこんなことをいっても、君はつまらなそうに笑うだけだろうね」シャンティは首を振りながら答えた。「それにぼくの妻は義姉様のことを、珍しく気に入ってるんだ。君が死ぬと義姉様が悲しむ。義

姉様が悲しむとぼくの妻が不機嫌になる。それに……これが一番重要だがね……………君が死ぬのはばくも嫌だ」

「なに言ってる、お前は誰が死んでも嫌な感じを受けるんだろう？　なあお前、この離宮の現実が見えているか？　この国の現状が見えているか？　おいおい、知っているか、ここはどこかしこも平和ばかりだぜ。こんなとこじゃあ、姫を守るのも遊びだ、軍人として戦争なんかは夢のまた夢。もう正直に言っしまおうか？　よし、言っしまおう、シャンティよ。おれはな、生きていても、どうせやることなんか無いのさ」戦争のできないつまらなさ……………そこだけは彼の本当の心情をさらけ出しているようだった。「どうせなら、つまらないなりに、王都とそこに住む人々を守るカバルスの軍人として大功を立てて死にたい。まあ、つまりはそう言うことなんだ。ははは、おれは軍人だってことだ」

シャンティは言葉の通り、心底つまらなそうなギャロップを見て、一つのことを思いついた。

「ならば、軍人らしく振舞えばいい。軍人らしく生きればいい。軍人らしく行動を起こせばいい」シャンティは自分よりも一回り以上大きいギャロップに駆け寄って、彼の肩を掴みながら声を張り上げた。「軍人らしく馬に乗り、やりを突き、剣を振るい、血にまみれ、仲間と自分を叱咤し、鬨の声をあげ、傷つき、倒れ、立ち上がり……戦えばいい！　戦えばいい！　戦場はぼくが用意しよう！　君は、どう言うわけか、あの亡国の幻の將軍なんだろう？　ならばどんなひどい戦場でも、君が、君の言う通り、あの熾烈なカバルス軍の力を最大限にまで引き出す作戦を立てたというのなら、戦えるはずだ！　どんなに劣勢であろうとも勝利をもぎ取れるはずだ！」

「…………」ギャロップの瞳に始めて、確かな光が宿った。それは名誉を得ようとする欲から来るものでもなく、愛する姫を助けることが出来る満足からのものでもなく、もつと原始的な、獣の本性から来る喜びにも似た感情だった。彼は子供のようにつずつずしながら聞いた。その声は純粹素朴そのものだ。「それで？」

どうすればいい？

その質問にシャンティは答えた。

「カバルス戦役、詳細を話してもらおう」

太陽はもう沈もうとしていた。離宮にさしこむ光の色合いは、赤みを増していた。段々と寒くなる気温の中で、彼らは心に熱を持ってこれから起こるであろう苦難の日々に奇妙な期待を抱いていた。

シャンティはこの日の日記にこう記している。

『思えば馬鹿な行動である。独裁的で独善的で利己的である。ぼくは、一人の友人と彼の愛する姫のために、ぼく自身が心底嫌った戦場を用意しようというのだ。彼が本当に亡国の策を立てた幻の將軍ならば、これから先、何人もの人々が虐殺にも見える方法で死ぬ。いや、間違えればギャロップすら死ぬかもしれない。ぼくすら……。それでも、それでも胸が高鳴るのだ。ぼくは間違っている。ぼくのこれは、戦士の心意気でもなければ、何でもない。では何なのだ？ これは、自分の思うまま、我が儘に周りを操れる、つまり王の感じる喜びかもしれない。いや、人知れずに世の中を操る宮廷官人の感じる喜びかもしれない。どちらにせよ、糞食らえだ。ぼくは、本当はどちらもないのだ。王位も権力も。』

『……結局、これは何なんだろうか。この感情にはなんという名があるのだろうか。』

『倒錯？ 惑乱？ それとも、もっと他の何か？』

4・戦争の真ん中の軍人（後書き）

画像はギャロプン。

岩明均さんが「ヘウレーカ」で書いたハンニバル＋若い時のカー
ル・マルクスさん÷2な感じです。
それにしても、話はえー！。

5・シャンティの近衛兵团

> i32071—4057 <

王都センチュリオンから馬で三十分の所にサウルス軍の主な練兵場がある。シハルク前王がセンチュリオンの建設計画を立てたと同時にこの練兵場の場所を定めたので、名前はシハルク練兵場と言う。シハルク練兵場は緩やかな小高い丘がいくつかある平野の中にある。元々草原地帯だったけれども長年の度重なる訓練の結果、草はもう生えてはおらず、地面がむき出しになっていた。

二二六年の秋の昼頃、シハルク練兵場を使用しているのはシャンティを主とする近衛兵团だった。シャンティはその場にはおらず、隊長であるウイスカとその息子の髭なしシェイバスが兵团を取り仕切っていた。

近衛兵团は騎兵とも歩兵ともつかない軍団で、構成員は両方の訓練を受ける。左右方向転換、前方展開、即時密集隊形形成、密集のまま突撃、馬術の訓練をひとしきり練習した後によつと昼休みが訪れる。兵士たちはぐったりした感じで地面に腰を下ろした。地面の土埃もまだおさまらないうちに奴隷が兵士に昼ご飯を配りだす。二十五歳とまだ若く、働き盛りのシェイバスは固いパンを四つ五つ受け取ると、それを噛みちぎりながら父の下に歩み寄った。

「親父殿、少しいいか？」と彼が話しかけた時、ウイスカは古参の兵士とちよつとした打ち合わせをしていた。ウイスカはうん、と頷くと古参の兵士との会話を打ち切って相手に休むように言った。

「なんだ？ なにか問題点でも？」

「いや、近衛の方は……」大丈夫だよ、と彼は休む兵士たちを見た。「それよりも、王子のことだ。ここ最近例のカバルス人とずっと一緒に過ごしているそうじゃないか。親父殿も知つての通り、王都内ではカバルス人への不信感を高めている。いや、それと関わり合う人への不信感も、だ」

「それで？」ウイス力は頬髯をさわさわしながら無関心な風に言った。

「おれは王子のことを考えていつてるんだ。一刻も早く王子を奴から引き離れた方が良い。いったいどんなことを吹き込まれるかわかったもんじゃない」

「何かと思えば……はつきり言おう。なんだかんだ言つて、お前が、市民たち同様にカバルス人を恐れているだけじゃないか」

「……そうだ。そうですよ、親父殿。それでもそんなのは当たり前です」シェイバスは大きく腕を左右に広げる、我慢できないというように振り回す。「おれたち、王子の近衛兵団はそれほど被害を受けていないがね、おれの友人はあのカバルスの戦争で大量に死んだ。友はカバルスの蛮人共に殺された。奴ら蛮人は劣勢になっても決して逃げなかったし、それどころか逆におれたちの陣営に切り込んできた。奴らは何を考えているかわからない、何をするかわからない。そして、ひとたび何かを始めると、それは簡単に止めることはできない。何らかの事件が起こってしまったら、全ては後の祭りになってしまう。王子が奴の凶刃にかかって死んでしまったら取り戻すことはできない。親父殿は王子のことが大切じゃないのですか？」

「私は王子のことを誰よりも大切にしている！」ウイス力は声を荒げた。「しかしギャロップ隊長を退けるのは、違う。シェイバス、それは王子のことを真に想っている者の発言ではないぞ」

「王子が現在納得するならば、近い未来に王子が死んでしまってもそれでいいのですか？ それこそ、違う。それは不忠だ、ただの甘やかしだ。我々は、王子のためならば、その王子にすら厳しくする必要がある！」やがて、親子の争いに気がついた兵士たちが彼らを注視し始めた。それでも彼らはそれを止めようとはしなかった。シェイバスは続ける。「こんなことならば、あんな奴見つけなければよかった。いや、見つけたとしても、そこで二人とも切つてしまえばよかったんだ」

「シェイバス！ 私は」

「親父」シェイバスは父の言葉を遮って言った。目に熱を持った光を携えて、彼は真の忠臣の心意気で叫んだ。「おれは、愛すべきシヤンティ王子こそ次王にふさわしいと思っている、王太子にふさわしいと思っている。確かに、王子は侵略と征服を望むサウルス国には不要かもしれない。それでも、良いじゃないか、王子の代で侵略行為なんて止めればいい。これ以上何を望むのだ。我々は、元コミッセオ地方で現サウルス地方のこの大地の絶対的領主だ。もう一度言おう、これ以上何を望むのだ」

「お、お前は！……それは国に対しての」

「国とはなんだ、親父殿？ 親父殿、おれは王子と歳が近いから子供の頃よく話をした。王子は言ったんだ。国とはなんだ？ とね。

結局、我々はその質問に対する非の打ちどころのない答えなんて見つけられなかった。それでも、ある一つのそれに近い答えには辿り着いた。国富で、民貧し……そんなのは、糞食らえだつてな」シェイバスは幼い頃のことを思い出して、今にも泣きそうな様子で話を続ける。ويس力はその勢いに押されて、何も返すことはできなかった。「今回のことなんて、まさにそれだ。国を豊かにするためにカバルスに進出して、多くの友を失った。愛する人を失った。それなのになんだ、手に入れたものはなんだ？ 馬と、姫だと？ おれたちはそんな者のために国に命を賭けたんじゃない！ 友はもう戻ってこない、カバルスの蛮人共に剣を突き立てられて絶命した愛する者は生き返らない！」

「なぜ……今こんな、こんなところで……」

「ずっと、思っていたんだ。そして、このことを言うのはどこでもよかったんだ。宮廷の賑やかな食事会でもよかったさ。守護聖獣の石像を飾った王都の大広場でもよかった。おれは、もう耐えられないんだ。王子と、底しれぬあの男と一緒にいるのが、見ていられないんだ。いつもひやひやしてるんだ。あの二人と一緒に廊下を渡っているのを居るたびに、心臓が冷たい血液を全身に送るんだ。……わかるだろ？ 大切なんだ……王子が、己の身以上に。あんだ

だって同じはずだ、だのに……」ついにシェイバスは歯ぎしりしながら、怒りの形相で泣きだした。この勇猛果敢な男が、カバルス戦役の最中でもずっと王子の側にいて、彼を守っていたこの男が、こんなに簡単に泣きだすなどと、父は思わなかった。「なぜ、何もしないんだ。親父」

はっとして気が付けば親子の周りに近衛兵団が集まっていて、みんなして神妙な顔をしていた。何百個もの瞳が、何かを懇願するような潤んだ目でウイスルを見ていた。彼らもシェイバスと同じ気持ちなのは一目で瞭然だった。

「……」それでもウイスルは何も返さなかった。彼は、シェイバスの言うこともちゃんと理解していた。何か対策を立てようとしたこともあったし、現にそれを実行しようと思ったこともある。けれど、あの冷徹な無表情を浮かべるだけのギャロップの横で、王子が今まで見たことのない種類の笑顔を浮かべるのを見て、彼はそれを二度、三度と諦めるのだ。

結局、その日の訓練は昼で終わりにになった。

ウイスルは離宮に帰ると冷水で体を洗って、さっぱりした後、離宮内の王子の部屋に向かった。今の時間ならば本を読んでいるところだろう、と彼は考えながら、ギャロップのことを話す決心をつけながら歩いた。

王子の部屋の前で彼は、少し立ち止まって部屋の中の音に耳をすました。中から、話し声が聞こえてきた。王子は独りではない。ウイスルの脳裏にギャロップの顔が浮かび上がった。ごくりと唾を呑んだ。

とんとん、と二回、木製のドアをノックすると、中から「ウイスルだね。どうぞ、入ってくれ」と王子の快活な声が聞こえてきた。ウイスルは顔に汗を浮かべながらそろりと中に入った。

「よくわかったな」

当たり前のように部屋の中にいたギャロップが言った。

「君は足音でどの馬が来たのかわかると言っていたじゃないか。ぼくはノックで誰なのかわかるのさ」と王子は書き物をしながら答えた。

二人は小さなテーブルを間にはさんで、向かい合うように座っていた。夕方と言う時刻のせいで窓からは太陽の光が少ししか差し込んでおらず、テーブルの真ん中には灯心が灯してあった。ウイスカは二人を見て、顔を強張らせた。

「何をしておられるのですか？」とウイスカが訊くと、シャンティは見てくれ、とばかりに書き物を指さした。ウイスカはギャロップに意識を集中しながら、シャンティがしきりに何かを書きこんでいる紙製の紙を覗いた。「……戦争の……」

「そう、カバルスの戦術。三本の角戦術の全貌さ」そう言いながらもシャンティは書くことは止めなかった。紙の中には図や説明文がいっぱいに書きこまれている。少し視線をはずしてみると、他にも注釈文を書きこんだ物があった。「ウイスカ、ぼくはもう大体覚えた。君にも説明してあげようか？　とはいっても、ギャロップに説明してもらった方が幾分手っ取り早いけどね」

ウイスカは、シャンティがシユラク王の依頼でカバルス戦役の詳細な戦史を作成しているのは知っていたが、ギャロップがその協力者だったとは知らなかった。

その男と手を切りなさい、と言えば、王子は何と言うだろうか。「ウイスカ」ウイスカが考え事をしている所に、シャンティがいつもと変わらない穏やかさで話しかけた。ウイスカが改めてシャンティを見た時、彼はペンを置き、頬杖をついていた。「ぼくとギャロップはこれから先、君と近衛兵団に迷惑をかけるかもしれない。それは大体において、ギャロップのせいなんだけれども……」そこで彼は意地悪な笑顔をギャロップに向けた。相手はつまらなそうに半目で睨み返した。「ふふ、それでもどうか、ギャロップの奴を恨まないでほしい。ぼくはね、ウイスカ。ぼくは、自分でちゃんと考えてやってるんだよ？　自分で選んだ道を歩んでいるんだ。ウイスカ

たちを巻き込むのだって、了承してやってるんだ。だからね、恨むならばどうか、ぼくを恨んでほしい」

「……王子は、なにをしようとしているのですか？」

「戦うのさ、カバルス人と。そして、彼らが、ぼくらと大して変わらないただの人間でしかないことを証明するんだ。怖がることはないんだと証明するんだ」

「それだけで……大丈夫でしょうか」

「なに」シャンティは今までにない退廃的な、けれどもどこか整った笑顔を見せた。頭を揺らして、サラサラの髪を揺らしながら優雅な目つきを彼に向ける。「恐怖を取り除けば後は大丈夫。だって、怖いから近づけないんだ」

ああ、恨みようがないじゃないか。と、ウイスカは脱力感に侵されながら思った。あなたの笑顔はどんな意味を持っていたとしても、いつもそうやって人々に底しれない穏やかさを振りまくのだ。安心感を振りまくのだ。

「恐怖を取り除いて、近づけるようになったら大丈夫なんだよ」ペンをいじりながらシャンティは続ける。「だって、嫌いな人とはいつい白熱した討論をして、いつの間にか仲良くなっちゃうなんてよくあることだから」

「なるほど」とギヤロップが唐突に言った。「そうすると、おれは今、お前のことが死ぬほど嫌いだけど、いつかは友人関係になるかもしれないわけか。残念だけど、ありえないなあ……もし、そんな風になるんなら、おれは駄馬ディファイロに蹴られて自害する方を選ぶね」

「それじゃあ、自害にはならないけどね……まあ、ぼくも、我が愛馬に亡国の幻将を討ちとったという戦功がつくことは嬉しいがね。

……ウイスカ？　どうかした？」

「いえ」ウイスカは静かに首を振った。「何でもありません」

ウイスカは結局、今回も彼を説得することを諦めた。で、伏せた眼でテーブルの上の紙を見た。それは王子らしい精緻な文章とわか

りやすい言葉でつづられていて、どこに出しても恥ずかしくない出来の報告書だった。

ウイスカはその報告書と王子を交互に見て、なんだか感傷的になってしまった。この日の日記に、ウイスカは自分の心情を俯瞰して分析した文章を書き記している。

『その紙を見た時、私は思った。おお、これが私の育てた王子だ。私の息子にして、私の宝だ。そう、宝なのだ。私がせっせ、せっせと磨き上げた玉のような彼は、いつか、私の知らない世界を知って、私の手の届かない所に行ってしまう。よくよく今までの自分の悩みを考えてみると、つまるところ、私はそれが恐ろしかったのだ。あの男に私の愛する王子が盗られてしまうのが怖かったのだ。』

この頃からウイスカの日記にはギャロップに関する記述が多くなってくる。それは、自分の息子の親友としてその人間が値するのかわを確認しようとする父親のそれであつた。これは、後に少しの困惑を生む。

カバルスに関する詳細な戦史が完成するのはその一週間後である。これはシャンティとウイスカの日記にも書かれており、間違いはないことである。けれども、シャンティがそれを父に献上したのは冬の終わり頃である。

5・シャンティの近衛兵団（後書き）

画像はどこぞの隊長です。

絵は基本的に下手ですが、その中でも比較的につまいほうの絵は出尽くしたので、ここからは下がり調子です。

6・星を掴む

> i 3 2 1 1 8 — 4 0 5 7 <

二二六年冬。年末年始までまだまだ時間があるその時期、センチ
ユリオンの離宮がにわかに慌ただしくなっていた。それを不思議そ
うに見ていたのはユルシュだった。彼女は、馬へのリスペクトのつ
もりなのか、クリーム色の長髪を結んでポニーテールを作っていた。
彼女が顔をふいと動かすと、滑らかな髪の毛がさらさらと揺れる。

「なんでしょうか？ 最近、侍女たちも忙しそうですけど」ユルシ
ュはテーブルを挟んで目の前に座っているエレに不思議そうに尋ね
た。「知っていますか？」

肌触りの良い絹の服を着たエレはがぶがぶと葡萄酒を飲みながら
言った。

「たしか、有名な……八十歳にもなる哲学の先生が東部ヘドロケラ
ス地域から来るとか何とか……私の良人も目をキラキラさせながら
熱っぽくその先生の聡明さを私に語りかけてきますの。まったく……
：哲学なんて興味ないの、といくら私が言っても、良人^{おっと}はしつこく
哲学を話してくるんです。きっと私を洗脳しようとしていますのよ」
「ふふ」ユルシュはエレを羨ましく思った。彼女は、エレほど自由
で我が儘な女性はここにくるまで見たことがなく、少しの憧れを持
ってエレと接していた。彼女はエレの性格を端的に表わしている二
人の婚約の話しがとても好きで、直接本人の口からは聞いたことが
ないので、その話をするようにせがむのだがエレは決してしない。

その話はこんなである。

シャンティはご存じの通り、サウルス国の王の第三子である。対
してエレは東部ヘドロケラス地域の有力貴族の娘であり、二人は同
じ歳だった。つまり二人はある程度、政略結婚のための一組のカッ
プルとして扱われる立場にあった。だからシャンティは結婚相手の
一人としてエレの名前を何度か聞いていた。

エレの方は昔から同年代の他の子供と比べ達観しているところがあり、自分がお家を保つための政略結婚の道具として使われる運命にあることを知っていて、同時に色々なことを諦めていた。

シャンティの少年時代の日記を見ると結婚に関する記述はほとんどない。彼はときどき『明日は許嫁とされる女性の一人と会うことになっている。』と書いているくらいであり、そのことにはあまり興味がなかったのだろう。エレと会う前日の日記も同じ温度で書かれていて、彼女と会ったその日の日記と見比べてみると、同じ人間が書いたのかと思うくらい文体の勢いが違う。

二人が初めて会ったのは竜の聖獣を祈り奉る祝祭日だった。王都センチュリオンの広場では芸人たちが軽業や見世物を催したりしていた。屋台の数も通常日より何倍も多く、どここの店も競って自分の店を派手に飾り立てた。

エレは貴族である両親や兄弟と一緒に王都に訪れており、王宮内で行われる見世物大会の席でシャンティに出会った。エレは自分の婿となるかもしれない人としてシャンティとジャーニイを紹介された。

エレは二人にそれほど興味はなかった。もしかしたら、この人と結婚するかもしれないかと思っただくらいである。と同時に、王族と結婚できたら贅沢のし放題だわ、などつまらないことを考えながら王宮広場で行われる剣闘大会を眺めていた。けれどもシャンティの方は一目見て彼女にぞっこんだったようで、鼻息を荒くしながら剣闘大会に見入るジャーニイにしつこく彼女の美しさを論じていたそうである。彼はちらちらと彼女に視線を送りながら自分のこの想いに気が付いてくれないかと念じたりもしていた。

エレとその家族が一週間そこら王都に滞在する間にシャンティの淡い想いは彼女にばれていた。エレは自分のことを熱く見る視線に気がついて、王族の身分でそうやって心の底から一人の女性を想ってくれる事実は彼女からしても嬉しいはずなのに、なんとなくツンとつれない態度を返してしまうのだった。

一週間後。彼女は東部ヘドロケラス地域の首都であるアナポリスに帰る時、見送りに来た彼の顔が呆れるくらいみつともないのを見て、この人と一緒にいたいと母性的な愛情を感じた。けれども、やっぱりその想いを表に出すことはできなかった。

その後二年間のシャンティの日記はことあるごとにエレのことを書いている。そして、エレが十四歳の誕生日を迎え、シャンティたちがそれを祝いに東都アナポリスに向かった時には、すでに二人の結婚は決まっていた。

シャンティは「王子の妻は部屋で待っているよ」と相手方の両親から聞かされていたので、できる限りの身支度を整えて、色鮮やかな花束を胸に抱き部屋に会いにいった。きっと、昔のようにツンとした態度でいるのだろうと彼は思った。彼は震える手でノックを二回し、中から返事が返ってくると二回深呼吸してから部屋に入った。エレは果たしてツンとしていたが、その顔には明らかな怒気が含まれているのがわかった。シャンティはおろおろとして何が不満だったのかを尋ねてみたが、それはわからなかった。

その夜、二人のことを祝してパーティーが開かれた。速筆を得意とする画家が呼ばれ、二人は数十分並んで座っていたが、画家が「怖れ多くも申し上げますが……姫様、もっとにこやかにして頂けませんでしょうか」と言うとエレは顔を真っ赤にして立ちあがった。

大股の早歩きで、猛然とどこかに向かって行く新妻をシャンティは真っ青な顔で追いかけて、ついにその腕を捕まえると、エレはくると回転しながら開いている方の手でシャンティの頬を打った。

「あなたは卑怯よ」エレはすさまじい剣幕で叫んだ。「こうやって、権力を使わなければ一人の女も手に入れることはできないの?」

「すまない」大勢の来賓客が見守る中、シャンティはおろおろして今にも泣き出しそうな顔をして、床に膝をつきながら彼女に震える声で謝った。おそらく、一番おろおろしていたのはエレの両親であろうことは、誰にも簡単にわかる。「すまない。ぼくのが嫌いなら、この婚約を今からでも破棄してもかまわない。ぼくは、君た

ちは何も悪くないことをちゃんとお父様に伝えるから……」

「そんなことを言つてない！ 私はこう言ったのです」とエレは床にうなだれるシャンティに言った。「私を愛し、私を欲しているならば、ちゃんと、私と面を突き合わせてそう言いなさい。私は、あなたの口からプロポーズの言葉を聞くまでは、あなたの妻になるつもりはありません。この、意気地無し！」

そこまで聞いてやっと彼はエレの怒りの原因を理解して、ごしごしと腕で涙を拭くと、今度はさつきとは違う意味合いで震える声を出した。

「ヘドロケラス・アナポ……」

「長たらしい名前などいりません。どうせ変わるのだから」

「は、はい。……エレ」とシャンティは彼女の名前を口にしてすぐに顔を真っ赤にした。「ぼくと結婚してほしい」

彼が地面に片膝をついたまま片手を差し出すと、エレはやっと機嫌を直して、花嫁の浮かべる優しげで幸福に満ちた顔を浮かべながら、良人の手をとった。それを見た来賓客は面白い物が見れたと喝采し、指笛を鳴らし、結婚する兩人を祝福した。この話は瞬く間に広がり、男性が片膝をつけて女性にプロポーズするのも流行となった。

ユルシユはその話を思い出し、くすくすと笑いだした。エレはおかしなものでも見るような目で彼女を見て不機嫌そうに「どうしたんですか？」と尋ねた。

「いいえ、何でもありません」とユルシユは口元を覆った。「それよりも、今日こそは御二人の婚約の話をしてもらいます」

「ふん、またそれですか？」エレは蛇のような目でじろりとユルシユを睨みつけた。「そこまでしつこく聞いてくるということは、もうどこかで聞いているんでしょ、絶対にしませんわ」

皺だらけの哲学者、アストロラーボンが王都にやってくると王都はまるで兵士たちが凱旋帰国した時のような壮大な歓迎式典を行っ

た。髭が胸元まで伸びたアストロラーボンの前を音楽隊が歩き、彼は王様然とみこしに担がれて王宮までやってきた。

八十歳を超えている彼は現サウルス王シユラクとその兄弟の家庭教師だった男であり、王太子ジャクナや双子王子も一時期彼から哲学を習っている。彼は今でも時々教壇に立つと、子供のようにはしやぎながら生徒たちと口論するらしい。

けれども十年以上前から何かを著すことは止めているようで、生徒たちが聞いてもその理由は答えなかった。

アストロラーボンを乗せたみこしが王宮の中に入ってくると、そこには彼から教えを受けたことのある人々がずらずらりと並んでいた。皆、シユラク王がアストロラーボンのために集めた人々であり、そのシユラク王は赤い毛氈の上に立って彼を待っていた。赤い毛氈は王宮の入り口からその奥まで続いている。アストロラーボンは従者に手伝ってもらって毛氈の上に足を下ろした。

「先生！」と堪え切れなくなったシユラク王は子供の頃のように恩師に抱きついた。アストロラーボンの老体は彼の知らない間に細っていたけれど、それでも彼は力いっぱい敬愛する哲学者を抱きしめた。「ああ、先生。こんなにお瘦せになつて」

「おいおい、先生が死んでしまう」それを見ていた、燃えるような赤色の毛のジャクナ三世は隣で感動して泣いているシャンティに語りかけた。「久しぶりに会ったというのに、すぐにさよなら、なんてことになつてしまう。なあ、シャンティ。しかし、こう見てみると父上もまだまだ若いな」

「まるで、早く死んでほしいって風に聞こえる言葉ですね」シャンティの隣、ジャクナとは反対方向にいたジャーニイが喧嘩口調で言った。彼はジャクナの方を全く見ていない。「いや、あなたのことだ。もちろんそのつもりで言ったんでしょ？」

「あいも変わらず、無根拠・無意味な邪推が好きだな」ジャクナは余裕の表情でジャーニイを見つめている。「大体、こんな所でおれ

を貶めたつてしょうがないだろ？ おれは、お前が何のためにそんなことを言うのか全くわからないよ。なあ、シャンティ」

「はあ、まあ」間に挟まれているシャンティは、今日くらいは仲良くできないんだろつか、と辟易していた。

ジャクナ三世とジャーニイの兄弟仲はすこぶる悪かった。ジャーニイはほとんど直接的にジャクナに悪言を言っているが、ジャクナの方は仕返しとばかりにジャーニイにつまらない仕事を回したりすることで間接的にジャーニイをいじめている。シャンティも日記内で『どちらが始めにどちらを嫌いになったのかわからないくらいずっと仲が悪い。』と書いており、これによって派閥までできるほどだった。

王太子と言う地位を持つジャクナの派閥は強力なものだったが、それはほとんど「王太子」と言う地位によって築かれているもので、その派閥内の誰もがジャクナの才能には無関心だった。ある意味では彼の基盤は固く、ある意味では脆い物とも言えた。

ジャーニイの派閥も少数ではない。ジャーニイは色々な事柄を革新することを好んでおり、その新進気鋭な感じに惹かれた者がジャーニイの派閥に入った。才覚のみの話をすればジャーニイは申し分なかったし、日々の精進も惜しまないストイックなところがあつたけれども生まれ持った高いプライドが庶民や下賤の者と付き合うことを認められないようで、また、彼は能力のない人間も嫌いで、自分の下につこうとする者は常に能力を確かめて取捨選択していた。

そして、そのジャーニイの派閥はシャンティの持つ派閥よりも少数のものだった。もともと、シャンティは派閥などを作るつもりはなかった。彼は常々父にも「王位などいらない」と言っているくらいだから、彼を取り巻く人々は彼に王位を期待しているわけではない。もちろん、それを期待している者はいる。けれどそれは他の派閥から漏れてしまって仕方なくシャンティを取り巻いているだけにすぎず、彼の派閥内でもそんなものは少数しかない。大多数はただ純真な彼の心根に惹かれた者たちで、この時代この国で穏健派と

呼ばれる者の多くは彼を指示していた。

もともとジャーニイを指示するとシャンティを指示するのでは、根本的に身に降りかかる危機の大きさが違う。

ジャーニイとジャクナは仲が悪いと言ったわけだが、ジャーニイ派に属するとなると、当然ジャクナ派とは相容れぬことになる。その逆も然りである。もしジャクナが王位を継承したならば、ジャクナはジャーニイとその一派を排斥するであろう。これも、その逆も然りである。しかしシャンティはジャーニイともジャクナともうまく付き合っていて、シャンティ派に属するということは、どちらが王権をとっても排斥される危機は無いということである。とはいえ、リスクが少ない分、手に入れるリターンも少ない。もともと、シャンティ派はリターンを期待していない人々しかいないけれども……。「ジャクナ、ジャーニイ、シャンティ」ジャクナとジャーニイが火花を散らし合っているとしユラクが彼らを呼びよせる声がした。三人は各々歩み出てアストロラーボンに挨拶をした。「先生、私……いや、我らが息子たちです。大きくなったでしょう？」

「ん？」アストロラーボンは耳が遠いらしく、手を耳に当ててもう一度言ってくれと催促した。シユラク王が同じことを言っていると、彼は三人を見渡して、うんうんと頷いた。「でかくなった、でかくなつた。皆の話はよく聞いている。ジャクナはカバルス戦役では父と同等の戦力を良く操った。そうだ、カバルスの姫様を妃としたらしいな。おめでとう。ジニーはカバルス戦役初期に兵站で功を為したらしいな。お前の才は戦争には欠かせない。シャンティは……毎月長い手紙を送ってくる」

「え？　ぼくもちゃんと働いたはずですが」シャンティは自分も褒められると思っていたので驚いたように、首を前に出した。アストロラーボンは今回も聞こえなかったのか、ん？　と耳に手をやってので彼は「何でもありません」と返した。

「ははは、嘘じゃ、嘘じゃあ。カバルス戦役でジャクナと共に殿しんがり（軍の最後尾）で行った防御のことも聞いているし……」アストロラー

ボンはいたずらっぽく哄笑するとシャンティにウィンクした。「君の毎月の長い手紙はここ最近のつまらん生活の中で一番の楽しみじや。この前の新料理開発の失敗談などは、本当におかしかった！」
シャンティは頬を染めて恥ずかしそうに頭を掻いた。二人の兄は「思わぬ伏兵、シャンティの勝ちだな」とお互いに目配せをした。
それからアストローボンは昔の教え子に囲まれながらのろのろと王宮内に入った。王宮内ではすでに豪勢な料理が待機しており、まだ手もつけていないのに、続々と追加料理が運ばれてきた。教え子たちはそれぞれに好きな席につき、お互いの近況や学問の成果、新しく発売された本の批評をしあった。

宴もたけなわだった時はシユラク王が裸踊りを踊ったりもしたが、それから数時間後、夜の闇も大分深く濃くなった頃には、葡萄酒などの飲み過ぎのせいで起きている者はほとんどいなかった。シャンティも例外ではなかったが、彼は肩を誰かに揺らされているのに気がついて目を覚ました。肩の方を見ると、寝ぼけ眼のアストローボンがいて、彼は「おしっこ」と一言だけ言った。

シャンティは気怠い体^{けだる}にムチ打って彼を支えながら歩いた。その時に宴場を見渡してみたが、ほとんどの者はダウンしていた。父のシユラク王やジャクナの姿はなくおそらく自室に運ばれて言ったのだろうと思われた。

長い廊下をえっちらおっちら歩いて何とかアストローボンの膀胱爆発の前にトイレについた。この時代の小使用トイレは整備された壁のすぐ下に細い水道が流れているだけであり、その横に腰くらいの高さの水溜があり、小便をすると水溜から柄杓で水を救って、壁の汚れた所を洗い落とす、と言うものだった。

アストローボンにつれだって小便をしたシャンティは自分の壁と先生の壁を洗い落とす。アストローボンは先にトイレを出ようとすでに歩き出していたが、外から人が入ってきて彼らは鉢合わせした。

「巨軀、短髪、黒髪に白髪。ギャロップ……」アストローボンが

そんな言葉を言ったので、シャンティはトイレの入り口の方を見た。ギャロップがいた。

「誰だ？」ギャロップはアストロラーボンを前にして、暗闇で目を凝らしているようだった。「……おれは、あんたなんぞ知らんぞ。おそろくな」

「わしは知つとる。ほれ、あそこにいるわしの教え子が君のことをよく手紙に書いている」アストロラーボンは親指でシャンティを指さした。「君はとても面白い奴だと聞いた」

「そこにいるのはシャンティか？」ギャロップが鋭い目つきで（ただ目を凝らしていただけ）そう聞くので、シャンティは返事をした。すると彼はぶつぶつ言いながら小便を始めた。「まったく、いらんことをおれの知らん奴に書いて送つて。誰だこいつは？ ……………」

ああ、シャンティ、おれの分も流しておいてくれ」

「……ああ、はいはい」シャンティは何か理不尽だ、と思いながらも言われた通りにギャロップの小便を流した。「その人のことを話したことはあるはずだよ？　ぼくの先生で、哲学者のアストロラーボン先生さ。……ところで、なんで君はこんなところにいるんだい？」

「なんで、つて……排泄をせん人間がいるならここに連れて来てもらいたいもんだ」

「排泄をしない人間がもしいるならトイレの存在意義を訝しく思うだろうね。いやいや」そういうことじゃない、とシャンティは首を振る。「ぼくは、なぜトイレにいるんだってことを聞いたんじゃないってば。なんで王宮にいるんだ？　君はユルシユ義姉様の近衛兵だろう？　なんで離宮を離れている？」

「ジャクナが姫をここに呼んだからさ」

「ああ……………」シャンティはいらないことを聞いてしまった、と思つて自責の念にとらわれた。「……………そうか」

トイレを出た所でアストロラーボンはギャロップに話しかけた。

「君はカバルスの軍人らしいね」

「ああ、そうだ」ギャロップは仕方ない、相手をするかという感じに答えを返した。「あんたは何をどこまで知ってる？」

「ギャロップは軍人である。と言うことは知っておる」アストロラーボンは中庭に二人を導いて、そこにあった椅子の上に腰を下ろした。その時、彼の足元がかすかに震えていたのを見たシャンティは羽織っていたマントを脱いでアストロラーボンの肩にかけた。「……あ、そういえば。カバルスには奴隷と言うものが無いそうじゃな。シャンティはそのことで君に手ひどくやられたと手紙に書いていた」
「ああ、そのことか。そのことをコイツに言うと」とギャロップはシャンティを見た。「コイツは……でで、でも、サウルス国は法律により奴隷への給料を定められており、奴隷はそれを貯めてえ、売られた時と同額で自分を買うことができるんだい！ の一点張りだ」

「それ、誰のまね？ ねえ……」シャンティはムスツとしながらギャロップを睨みつけた。アストロラーボンを見てみれば、彼は愉快そうに笑っていた。「先生、ぼくは彼の言ったようなことだけを言ってるわけじゃありません。あの言葉に辿り着くには紆余曲折がある……というよりも、彼はあの言葉に辿り着くように誘導するんです。そしてぼくがさっきのセリフを言っていると彼は」シャンティはのどを抑えて、んん、と咳をした。次には奇妙に野太い声を出した。「またそれか、それは、聞き飽きたぜ！ ぬはは、ぬはは」

「おい、お前、喧嘩売ってんのか？」ギャロップは肩を張ってシャンティに詰め寄った。シャンティは「な、なんだよお」としか返せていない。

「ギャロップ、奴隷は悪いことかね？」アストロラーボンは呟いた。「……」ギャロップは少し表情を変えて、すぐに元の無表情に戻してから反論を開始した。「カバルスでは……人とはもともと自由を約束されているものだ。奴隷はその自由を全て奪われている者だ」
「しかし奴隷があるおかげでこの世はうまく回っている。主人は身の回りの雑多な小事をしなくて済み、仕事に励むことができる。学

者は学問について考える時間が増える。頭のいい者や能力のある者が多くの時間を使えばその分だけ国の利益になる」

「それは違います」ここでシャンティが入ってきた。「先生の言い草では、奴隷は能力が低いから、彼らの時間をもつと能力の高い人々に渡すべきだ、と言う風に取れます。しかし奴隷だって学問をすれば主人と同等の能力を得られるかもしれません」

「君は根本的なことを忘れていないか？ 奴隷と言うものはどのように調達される？ 戦争の敗北国の人々が連れ去られることもある。未発達村落の人々が連れ去られることもある。彼らはつまり、一様に能力がなかったから奴隷になったのだと思わないかい。え？

戦争に負けたのは軍人だ？ たしかにそうだ。でも、彼らの胃を満たすのは農民、武器の生産や発展を成し遂げるのは鍛冶屋、文化を育み知識を蓄えよるずのことに役立てるのは学者……戦争とは国と国との戦いだ。民の能力同士がぶつかり合っているのだ。負けた方はやはり……能力がなかったということになる」

「しかし……」ギャロップが言う。「能力がない奴は奴隷にした方が良く、といったが……戦争で負けた国から連れていかれる奴隷には能力が高い奴もいる。現にカバルスの技術者は能力が高いが奴隷にされた。あんたの理論を曲解すると、これら技術者カバルス人を奴隷にするよりも、そこいら辺の馬鹿な貴族を奴隷にした方がいくらかましじゃないか」

「たしかにそうだ。しまったな、論理が破られてしまった」

「……それで？ ふん、まさか、これで終わりってわけじゃないだろう、大先生。あんたのことはシャンティから聞いてるぜ。高名な先生らしいじゃないか。そんな奴がこんな問答で詰まるってんじや、この世はいまだ暗黒の世紀だ」

「うむ、しかし、さっきの論理は破られたが、あれも一概に間違いとは言えんことを覚えておいてほしいがねえ」アストローボンは顔にいつぱい皺を作って嬉しそうにしている。「実は能力の高い者を奴隷にする利益はある。例えば、技術者奴隷を買い、安値で剣を

作らせる。その剣の売値は利益が出る様に奴隷の経費よりも高くする。そうやって利益を溜めていくと、もう一人奴隷が買える。奴隷はどんどん増えていく。それと同時に、一度に作ることでできる剣の量も増えていくじやろう？」

「いわゆるところの拡大再生産である。」

「それは、奴隷じゃなくてもやれることだ。普通に職人を雇ってもな」

「職人を雇うのでは駄目だ。金がかかり過ぎる。そうになると利益が少なくなり、新しい職人を雇う金を貯めるのにも長い時間がかかる。それとも……カバルスの職人は奴隷よりも安値で働いてくれるのね？」

「……しかし！」と、ギャロップは言いだしたものの、次の言葉が継げなかった。

「そう言えば」とシャンティが感慨深げに口を挟む。「ぼくは同じような会話を昔、先生としたことがある」

それを聞くと、ギャロップはきょとしたような顔つきになり、対してアストロラーボンは嬉しそうに髭を撫で始めた。

「じゃあ」ギャロップは苦虫を噛み潰したような顔つきをした。「奴隷は社会の発展のスピードを促進する。奴隷を使用したほうが良い……ってことが社会の真理なのか？」

「それは違うよ」シャンティは真面目な瞳をきらめかせる。「先生、ぼくも昔はギャロップと同じように思い至って、世の中の不公平さを呪ったりもした。しかし、あくまでもさっきのことは一つの真実に過ぎない。ぼくは考えたんだ。生産を増やす要素は人間の数だけだろうかと。違う、違うんだ。創作に使用する道具の発展も、新技術の誕生も、生産を画期的に増やす。先生、ギャロップ。ぼくは調べたんだ、数少ない資料をひっくり返して。道具発展や技術誕生の歴史を振り返れば、大体において道具の改良や技術の考案なんかは職人がもたらすものだ。いや、奴隷もその二つを発展させたことはある。けれど、職人と奴隷を比較すれば、職人の方が相対的にも絶

対的にも発展や発明の数は多い。奴隷に比べ、職人と言える人口の方が少ないにもかかわらず」

「そうじゃ！」アストロラーボンは人差し指を立てた。「それは、おそらく心の要素が大きく問題しているのだ。自分の望むことをすると人は最大限の力を発揮できる。なあ、シャンティよ。おい、ギャロップよ。導き出した真実はあくまで一つの真実に過ぎない。この世界はたった一つの視点では解明できない。単純な考えでは看破できない。目に見えるものや、目に見えないもの。数字に表わせるもの、表わせないもの。多種多様の複雑なモノが合わさって複雑な一つを作り、それを原料としてまた複雑な何かを作る。ああ、果てしなき問題の数。この世にはびこる無限の問題数の前では悠久の時間があっても足りはしない！」

アストロラーボンは両手を星の支配する夜天に突き出して、まるで何かを取り逃がして悔しがっている獵師の様に手を握り締めた。彼の体中には何かが漲っていた。この八十歳の老人の、やせ細った体のどこに何かがあるというのか。何が、こんな、溢れんばかりのエネルギーを生み出しているのか。シャンティにはそれが不思議でたまらなかった。

「ならばあんたは」ギャロップは無理につまらなそうな風を装っていたが、シャンティには彼の頬がほんのりと赤くなって、彼が高揚しているのが見えていた。「その限られた時間で、どう生きる？ 全てのものと相対する時間は無い。いや、時間があつてたとしても無理なことだつてある」

「そんなの」アストロラーボンはウィンクして、舌をべろりと出して、無邪気な子供のように笑った。「聞いてどうするんだい？ だってそれは、わしただ一人の答えに過ぎないんだから。わしただ一人の真実でしかないんだから」

ギャロップは大きく目を見開いて、口角をあげて、肺の空気を鼻から全部出したんじゃないかというような息を吐いた。何かに深く納得した感じだった。

シャンティは昔のことを思い出した。幼い頃、シャンティは彼の膝でゴロゴロしながら、彼の口走る考えを、目に煌めきを灯しながらおとぎ話を聞くように聞いていた。ふと思いついて「先生はそんなにすごいことを考えているのに、どうして本になさらないのですか？」と聞いただと、アストロラーボンはいたずらっぽい笑みを浮かべながら、彼の耳元で「書いている暇があったら、新しいことを考えたいのさ」と教えてくれた。

先生はずっと考えているのだ。そしてそれは、先生が編み出した、無限の問題数に対抗する術の一つにすぎない。あの人の思う真実の一つに過ぎず、他の誰かにとってはとるに足らないものでもある。

吐く息が、闇の中で白く変わる。自分が興奮しているのが、目に見える形でわかった。

星は霊妙な光を灯し、その代わりに地上の全ての音を吸い取っている雰囲気を出していた。だから限りなく静かで、自分の心臓の音は当たり前のように聞こえ、隣の人の心臓の律動音までもが聞こえてきそうで、それら全ての、ささやかな命の律動の音すらも天の星が吸い取ってしまいそうで、なんだか自分の存在までもが……。

足元がなくなる感じがして、体がぐらりと揺れた。このまま倒れてしまえば宇宙に倒れこめるんじゃないかと思ったけれど、世の中はそんなに甘くなかった。

シャンティは地面にゴツンと頭をぶつけてしまい、宇宙から地上に引き戻されてしまった。

6 星を掴む (後書き)

シャン太郎「そういえば、勤勉に働けば自由になれるという状況ならば奴隷もやる気を出すはずだね」

ギャロプン「やめろ。收拾がつかなくなる」

おじいちゃん「それについてはだね」

ギャロポン「だから、やめろって」

[illegible]

と言うわけで大二病がむくむくと頭をもたげてきました。正直、この回は読まんでいいんじゃないのだろうか。というか、読んでいて自分でも恥ずかしくなります。

画像はアストロのおじいちゃん、プラトン+アインシュタインとかそんな感じです。

最後ら辺はなんか稲垣足穂的な感じ。

7・サウルス・センチュリオン・レジェム・シャンティイ著「カバルス戦役史」

> i 3 2 1 8 4 — 4 0 5 7 <

シャンティイがギャロップの協力を得て作った戦史「カバルス戦役史」をシュラク王に献上したのは、年が明けた二二七年の年明けの冬の終わり頃だった。

シャンティイはシュラク王、ジャクナ三世、ジャーニイ、戦役にも参加した大將軍のエラルジス、そして緒將軍や王族の近衛兵団の將などの軍部関係者が集まる席でそれを父の前に差し出した。その席は和やかな会食の席で、いきなり戦史を差し出されたシュラク王は少しびつくりしているようだった。

シャンティイは父の反応をある程度予測していた。父がその戦史をシャンティイの手から受け取って懷に納めないうちに彼は次の言葉を言った。

「つい先日完成したのです。どうです？ 私は父上がいいというならば、この戦史をここで読み上げようと思うのですが……」

シュラク王は少し訝しんだが、これと言って断る理由もなかった。逡巡しているうちにどこからか「是非ご聞かせ願いたい」の聲が聞こえ、それは次第に連鎖・拡大し始めた。シュラク王ははにかんだ後に許可を出した。

シャンティイは声を張り上げて研究結果を発表し始めた。

レジェム・シャンティイ著の「カバルス戦役史」は要約すれば下記のようなものである。なお、『我々・我ら』とはシャンティイのことではなくサウルス軍全体のことである。

『サウルス地方のすぐ西隣のカバルス地方は馬族と呼ばれる民族が支配する土地である。馬族とは騎馬民族だけを言っているように誤解されるが、実はそうでない部族も多い。現に馬は乗るためだけに使われるわけではない例として、カバルスの山奥の険しい所に住む

ヒラコテリウム族では移動の際に馬には乗らず、馬には荷物を乗せ、人は馬の手綱を引いて歩いて進む。前述のような勘違いをされるのはカバルスの平地の多さに起因していると思われる。平地ではほぼすべての部族が騎馬での移動を行うのだ。』

『また、カバルス人は長距離の武器として主に長弓を基本としているせいか、それを馬上で使うことはほとんどない。馬上で使うには彼らの弓は長すぎる。弓を短くする工夫が考えられた記録もあるが、それはことごとく失敗している。なので、弓は馬から降りて使う物として認識されている。カバルス戦役で長距離攻撃をあまり受けなかったのにはこのような要因がある。』

騎乗射撃のことを言っているが、中世ウアズマでは騎乗射撃を主力攻撃とした民族がその版図を異常な速さで拡大した。彼らは合成弓や動物の骨を使うことによって弓の強さをそのままに、長さを短縮することに成功している。

『さて、本題に入る。話しは我々が二二四年の春にカバルス地方への侵略を開始した所からである。』

『我々はシュラク王をサウルス国遠征軍の総司令官・総大将とし、カバルス地方にはまず六万の兵士を送り込んだ。そのうち二万をレジェム・シュラク王が、二万をガイナ・エラルジス大將軍が、一万をレジェム・ジャクナ三世王太子が、五千をレジェム・ジャーニ王子が、五千をレジェム・シャンティ王子が率いた。』

『カバルス地方に入ってすぐに現れたオロ族、エピ族、メソ族、メリキ族などの部族たちはカバルス同盟国に属していなかった。我らは容易くこれらを打ち破った。しかし、これらを打ち破っても得られた物は少なかった。なぜなら彼らはほとんど文明を持たない者たちだったからである。シュラク王は彼らが後々に反乱をおこさないように、兵士たちに食料や貴重品の略奪、部族民の虐殺や強姦を禁じた。』

『我々はいくつかの野戦用の要塞をいくつか築いた。この際に迅速な行動で堅固要塞を立てたとしてジャーニ王子が恩賞を与えられ

る。』

『要塞が出来上がり後顧の憂いがなくなった我々はさらなる進撃を開始。進撃先では名もない野盗の襲撃が度重なり起こった。我々はこれらの蛮人を捕まえ、拷問にかけ、土地の情報を収集した。』

『大規模戦争などはほとんどないまま我々はカバルス同盟軍の領土内に入り込んだ。侵入してすぐにパラヒ族とミオ族の小規模連合隊が戦いを挑んできた。敵の奇襲戦法などもあったせいで我々は数百の敵騎兵相手に同等の損害を被った。シユラク王は念を入れるために本国に増援を要請する。同時にジャーニイ王子とシャンティ王子を要塞に戻し、その防備を固めさせた。』

『一方、カバルス同盟国王都ヒツパリオンではサウルス軍に関しての会議が始まっていた。彼らは、我々が自国内で大規模移動を始めた時点で戦争をある程度予想していた模様である。そしてオ口族らと我々が交戦しているのを密かに観戦し、サウルス軍の情報を集めていた。』

『ではなぜ、すぐに迎え撃ってこなかったのか。それはカバルス同盟国の議会に原因があった。カバルス同盟国では大規模軍を結成するのには議会での了承が必要であった。そしてカバルス同盟国はそれを結成するかどうかという根本的なところでずっと足踏みが続けていたのだ。結成を指示する者たちは、もちろん自国の防衛手段の一つとしてそれを指示したわけであるが、結成を支持しない者たちは、その結成が決定打となってサウルス軍との交戦を避けられなくなる」と主張した。また、戦争を起こしても負けると予測していたものは後者の指示をし、いかに良い条件で降伏するかを議論するように説いた。』

よくよく考えれば、サウルス国はほとんど何の通告もなくカバルス同盟国に侵略を開始した。現代では宣戦布告と言うものは当たり前であるのを見ると少し不思議かもしれないが、宣戦布告と言う風習はこの時代から後に出来たものであり、この時のサウルス軍の行為は侮蔑に値しない。と言うよりも、サウルス国の建国のことを

考えると、小都市サウルスは宣戦布告もなしに電撃的にグナトウス王国を打ち倒した末に建国を果たしたので、この時のサウルス国としてはこれが当たり前なのだろう。しかし、「あなたの所に戦争に行きますよ」と伝えるのは確におかしいかもしれない。

『カバルス同盟国議会が何の決定も下せずにいる間も我々は進撃を続行。ゲリラには気をつけていたが、敵がその作戦をとり始めるとそれにはなかなか対処ができず、我々の被害は増していった。それでも我々は密集隊形を崩さないように敵領地をじりじりと削り取って進んでいった。この頃になると都市らしきものが現れ始め、我々はそこに蓄えられた財宝や物資を大いに略奪した。』

『二二四年の夏の中頃、我々の下に増援六万を連れたジャーニイ王子とシャンティ王子が駆け付けると、我々は大規模な進撃を開始。合計十二万の軍隊は以下の通り配分される。なお、一軍団は一人である。シュラク王に三個軍団（三万）、ジャクナ三世王太子に三個軍団、エラルジス大將軍に三個軍団、ジャーニイ王子に二個軍団（二個軍団であるが一万五千）、シャンティ王子に二個軍団（ジャーニイと同様、二個軍団であるが一万五千）。』

このあたりで少しサウルス軍についての説明が必要である。しかしこの後にする説明は作中でもはや過去の話で、サウルス軍はカバルス戦役後に軍構造の改革を行っている。

サウルス軍には大きく分けて国軍と自警軍の二つがある。が、今回はそれらに共通した編成についての話をする。

サウルス軍は十人を小隊とし、率いるのは隊長。そして、十個小隊（百人）で中隊とし、率いるのは百人隊長（または百卒長）。十個中隊（千人）で大隊とし、率いるのは千人長（または千卒長）。その上に兵種ごとの隊長がいる。

例えば、軽装弓歩兵隊ならばそのまま弓兵種長となる。それらは軽装弓歩兵（攪乱）隊、槍歩兵（突撃）隊、軽装剣歩兵（追撃）隊、騎兵（殲滅）隊、司令部もとい近衛兵団などに別れ（厳密には工兵や輜重兵などの特殊兵種もある）、全てを統合すると一個軍団（一

万人)になる。軍団を指揮するのは將軍である。(槍歩兵・剣歩兵はサウルス国内での呼称で、一般的には槍歩兵は重装歩兵、剣歩兵は軽装歩兵と呼ばれている。)

ここで軍集団という独特の区分が現れる。これは連隊や師団というより細かい区分がないこの時代のみに使われた区分であり、軍団の一つ上の区分と言うことになる。集まるという意味の言葉が二つあるのはこの時代の適当さを表わしている。つまり、一個軍団をいくつか統合したのが軍集団であり、これは二個軍団の時もあれば、三個軍団、四個軍団の時もあり、その時々によって違う。軍集団を指揮するのは王、王子(王太子)、大將軍、である。これらを合わせてサウルス軍となり、それを指揮する総司令官は(今回の場合)王である。

こう見てみると軍集団は本当に必要なのかと思ってしまう。後世になると無くなるのだから無用と言えば無用である。けれど近代では、軍(あくまで全体の総称)、軍団、師団、連隊、大隊、中隊、分隊、の他にも兵種ごとの区分もあり、ちゃんと組織化した軍を作るには、このように細かく区分していくのは必要なことなのが分かる。シュラク王は古代において軍の構造を組織化し、それによって軍内部の効率を良くしようとした学者的な軍人の一人とも言える。

サウルス軍はまず軽装で軽やかに動く弓兵の弓矢で敵を攪乱し、盾と槍で堅固な密集隊形を作る槍歩兵の突撃で攪乱の隙をついた。敵軍に穴が開くと剣を主力武器とした身軽な歩兵が飛び込んで敵を薙ぎ払った。逃げる敵を追うのには少数の騎馬兵を送り、これらを殲滅した。

このように、この時代のサウルス軍「侵略王の歩兵隊」と呼ばれる彼らは、一人一人のやっていることは昔と変わらないが、その順番を厳密に取り決めることで、できるだけ効率的な戦闘を実践しようとしていた。

ここで、シャンティの著書に戻る。

『我々は拠点とも言える一つの都市を選び要塞化した。その都市、

ブランビーにシャンティ王子と軍集団を残した。ジャーニイ王子軍集団はブランビー要塞と後方を往復して兵站部として役割を果たすことになる。ジャクナ三世王太子軍集団は東に出向き海近くの漁村を占領することを目的とした。エラルジス大將軍はカバルス同盟国軍ヒツパリオンの周辺の村を荒らしまわり、敵軍が活発な動きを始めたならばそれを食い止める役目を負う。シュラク王はゲリラ兵殲滅と他都市占領を行う。』

『ジャクナ三世王太子軍集団が漁村を占領しサウルス本国からの船団を受け入れるための準備を始めたことを知ったカバルス同盟国はついに大規模軍結成を決定した。』

決断力の弱さ、スピード感のなさが民主主義の弱点であり、カバルスはまさにそれにより自らを追い込んでいく。

『カバルス同盟国軍団長となることがすでに決まっているエウクス族長トロットやその他部族長は我々の目を盗みヒツパリオンに集結した。各部族長が密かにヒツパリオンに集結していたのをサウルス軍が知るのはカバルス戦役後である。』

カバルス同盟国軍についても論じておく方が後々のためであるのでそれをする。

カバルス同盟国の軍人と言うのは基本的に部族ごとに、その部族の族長を自分たちの将として行動するものである。だから、このような場合もそれを基本とする。

まず、同一部族内の十人前後で隊を組み、その長が隊長。隊長たちをまとめるのが部族長で、部族長は同時に隊長を務めているものである。次は部族同士を集めてちょうど良い数になればそれが大隊、長は大隊長である。やはり、これはどこかの部族長が務める。そして、大隊をまとめると軍（軍団）。これがカバルス同盟国軍の最高区分であり、この長が軍団長である。となると、軍団長は同時に大隊長で部族長で隊長である。

兵数については、まず部族ごとに兵士の数が違うので色々面倒なことになり、数えるのは大変だったそうである。大隊などは何個

作られるかもわからないので、そのつど定員数が変わっていた。

このように、有機的で効率的で合理的なサウルス軍と違ってカバルス同盟国軍は何もかもが適当で辻褄合わせな感じに軍を作っていた。

結局のところ、サウルス軍は集団での戦闘を重視したが、彼らは個人の戦闘力に重視したのである。

『王都ヒツパリオンに集まった部族長たちは議会から大規模軍の結成を頼まれるとすぐに軍事会議に入った。この会議は王族や貴族、職人議員、市民議員の存在を全て排除したものであり、本当に軍人しか参加できなかった。また、軍人の中でも参加できるのは部族長とその他、各部族内の有力な隊長のみである。』

『会議が始まるとまず、部族長たちがサウルス軍を侮る発言をし、自分たちの力ならば当たり前に追いかえせる、とお互いを褒め合って気を良くしたところでちゃんとした会議が始まる。』

『まず部族長が一人ずつ招集可能な兵士数を言っていく。合計で四万弱と判明する。なお、全て騎兵である。それが終わると戦争の際に取られる戦術に関する議題に移り、一人の部族長が騎兵をそのまま横に並べた横陣での戦闘で包囲することを主張する。それに反対した者は縦陣で敵軍突破を主張した。』

包囲戦術は騎兵の機動力を生かしたものであり、突破戦術は騎兵の突破力を生かしたものといえる。常識的に考えれば、数で劣っている方は敵の包囲などを試みない。とはいえ、突破でさえも敵の二倍の兵力が必要などと言われることもあるくらいである。『会議は平行線を辿った。』

『そんな中、カバルス同盟国軍団長トロットの息子であり、エウクス族の隊長の一人であるエウクス・ギャロップが一つの案を出した。彼の考えた戦術の名を トライゴン 三本の角戦術 と言う。』

と、シャンティが読み上げたと同時に、騒がしかった宴場が静まり返って、次の瞬間には焦ったような感じでざわつき始めた。彼らはエウクス・ギャロップが誰なのかを知っているし、すぐ近くに

るのを知っている。その彼が、この戦史を読み上げている王子と仲がいいのだって、知っている。

いくらかの人は、シャンティがギャロップに騙されたのだと嘲あざけような笑みを浮かべたが、大体の人は顔を曇らせていた。ジャーニなどは顔を真つ青にし、目を皿にしてシャンティを見つめていた。シャンティは心の中で彼に謝ってから戦史を続けた。

『三本の角戦術トライコーンは下記のような戦術である。』

『部族を基本とした兵数一万ずつの縦列縦隊の大隊を三つ置き、これを前方主力隊と呼ぶ。左右二つは突撃、側撃、背撃を行う自由さを持つが、真ん中は基本的に突撃のみであり、ここにはいつそう勇猛な軍人を置く。』

誰かが唾を呑んだ音が聞こえた。もはや誰もが気が付いている。これは本当に、おれたちが戦ったあの作戦だ、と。

『後方に兵数約七千の後方援護隊と呼ばれる隊を置く。これは、敵の穴や味方が押され始めた方面に向かう。戦況を冷静に見る能力が必要で、ここに軍団長エウクス・トロットを置いた。』

『残り約三千の騎兵をさらに後方に置き、これを予備大隊と呼ぶ。これは基本的に、戦況を見極め決勝点のみに向かって突き進む隊である。ここにはエウクス族の隊長の一人であるエウクス・ギャロップを大隊長置いた』

「それは嘘だ！」書記長として従軍していた男が叫んだ。「王子、それは嘘だ。あなたはあの野蛮なカバルス人、ギャロップに騙されている。私は王に戦史を依頼され、西都ヒツパリオンに残された名簿を調べた。あの男、ギャロップの名はそこにはなかった。いや、奴の名前はまず資料の中には一回たりとも表記されていない」

「お言葉ですが、二つ質問があります」シャンティは冷静に返した。「あなたはカバルス同盟国軍の軍人名簿の予備大隊の覧をお読みになったでしょうか？ では、予備大隊の將軍の名前は？」

「読んだかつて？ あ、当たり前です」書記長は周りの將軍に語りかける様にしながら言った。「予備大隊の將軍の名前はエウクス・

トロットだ」

「ええ、そう。エウクス・トロットです。ばくも読みました。しかし、エウクス・トロットは後方支援大隊の大隊長でもあります」シヤンティは注目を促すようにピンと人差し指を立てた。「さて……後方支援大隊と予備大隊……この二つの隊を、同一人物が同時に指揮することはできるでしょうか？」

「後方支援大隊と予備大隊はそれほど離れていなかった場合だつてあるさ」とジャーニイが誰よりも早く答えを返した。「シヤンティ、お前は後方支援大隊と予備大隊が離れていることを前提に話している。でも、その二つの隊が遠く離れあっていたと、どうやって知ったんだ？ いや、聞くまでもない。あのギャロップに聞いたのだらう」

「ジニー」赤髪の王太子ジャクナが声を発した。彼は驚いてないような、常と変わらない様子だった。頬肘をついて、どこか余裕のありそうな印象を受ける笑みを浮かべて、ブラウンの瞳を彼に向けていた。「もっと、ちゃんと聞こうじゃないか、シヤンティの話しを」
「……兄上の言う通りですよ」シヤンティは紙の束を指し示しながら言った。「答えはこの中にあります」

一同は静まって、シヤンティの戦史の続きに耳を傾け始めた。

『軍人ギャロップが予備大隊になったのは、彼がそれを希望したからである。ギャロップはカバルス同盟国の名門エウクス族の隊長の一人であつたが、このような大隊を率いる資格はなかった。カバルスの大隊長は部族長と決まっているからだ。カバルス同盟国軍はこの規則を曲げることも、例外を作ること承知しようとはしなかった。しかしギャロップの戦才は軍隊を有機的に使うことを意識したトライコン
三本の角戦術を見れば明らかであつた。』

『結局、予備大隊隊長にはギャロップが就任し、名簿のような形式的なものの上では予備大隊の長をエウクス・トロットとし、なおかつ全軍にもそれを通達した。規則を重んじる古参兵はこのような例外を疎んじる傾向があり、軍事会議の中にいた人々もギャロップを

大隊長にすることには反対した。軍団長エウクス・トロットはそれを何とか説得し、この波紋がこれ以上広がらないように軍事会議に参加した各部族長と有力隊長の口を封じた。そして予備大隊の存在も軍内部でもあまりおおびらにしないよう工作した。』

『予備大隊の兵員は全ての部族から集められた。彼らの年齢は比較的若く、部族長でもないギャロップが大隊長に就任し、自分たちを率いることにも不満を持たないようなカバルス軍人を集めた。もともと、カバルス軍人の社会は能力主義ではなく、年功序列的になっているのを彼ら若い軍人は嫌っていた。それを知っているギャロップは、若くとも功を為した者には軍隊内でのそれ相応の地位が与えられることを約束し彼らを鼓舞した。彼らの口ももちろん封じた。』

『二二四年冬、我々はカバルス地方の各都市、各要塞にて冬を越す。十二万ほどの兵士を養う糧秣は何か持つことが事前に分かっていたが、次の年の冬は越せないのもわかっていた。』

『年が明け、二二五年。カバルス同盟国軍が大規模軍隊を召集しようとしているのがわかった。サウルス軍の王族と緒將軍はブランビ―要塞に集まり開戦に向けた策を練り始めた。』

『我々は会戦により敵に大打撃を与え攻城戦前に敵の降伏させることを決める。すでに騎兵の恐ろしさを知っていた我々は兵士の士気・練度のみでなく、数を投入することで敵を圧倒することにした。兵数二万を各要塞に駐屯させ、十万を会戦に出すことが自動的に決まると、それをシュラク王、ジャクナ三世王太子、エラルジス大將軍、ジャーニイ王子、シャンティ王子の五人の指揮官に配分することを決める。』

『シュラク王に三個軍団（三万）、ジャクナ三世に二個軍団（二万）、エラルジス大將軍に二個軍団、ジャーニイ王子に二個軍団（二個軍団だが一万五千）、シャンティ王子に二個軍団（二個軍団だが一万五千）とした。』

『敵の騎兵の高い攻撃力に対し、我々は堅固な密集隊形により防御力を高め、敵の機動力の高さから生じる部隊ごとの連携の薄さをつくことにした。最初は守りを固め、敵の連携力がなくなってきたころに攻撃に転じ、敵主力を叩くことにより勝利をもぎ取るプランが出来上がる。突破、完全包囲、片翼包囲などの様々なパターンを作った。』

『前方中央に主力のシュラク王軍集団。前方左翼にジャクナ三世軍集団。前方右翼にエラルジス大將軍軍集団。後方中央左寄りにシャンティ王子軍集団。後方中央右寄りにジャーニイ王子軍集団。』

前方中央に総司令官たるシュラク王がいる。この時代は陣頭指揮全盛期であり、戦史を調べれば「王が一番槍を成し遂げる」などの逸話がいくつも出てくる。が、そこまで総司令官が前にくるのは非合理的な話で、さすがに一番槍は嘘であろう。

『このように配置し、突破の場合は後方二人が主力のシュラク王軍集団を押し上げる様に前に出てくる。左翼を伸ばす場合は、連携を損なわないように、穴ができないようにしながら中央と左翼の間に潜り込むようにシャンティ王子軍集団が入りこむ。右翼を伸ばす場合は中央と右翼の間にジャーニイ王子軍集団が潜り込む。これを柔軟に使うことにより、片翼包囲・完全包囲を実施する。』

『作戦が決まった王族、各將軍たちは各々の都市や要塞に帰り春の到来を待った。』

『やがて冬が明け、二二五年春。我々サウルス軍は進撃を再開。都市と要塞をいくつか落としカバルス同盟国内深くに侵入。カバルス同盟国の大規模軍隊が移動しているのを知ると、会戦の地をヒジメ大平原として行軍を続行。』

『一週間後、我々が王都ヒツパリオンへ向かう石畳で造られた街道を進んでいくと、ヒジメ大平原にて兵数四万二千の騎馬軍団と遭遇する。ヒジメ大平原は今まで見たことがないほど平らで、小高い丘すら見えなかった。いくらか農地もあったが、そこには農民の姿は見当たらなかった。』

『軍を事前に決めていた配置につかせる。カバルス同盟国軍は三本の角戦術を駆使する例の配置を敷いた。その日は空気の澄んだ晴天で、ヒジメ大平原の向こうには王都ヒツパリオンが見えていた。』

『戦いが始まると我々はまず前に敷き詰めていた軽装弓兵を使用した。矢が雨のように敵陣に降り注ぐ。敵の翼は自由に動き回りこれを回避。敵中央主力は矢を恐れずに立ち向かってきた。我々の弓兵は矢を撃ちつくす前に後方に退避させ、槍歩兵隊を前に出した。後方にいた双子の王子の軍集団は、遠距離攻撃の回避と共に展開した敵両翼に対抗すべく、味方両翼に寄って行き翼を守る体制をとった。』

『騎兵の突撃が最前列の兵士たちを押しつぶす。槍歩兵は投げ槍を相手に投げて応戦。矢の残っている弓兵は軍中央部からそれを撃った。敵の突撃力はすさまじいもので、我々も必死に耐えた。そして槍投げや矢をそのまま喰らった敵陣に隙ができ始める。我々はシユラク王の掛け声と共に息を合わせて敵騎兵を押し返し、槍衾を作つて突撃を開始する。』

『しかし敵騎兵の隙間は敵後方にいた後方支援軍の的確な増員投入のおかげでそれほど目立たなくなってくると、我々はじりじりと押され始めた。』

『気が付けば我々は完全包囲されていた。こちらよりも少数の軍隊にぎゅうぎゅうに押し込まれ、我々は大きな戦場で小さく押し潰されていた。もはや翼の展開は不可能だった。』

『このまま続けていても敗北しかない、とエラルジス大將軍は自軍劣勢を判断。同時に右翼にいた彼は敵左翼を突き破りシユラク王を逃がすことを一人で決断した。槍歩兵、剣歩兵、騎兵を集め熾烈な攻撃を開始。同時にシユラク王の下に走り、渋るシユラク王を説得し、週録軍団の退却を開始する。』

『それを知ったジャクナ三世は軍集団の一部を派遣しシユラク王の退却につかせた。さらにシャンティ王子と連絡を取り、共に主力退却の時間稼ぎをすることを決めた。』

ジャクナ三世軍集団とシャンティ王子軍集団は、退却路の反対にいたので必然的に殿を^{しんがり}努めねばならなかった。しかしこの話はジャクナ三世の頭の回転の早さと勇敢さを表わしている話とも言える。

『シユラク王主力軍集団、ジャーニイ王子軍集団、エラルジス大將軍軍集団、ジャクナ三世軍集団、シャンティ王子軍集団の順番で退却を開始。退却を開始したことにより被害が拡大し始める。』

「戦争によるほとんどの被害は退却の時にやってくる」これは砲兵、騎兵、銃歩兵が戦場の支配者だった頃、つまり三兵戦術主流時代の戦争学の名著「戦争論」に書かれている。また、この著書には「追撃軍の騎兵の数、退却軍の騎兵の数がその追撃の効果を決定する」とも書かれており、これに照らし合わせヒジメ会戦を見ると、この原則は甚だ正しいように思える。サウルス軍はこの一回の会戦で二万の兵を失っている。カバルス同盟国軍は八百ちよつとの被害であつた。

『サウルス軍主力がむき出しになって逃げ出すのを見た將軍ギャロップの予備大隊はこれへの攻撃を開始。四千の元気な騎兵が戦場に來襲し、その全てがシユラク王めがけて突撃した。身を呈して王を守る忠義心高き兵は尽きることはなかった。ギャロップはシユラク王を追撃したが深追いは危険と判断し、混乱のさなかの会戦場に戻りサウルス兵を掃討し始める。ここでいくつかの将を捕らえ、我々の情報を収集した。』

『ヒジメ大平原の会戦場にはジャクナ三世とシャンティ王子の軍集団がまだ残っていた。二人は乱戦の中、王が無事退却を開始したのを知ると、両軍集団を合併してじりじりと後退。先に退却させていた隊が伏兵となり敵兵を襲いだすと、大々的な退却を開始した。最後まで残っていたこの両軍集団は、なぜだか損害を最小限にとどめた。』

『夜の訪れと共にカバルス同盟国軍の追撃隊は勢いを失くした。我々は野営をして、点呼などで損害を確かめた。その時の確認された残存兵数は六万強だった。おおよそ、三万の損害である。』

『それを知ったシユラク王は愕然とした。しかしシユラク王の決断は早かった。』

おそらく、小ウアズマの時に決断の遅さによって自軍をじりじりと苦境に追いやったことが関係している。

『シユラク王は再決戦を提案した。緒將軍はそれを止めようとしたが、ジャーニイ王子は他の二王子より先に逃げたことを恥じており、これに賛成。ジャクナ三世王太子も父王の意見に同調した。』

とはいえ、ジャーニイはあの時、退却路側にいたし、シユラク王を守るように退却したわけだから恥じることはないのだが、そこは彼の強いプライドが許さなかったのだろう。

『シユラク王は新しい戦闘隊形を提案。軍団を小さくわけ、それを余裕のある一定間隔で配置。そして、敵の行動を見て密度を変えて対応するというものだった。』

これは新たな区分の創出とも言える。区分を増やせば柔軟性は増す。しかし、増やせば増やすほど伝令などはややこしくなり、また各小単位の長の機転の能力が問われるようになる。これは賭けである。兵士たちが機転を利かせ、柔軟に軍を動かせることができれば戦力アップ。できなければダウン。つまりは軍の兵員の機転の能力の高さに依存している。

戦術をシンプルにした方が戦力アップできる場合だって大いにある。それでも、がけつぷちに追い込まれたシユラク王は自分たちの兵隊の能力を信じることにした。

『カバルスとの翌日再戦はすぐに全軍に伝えられた。要塞にこもって戦うことを予測していた兵士たちは驚愕と絶望を感じ、シユラク王に退却を懇願した。シユラク王は目をつぶり、静かに首を振った。そしてその瞳を開き、兵士たちを叱咤するように睥睨した。』

『彼は狂気に取りつかれ、全身を這いまわる血の灼熱に身を任せ、天を指し、守護聖獣たる竜に祈るように雄叫びをあげ、何度も何度も演説を繰り返した。その狂った熱にあてられた、心の折れた兵士たちは、やがて、逆襲の意思から生まれた光を眼に宿らせた。シユ

ラク王は兵士たちを見渡した、そしてこの西方の大地の上に、星々のように光る鋭い眼光を見た。シユラク王が腕を広げ、吠声をあげると、サウルスの勇者たちはウォークライをあげた。」

『次の日、逃げていた兵士が続々と集まりだすと兵数は合計で八万に戻った。カバルス同盟軍が我々に向けての進撃を開始したのを聞くと、我々はヒジユメ大平原より北に十キロほどのニー平原で待ち構えた。』

『ニー平原は小高い丘やちよつとした雑木林が散在しており、ヒジユメ大平原よりは奇襲を実施しやすい立地になっていた。我々もその障害物の中にいくらかの部隊を隠しておいた。』

『我々の配置を見たカバルス同盟国軍軍団長トロットは軍議を開いた。各部族長は昨日と同じ完全包囲を主張した。』

完全包囲は実は成功率の少ない戦術である。これがなぜ好まれるかと言つと、包囲戦は成功すると敵に逃げ道を与えないせいか、敵兵大量撃破という大勝利が得られる。しかし、失敗するとそれをしかけた軍が大量撃破される危険性がある。

『トロットは我々の一単位ずつの少数さ、薄さから分析して突破を主張した。ギャロップは様子見を進言したが、例外的大隊長就任の際に各部族長に疎まれていたので、これは簡単に退けられた。結局、包囲戦をもう一度試みることになった。』

『ニー平原会戦の日も快晴だった。我々は前日同様に弓兵を前に配置して敵兵を射った。敵兵は前日と同様な反応を見せる。我々は中央に弓兵を集め、敵中央主力を集中的に攻撃。ぎりぎりまで彼らは矢を放った。』

『敵中央の突撃を控えて我々の中央主力は防御を固め始める。我々の左右両翼は大隊単位の陣を作り防御を固めた。その真中からは絶えず弓兵が矢を放つ。』

『敵兵中央主力は勇猛だったが、最初の集中攻撃で疲弊していた。シユラク王は槍歩兵に突撃を命令。自らも五百の近衛兵団を指揮し突撃した。』

『各地でカバルス同盟国軍の被害は拡大した。それを補うための後方支援大隊はそのほとんどを中央に送っており両翼への援護は無理だった。』

『これを見た予備大隊は早々に行動を開始。エラルジス大將軍とジャーニー王子の指揮する右翼に突撃した。』

攻撃力の高さは同時に防御力の低さである。

サウルス軍は敵軍との会戦のために冬の間に立てていたプランでは「敵兵の機動力の高さを利用し、敵がばらばらになった反撃する」とあつたはずである。戦争学の本ではよく、機動力イコール攻撃力と言われることがある。前に進むことが攻撃であり、攻撃力が高いということは敵軍内部にずんずんと進んで行けることと同意義である。そして敵軍内部に進んでいくと自然と隊がばらばらになる。つまり攻撃力が高い軍隊は分散しやすい。

その点を踏まえながらサウルス軍を見てみる。エラルジス大將軍とジャーニー王子は、左翼の王太子とシャンティに比べ攻撃的な性格をしていた。この二人を左右においてバランスをとった方がいいと思うかもしれないが、古代の戦争はその多くが軍を斜めに傾けたり、片方に戦力を集中する斜線陣である。その概念にまだ引きずられていたこの時代も、やはり根本的にそれを目指して軍隊を作っていた。

シユラク王は片翼に防御力が高く機動力の低いジャクナ三世とシャンティを置いて、逆翼に攻撃力が高く機動力の高いエラルジス大將軍とジャーニーを置き、真ん中の自分が柔軟に対処することで意識せずに斜線陣になるように調整していた。なるほど彼はなかなかの策士であつた。

本題に入る。

ギャロップは決勝点への突撃を捨て、味方を逃がすための退却路を切り開くことに決めた。そして防御力の低い、兵が分散している所に狙いを定めた。それがエラルジス大將軍とジャーニーの配置された右翼だつた。

『カバルス同盟国軍の包囲は失敗していた。我々は敵に包囲されないように幅広く広がって戦った。』

『両翼の戦いは制していた。一方、中央主力の戦いは熾烈を極めていた。そのほとんどを後方支援大隊と入れ替えた敵中央軍は強かった。シユラク王の騎兵隊は何度も危機に会いながら敵主力へ向かって進んでいった。』

『そんな頃、制していたはずの右翼に奇襲がかかった。体力のあり余った四千の予備隊である。疲れ果て、矢が残っていなかった右翼は容易く破られた。この報告を聞いた味方左翼軍は何とか兵を捻出して至急増援軍を送った。』

『しかし遅かった。敵兵は右翼からの退却を始めていた。我々はそれを追撃したが追い付くことはできなかった』

ここでも、騎兵差によって追撃の効果に差が出た。

『我々は大勝利に歓呼した。その夜の野営ではこちらの損害は二千ほどと出た。後に知ることであるが敵の損害は五千だった。』

『次の日、我々は進撃を再開した。やはり快晴だった。我々は昨日と同じ陣形のまま進み、ヒジメ大平原でカバルス同盟国軍との遭遇。全体としては三度目の会戦、ヒジメ大平原では二度目の会戦である。そして、誰もがこの戦闘で終わりであることを理解していた。我々はここで敵を撃ち破れば王都ヒツパリオンまでの妨害を受けずに済むことをわかっていたし、ここで負け、また数万もの損害を出せばカバルス地方に残ることもできず、それどころかサウルス地方に戻ることもできないかもしれないことも……わかっていた。』

『決戦はサウルス軍七万強対カバルス同盟国軍三万強の戦いだった。ここまでの両軍の損害は、サウルス軍二万弱、カバルス軍六千強である。』

『我々は昨日と同様の作戦をとるのに対し、カバルス軍は昨日の敗戦を反省し、トロットの主張していた突破戦術を選択。ギャロップはもはや何も言わなかった。』

『からからに乾いた強風が吹く中で決戦は始まった。カバルス同盟

国軍は迷わず直進突撃を開始した。我々はそのままの陣形で、やはり弓兵が長距離にて攻撃を開始した。強風のせいか成果は減少していた。」

『敵騎兵がすぐそこになった時、我々は中央に向かって走った。次の瞬間には堅固な、元の密集隊形が完成していた。』

『敵騎兵が最前線の槍歩兵隊に衝突した。我々はすぐに翼を広げた。ジャクナ三世軍集団の守る左翼を回ってシャンティ王子軍集団が、エラルジス大將軍軍集団の守る右翼を回ってジャーニイ王子軍集団が敵を包囲し始めた。近衛兵団の騎兵を使い迅速に、敵後方支援大隊までを囲っていくと、敵騎兵は遊兵が増大し始めた。』

遊兵、全く何の役にも立っていない兵士であり、弓兵などの長距離武器を持たないカバルス同盟国軍は包囲されて、真ん中で身動きが取れないようにされるとほとんどがそれになっってしまう。

『我々は敵兵撃滅を開始。囲い込んだ敵騎馬の海の中に剣を主力とする身軽な軽装剣歩兵を投入して馬を無力化していく。その間も絶えず弓矢投げ槍の遠距離攻撃が加えられた。』

『しかし、敵軍をほとんど殺していく我々の隙について我々の後ろに回り込んだギャロップと予備大隊はシユラク王のいる主力に向かって背撃を開始。慌てふためいた味方兵をシユラク王が治め、一個軍団（この時の一個軍団は七、八千）による予備大隊（四千）の排除が始まる。』

『包囲されていた敵騎兵隊もまるで示し合わせていたかのように我々の中央主力へ反撃を開始する。中央主力は耐えきれなくなり決壊が、それを埋める様に左翼ジャクナ三世と右翼エラルジス大將軍が増援を送り、彼らを押し戻した。』

『攻撃特化の予備大隊は長い攻撃に耐えきれなくなり、被害を拡大していく。』

『將軍ギャロップは包囲されていたカバルス同盟国軍主力がすでに少ないのを見ると逃亡。指揮を失った予備大隊は烏合の衆となり、瞬時に全滅。それを見た中央主力の士気は激減した。そして自分た

ちの指揮官がことごとく死んでいる現実に直面したカバルスの下級兵は降伏を進言し、これが我々の王に認められた。」

『この決戦での両軍の被害状況は、サウルス軍合計一万四千。カバルス軍三万弱である。』

『我々は勝者にもかかわらず一万もの兵士を失っており、戦闘中はだれもその被害の多さには気が付かなかった。また、カバルス軍は残存兵力三万強から三万弱の兵を失ったわけだから、この戦争を生き延びた者は天運の持ち主とも言える。』

『我々は捕虜を連れてカバルス同盟国王都ヒッパリオンに向く。門はすぐに開けられ、解放が為された。』

『その講和会議の最中、逃亡を図っていたヒッパリオン王族のユルシユ姫と予備大隊隊長ギャロップがシャンティ王子の近衛兵団により保護される。』

『講和成立と同時にその二人を引き渡し……』

この後も記述は続くが、大体はこんなところである。

「さて……」ジャクナ三世は、シャンティが戦史を読み終えると拍手しながら立ちあがった。「どうだろうか？ 我々の真実との矛盾は？」

誰もが黙っていた。矛盾のあるしではなく、あの戦争の悲惨さを思い出しているようだった。しかし戦史の途中で予備大隊と後方支援軍の同時指揮の不可能は証明された。

「大体はあっている」とジャーニイが額に汗を浮かべながら口を開いた。「なるほど、そう言えばおれは第二回会戦ニー平原会戦で、いきなり現れたやけに強い騎兵団に襲撃されたのを覚えている。……でもな、それが本当に予備大隊だったのか、そこにあのギャロップがいたかどうかは……」証明できない。

「予備大隊と後方支援大隊の指揮官が別なのは、最後の会戦でも証明されている。いきなりあそこに現れたのが予備大隊でなければなんなのだ。いや、大体、考えるのはそこじゃない」ジャクナ三世は

首を振る。「私は他の者の書いた戦史を見たがね、シャンティが書いた戦史はそれらとは一線を画する。それは、カバルス同盟国軍の軍事会議の内容を書いていることだ。軍事会議の内容をするくらいに有力将校は死んでいるのに」

「いや」今まで何の反応もなかった老將軍のエラルジスがやや遠慮気味に発言した。「これはあの時の戦況から考えて、このような会議をしたに違いない、と言う風に創作することもできます。予備大隊と後方支援大隊のトロットという指揮官の名前の件、それと生き残ったカバルス兵からもあまり情報を得られなかった予備大隊の概要。この両方は予備大隊に関することで、ほとんど情報もなく、正誤の判定ができません。だからこそ、ここにギャロップという不明瞭な要素を詰め込むこともできます。いえ……王子を批判しているわけではありませんが」

彼はどちらかと言うと、シャンティがギャロップになんらかの肩入れしていることを批判しているようだった。なぜなら、彼は周知の通りカバルス戦役において常に最前線で戦っていて、カバルス人の恐ろしさを十分に理解している人物で、降伏したはずの村落がいきなり反旗を翻し、命の危険にさらされたことだってある。彼もやはり、シャンティとギャロップが共に行動するのを厭う者の一人である。

誰かが言った。「敵将トロットは、予備大隊とは始めから打ち合わせしていたのかもしれない。私がこのように動くから、お前たちはこのように動いてくれ、と。そうすれば、一応、同時に指揮したことはならんか？」

違う誰かが反論した。「お前はそんなことができるか？ そんなことができるのは、予言者が魔法使いか……戦争の大天才だけだ。もし、そのような、そこまで先が読めている大天才が敵にいたのなら、おれたちは今、ここでこんな風に酒を飲んではいられない」宴場がまた騒がしくなり始めた。シャンティはほとんど焦るようなしぐさも見せずにそれを見ていた。ここまでは彼の予想通りとも

言えた。

「みなさん、ぼくの話聞いてください」シャンティがよく通る声で語りかける。「確かにみなさんの言うことはもっともです。ならば、確かめればいい」

「確かめる？ 何を？」

ジャーニーが疑い深そうに彼を見て、葡萄酒をすすった。嫌にのどが渴いた。

「彼……ギャロップにもし、比類なき軍才があれば、ぼくが言ったことは真実味を増しますよね」

「それをどうやって、証明する？」

「なに、簡単ですよ」シャンティはいっそう明朗に言った。「彼に戦わせればいい」

宴場のいたるところで怒号にも似た大声が発せられた。シャンティは構わず続ける。

「うすうす気づいているとは思いますが、ぼくはもう言っちゃいます。……ぼくは皆さんの知っての通り、ギャロップの友です。そして今回のこともギャロップのため、さらには、カバルス人のためをやっているのです。王都の人々は何の理由もないのに、カバルス人を迫害し、それはとどまるところを知りません」シャンティが生意気そうにいうと、宴場に集まった軍人たちは耐えられなくなつて怒りをあらわにし始めた。あたりまえだ、奴らはおれたちの友を奪つたのだから、どこからかこんな声が聞こえてきた。「それで、また多くの都合の話ですけどね。我が兄上ジャクナ三世の妻はカバルス人です。何の罪のない、誰一人として人を殺していない、あの麗人への誹謗や中傷が王都内でも王宮内でも絶えません。そして私の妻、あなたたちにはよく魔女と呼ばれているエレはですね、ユルシユ義姉様の大変仲のいい友人なのです。我が麗しの魔女、エレは私に向かつて言いました。おい、ユルシユ義姉様を口撃する脳足りん共を早く黙らせて来い、と」

エレの名前と彼女のセリフを聞いた瞬間、宴場がしんとした。彼

女の完全なエゴの前には正論すらも通じないのはわかっている。シヤンティは静かになったのに気を良くして話を続ける。

「カバルス人は確かに信用がない。いや、失くしたんだ、あの熾烈な自国防衛のための戦争で。勝手に売られた戦争で」これは父に対する悪口ともとれる発言だった。シヤンティは早く終わらせたい気持ちを抑え込んで、その後もゆつくりと話しを続けた。「今回の件、全面的な非があちらにあるわけじゃない。（というよりも、ぼく達の非の方が多いと思いますが）それならば、ぼくたちは彼らに何らかのチャンスを与えるべきです」

「ははは、ならばカバルス人信用回復のために、戦犯者ギャロップを処刑にしようじゃないか」誰かが言った。

「それは良い……それは良い考えですね」とシヤンティが発言者を見つめた。その口調と瞳には相手を悲しむような雰囲気があった。

発言者は目を伏せて黙った。「そんなのは、つまらないですよ。さつきまでは、ギャロップは軍人のリストに載ってなかった、予備大隊の大隊長なんてやってなかった、って言ってたのに……今度は一転して、自分の都合の良い風にギャロップを大隊長と認めて、戦犯者だなんて……」

「シヤンティ」シユラク王は困ったような目で、そして優しげな顔でシヤンティを見た。「お前が、友のために……兄嫁や、妻のためにカバルス人の地位向上を望んでいるのはわかった。ならば、今すぐにもそのような法案を作ろう。それで良いだろう」

「そんな目で……そんな顔で……子供扱いはやめてください！」シヤンティは思わず声を荒げた。掌はいつの間にか大きく広げられていて、そして次に、勇気を振り絞るように、ギョツと手を握って立ち向かうように言った。「……ぼくは甘やかしてほしいなんて思わない。ぼくは、ぼくの力で、自分の欲しいものを手に入れる。大体、そんなんじゃないだめだ！ 何も変わらない。根本的な解決にはなっていない」

「それで！」ジャーニイが、彼なりの助け船のつもりで口を挟む。

「つまり、どうするって？」

「……うん。ぼくは、彼を戦わせる。相手はいまだに恭順しないカバルス諸部族や、元カバルス同盟国軍兵。カバルス鎮定によりカバルス地域全土の治安を良くする。カバルスが安定したら、人々はあそこへ訪れて、カバルス人が自分たちと変わらないんだって知るところまでできる」シャンティはすらすらと、穏やかに言っていく。そんなに簡単にはいかないだろう、と緒將軍は思いながらも彼の想いに耳を傾けた。「これが成功すれば、カバルス人の軍人ギャロップは功を為したことになる。そうすれば、カバルス人がサウルス軍内でとりたてられたことになるから、他のカバルス人も、サウルス国の中で出世できるんだ、元からいた人のようにやっていけるんだ、って希望が持てる。みなさん、ぼくは、人種が違うことによって起こる色々な不安をなくしたいんだ。だって、グナトウス人だって、カンプトケファレ人だって、ヘドロケラス人だって今ではもうサウルス人だ」シャンティは緒將軍を見渡しながら言った。その中には、もちろんそれらの人種がいる。エラルジス大將軍も南部グナトウスの出身である。「カバルス人だってすぐにぼくたちに溶け込める。いや、ぼくたちが彼らを溶け込ませるんだ。知っているだろうか、このサウルス地方、昔はコミツセオ地方と呼ばれていた所は、文化が混じり合って発展してきた場所なんだ。ぼくたちは始めからその才能があるんだ。他の何かを認め、共存する才能があるんだ」

シャンティは静寂に包まれた宴場を見渡して、次の言葉を吐くために、息を吸った。静かに吸ったはずなのに、やけに大きく吸ったように聞こえた。彼は、感慨深そうに彼を見る父の方に向いて、言った。

「父上。ぼくとギャロップを、カバルス地方に派遣してほしい」

「……」父王はすぐには返事をしなかった。父も、静寂の中で静かに息を吸った。吐き出される彼の言葉は震えていた。「大丈夫なのかい？ 私は……お前の体が心配なんだ」

「大丈夫さ」達成感も、充実感も、怖れも、迷いも、何も無かった。

いや、そんな中で、切り開いた未来への高揚感だけはあつて、暗闇の中に、彼と共に歩いて行けることにシャンティは胸を躍らせていた。「大丈夫。なんたってギャロップは、恐ろしく強かったあの亡国の、幻の將軍だからね」彼は莞爾^{かんじ}と笑って言つてのけた。「ぼくはそう信じてる」

7・サウルス・センチュリオン・レジェム・シャンティ著「カバルス戦役史」

やっと話が進みだした。

8・西へ！

> i 3 2 2 5 3 — 4 0 5 7 <

シャンティとギャロップのカバルスへの親征は即日決まった。

しかし、軍内部では彼の演説を聞いてもなお、カバルス人を将として取り上げることに不安感を抱くものがいた。彼らがシャンティたちに出した条件は過酷ともとれるものだった。

サウルス国から派遣される軍団は半個軍団（五千）クラス。つまりはサウルス軍では大隊が千人だから、五大隊である。全軍五千人のうち歩兵が四千、騎兵は（シャンティの近衛兵団が五百、カバルス騎兵が三百、サウルス騎兵が二百なので）千である。なお、ギャロップは逃亡や反乱などの可能性があるとされ、カバルス兵を指揮してはいけないことになっている。軍需品はカバルス各都市で配給を受けることができ、戦闘により兵員が欠けた場合、本国から追加兵員を要請できる。現地でも補充できることになっているが、カバルス兵は千を越えてはいけないという規則がある。彼らはこの条件でカバルス各地を回る。

これに対してジャーニイは「弟を殺そうと画策しているように見える」と発言して、従軍することを決めた。彼は五百の近衛兵団を連れてシャンティと共にカバルスに派遣されることになる。兵員はこれで五千五百。さらに、この話を聞いたカバルス地域監督者であるヒツパリオンがカバルス騎兵の増援を申請、サウルス国により百人のみ受け入れられた。合計で五千六百である。

総司令官はあくまでもシャンティであり、その下に副司令官としてギャロップ、ジャーニイがつく。また、シャンティらが王都の將軍たちの与えた条件を守っているかを見張るための武官・文官もいくらかつけられた。シュラク王の侍従の一人、ラッドハッド。ジャクナ三世王太子の従者の一人、レフティス。エラルジス大將軍の部下、サスホス。そしてその他もろもろ有象無象がその従軍の監視官

である。

あの宴から十日後、カバルス鎮定軍は兵の徴募や物資の調達完了早々に西への行軍を開始した。二二六年のまだ肌寒い春のことである。

シャンティたちは王宮の儀式場で竜の加護を得るための儀式を受け、カバルス鎮定の任につくことを正式に認めた証として、シユラク王から佩剣を賜った。この佩剣はジャクナ二世がグナトウス鎮定の際に父、ジャクナ一世から授かった名剣である。剣はこれを作った職人の出身都市から名前をとり、サイカニアと名付けられた。華美な装飾は一切施されていない代わりに、ただ純粹に刃のみの美しさを追求した作品であるとされるが、現存はしていない。

定められた儀式を終えた後、鎮定軍は王宮から王都の大通りに出て、王都市民への顔見せのためにゆつくりと歩いた。けれどもカバルス人のために働くシャンティ王子とその軍団を祝福するものはおらず、市民は一様に冷めた目で鎮定軍を見ていた。彼らはこれと言った言葉も投げかけられずに門から外に出た。

長い列がぞろぞろと王都から出て行った。鎮定のための行軍と言っても兵士だけを連れていくわけではない、兵士たちの食料に野営用のテントを乗せた荷馬車も必要になる。王子たちは外に出るとすぐに王族用の馬車に乗り、長旅の疲れがたまらないように努めた。

「お前もなかなかやるもんだな」と馬車の中でジャーニイは、少し誇らしげそうな顔をシャンティに向けた。「あれだけの者の間で悠然と演説をするとは……昔のお前なら考えられなかった」

「宴場のことかい？ そうだね、ぼくも不思議だよ」シャンティは馬車の窓から見える田園地帯の景色に目を移しながら言った。「それでも、少しやり過ぎたかなと思ってるんだ。彼らや、父上にも随分ひどいことを言った。傷つけてしまった」

「やりこめられた方が悪いのだ」ごんごんと、と馬車が揺れた。

「ふん、道の改装をせにやらんな。尻が痛い」

「やりこめたといつても……あれは、奇襲なんだよ。ぼくは前から準備していた。ある程度の反論への答えも考えていた。でも彼らは準備などできるはずもないし……」

「奇襲はされる方が悪い。……そうか、準備してたか、それはそうだろうな。春間近に、しかも緒將軍の集まる所で発表したのも策か？」

「……まあね」

「お前の？ それとも、ギャロップの？」

「両方さ」彼はジャーニイに目を移していった。「でも、ここからはギャロップの独擅場だよ？ ジニーはそれでいいのかい？」

「別にいいさ。失敗すれば、お前とギャロップのせい。成功すればおれの経歴に少し箔がつく。失敗したら……」ジャーニイは腕を組んで言う。その顔つきからは若干の不安が垣間見られた。「即、死につながるかもしれないが。まあ、こんなことで死んでしまうならば、それまでの男と言うことよ。それまでの男ならば、王位も得られん」「やっぱり王になりたいの？」シャンティは困ったように微笑んだ。ジャーニイの口から王位継承は度々出される。「兄上ではだめかい？ 彼は良い人だよ？ 君が王位への執着を見せなければおそらく君にも優しく接してくれる」

「奴はだめだ。王の才があるとは思えん。現に、奴は自分の好みの女を得るために国を揺るがしているんだ。国よりも自分の股についたモノを満足させる方が大事なのさ。それに……」ジャーニイは急に、険しい目つきになって、厭世的なまなざしで暗い虚空を見つめた。「奴の母親は、おれたちの母上を、殺した」

「……まだ、そんなことを信じているのか。あれは噂にすぎないんだ。信じたってしょうがないよ」

「馬鹿な、お前だって覚えているだろう？ あの女の、おれたちを見る目つきを！ しかし、ははは、奴はその後すぐに、のどに飯を詰まらせて惨めな形で死んでしまったが。ははは、ははは」

シャンティは、むなしい高笑いを続ける兄の姿を居た堪れない気

持ちで見ていた。

このことは前述しているが、もう一度説明しておく。ジャクナ三世とジャーニイ、シャンティ双子王子たちは異母兄弟である。それは彼らの髪の毛の色にも表れている。

実の所、シユラク王は十代後半に一回結婚していたのだけれど、その妻は流産してしまったショツクで死んでしまった。その後、王位継承を果たしたシユラク王は東の小ウアズマに遠征し、失敗。失意と共に帰ったシユラク王を出迎えたのは東部ヘドロケラス貴族カマラ家の娘であった。彼女は東方の人間の血を色濃く受け継いだグラマラスな女性で、貴族出身の女性らしい天真爛漫な性格だった。シユラク王は二度目の結婚を彼女とし、翌年にはジャクナ三世が生まれた。

三人目の妻は純然たるサウルス貴族、コンプス家の娘である。コンプスはサウルスがまだ小都市だった頃からの有力者の家系であり、サウルスが国になると共に貴族と呼ばれるようになった。シユラク王はこの貴族がサウルスの民から慕われるから打算的に結婚したわけだが、自分に似た金髪の双子の息子が生まれると大変喜んでこの母親まで可愛がるようになる。

その後もシユラク王は内部貴族との連携を深めるために二人の妻を迎える。しかしこれらの家系から生まれた子供は全く歴史に関係せず、緒地方の貴族官人として一生を終えるだけである。

カマラ家の娘は夫の関心が急に他の女に移ったのが面白くなかった。彼女は双子王子の母親に度々嫌がらせをするようになる。少し後になって、双子王子の母が体調を崩し、そのまま崩御すると彼女に疑惑の目が向けられた。彼女が実際に何かをしたのかは今でも謎に包まれているが、その後彼女は急に大食漢になり、ある日いきなり死んでしまった。

ジャーニイは母親の死をジャクナ三世の母親のせいだと思っていた。シャンティの方は「兄上のお母様にはそんなことをする強い理由はない」と噂自体を信じていなかった。ともあれ、ジャー

ニイが必要以上に兄のジャクナ三世を嫌うのにはこんなわけがある。

馬車の外では慌ただしく行軍が進んでいた。近衛騎兵の副隊長であるシェイバスは列の乱れを注意したりして奔走していた。

彼は、父ウイスカからの説得を受けて王子の動向を見守ることに決めていたし、今回の遠征も役目を全うすることを守護聖獣に向かって誓いもした。それでも心の片隅には一抹の不安が依然としてこびりついている。

彼は、ギャロップがあああの戦役のカバルス側の中心人物だったと聞いて、さらに彼への猜疑心さいぎしんや不安感を募らせた。

「もし、本当にギャロップがああのカバルス軍の戦術を編み出した男ならば、今回の遠征で王子が死ぬ危険性は……あまりないかもしれない」彼はそろそろと進んでいく歩兵たちを見ながら、馬上で誰にも聞こえないようにぶつぶつと独りごとを言った。「それでも、それが本当ならば……あの恐ろしい戦いを作り上げた男ならば、カバルスに帰ってすぐに少ないカバルス兵を操り我々を全滅させることができるかもしれない。そうやって、自由になったらカバルス地方の諸部族を束ね、サウルスに反撃に出る算段なのかもしれない。いや、反乱しないとしても……そうだ、そうなのだ。奴は切れ味鋭い剣なのだ、諸刃の剣なのだ。その刃は敵を傷つける時には非常に役立つが、少し使用方法を間違えればその威力を己に発揮する。だからそれを恐れた王都の人々が奴を、そしてそれを抱えこむ王子をも一緒に排除しようとするかもしれない。その時、おれはどうすればいいんだ？ 王子を守りきれなのか？ 奴はどうだ？ 王都に目をかけられたなら、奴は王子を守るのか、守りきれなのか？」

シェイバスは行軍中の軍を行ったり来たりしてギャロップを探した。ギャロップは荷馬車の中で寝ているところを彼に見つけた。彼はそれを覗き込む。

「……ああ、近衛兵団の副隊長か」ギャロップはあくび混じりの、起きたばかりのだみ声で言った。「どうした？ 異常事態か？

戦闘か？ 戦争か？」

「いや……そうじゃない」シェイバスは何の理由もなく彼を探していたのに気がついた。いや、理由ならある。お前は、王子を守りきれのか、とこう聞きたいのだ。けれどそれを面と向かって相手に言う勇氣はなかった。「……いや」

「ならなんだ？ まさか、おれの顔を見に来たわけじゃあるまい？
どうやら、おれはサウルの男に受けるらしい。しかし……シャ
ンティから聞かなかったか？ おれは男色じゃないぜ」

「ふん、それはおれもだ」シェイバスは不快感を押し込みながら話を始めた。「なに、これは戦争をするための遠征だろう？ だから、おれたちの王子が死ぬ場合だってある。つまり、おれはお前の策を聞きたい。王子の命を賭ける作戦がどれほどのものなのか、どれだけ練り込まれているのか」

「それならば簡単だ。策はそれほど練られていない。いや、こう言おう、ねりねりねるねると練る必要など、ない」ギャロップは起き上がりながら言う。瞳に鋭い光を灯しながら。「敵は軍隊ではない。そこら辺の野盗と同じ、武器と馬を持ったただの一般人の集まりだ。作戦もおろそかだし、連携も取れない。数は少数、士気練度共に低い。まあ、おれたちのほうもそれほどそれらが高いとは思えんが……」

ギャロップは荷馬車から顔を出して、自軍の兵士の歩く態度を見てせせら笑った。謝意部が顔を赤くして怒鳴る。

「お、お前……なにが亡国の幻将だ。とんだ行き当たりばったりやろうじゃないか」

「そうだ、行き当たりばったりだ。戦争とは行き当たりばったりなんだ。よく考えられた作戦も、打ち合わせも、計画も、戦いが始まれば全てごちゃごちゃになっちまう。お前、戦争をしたことがあるならわかるだろう？ 今まで一度たりとも全てが全て計画通りにいったことがあるか？ ないだろう？ 戦争とはそういうものだ。結局、勝敗を決するのは将軍が機転を利かせることができるかにかか

っている。脳のある将軍は敵の奇襲を事前に知り、それを無力化することができるだろう。本当の将軍とはそういうものである。しかし、本当に評価される将軍とは奇襲をされたとしても、それを難なく対処する者なのだ」

「しかし、奇襲を察知して、それを無力化できるならばそれは兵のためにとなる。だから評価に値する」

「戦場で手に入る情報を集めそれをもとに敵の奇襲をただの想定内の敵の攻撃と変じ、無力化する……ふんっ、はは。阿呆か、そんなもんはできて当たり前だ。それでも、過去の戦史を調べればそれができなかった状況は驚くほどある。英雄と言われた者だって何度も奇襲を受けたのだ」ギャロップは拳を強く握りしめる。シエイバスは彼の意気に圧倒されそうになった。この男にとって戦争とはなんなのだ！ ギャロップは続ける。「戦場ではなかなか情報が手に入らない。手に入ったとしてもそれが正しいのかどうかはわからない。確かに、それを手に入れ、見極め、うまく使い、敵の奇襲を無力化できるならばそれは良いことだ。しかし、そんなのは長者が長生きする秘訣を聞かれて、息をすることと飯を食うことだ、などと言う様なもんだ。わかるか？ 情報収集なんぞ才能がなくともできる。そんなもんは将として当たり前前持っておくべき最低限度の必要能力にすぎない」

「……だから、お前は策を練らないのか……そんなものを練ったとしても、戦場は思い通りにいかないから」

「いや、最初に言ったが、それほど練っていないだけでちゃんと考えてはいる。しかし戦争に勝つにはそれだけではダメだ。策に頼り過ぎてはだめなんだ。時と場合により策を間髪いれずに捨て去って行動することも大事なのだ」

「……結局、どうするつもりなんだ。カバルスの諸部族との戦闘は「簡単なことよ」ギャロップは遠出する子供のような、わくわくした表情で言うのだ。「戦場において、全てはおれが決する。この、戦争の大天才が決する。それが作戦よ、それが最も美しく、柔軟に

富んだ作戦よ。ははは」

怠惰な感じで歩いていた兵士たちが笑い声を聞いて、驚いたような顔つきで集まってきた。シェイバスは馬を操って、呆れたような顔をつきで彼のいる荷馬車から離れ始めた。

つまりはそう言うことなのだ。と彼は思った。全ての趨勢は奴によつて握られている。つまり……おれたちは、祈り、願い、信じるしかないのだ。奴が本当に才ある將軍であると。

「そしておれも將の一人だ」彼は、ギャロップを覗きに行く兵士たちをかき分けながら呟いた。「もしものときは、お前の策など捨て去って、己の意思で行動するまでだ」

8・西へ！（後書き）

画像はどこぞの副隊長。
もう……ボロボロや。

9・将軍、軍議をさせられる

> i 3 2 3 0 9 — 4 0 5 7 <

一日に二十から三十キロずつ移動して、野営や都市での宿営を何度も繰り返して、シャンティたちは最初の目的地であるカバルス地域の要塞都市ブランビーにやつとのことと辿り着いた。

カバルス戦役の際、ブランビーは一時期シャンティにより治められていた。その時は全軍の拠点、糧秣や武器の倉庫として機能していた都市であり、シャンティは持ち前の快活さでこの都市の治安を維持し、その機能を最大限に引き出していた。

シャンティたちカバルス鎮定軍はブランビーにていくらかの休暇をとり、同時にカバルスの各地域の情勢を調べることにした。この頃、西都ヒツパリオンより百名のカバルス騎兵が届けられる。

休暇を告げられると約五千の兵士たちは喝采をあげながらブランビーの街に繰り出した。シャンティ王子がお忍びで少数の近衛兵を連れ立って歩くと、いたるところにサウルス兵の騒ぐ姿が見られたときどき、彼をハラハラさせるような事態が発生しており、彼は本気で禁酒令を出そうかと考えたりもした。

「そこまでやったら酷だろうよ」宿舎に帰った後にギャロップにそれを話すと彼はこんなことを言った。「兵士たちはいいやいやカバルスなんぞに出向いてんだぜ。少しくらいの気晴らしもできないんじや、やる気なくすぜ？」

言いながらギャロップは市場で買った馬乳酒をイスに座ってがぶがぶ飲んでおり、シャンティは、自分の酒が取り上げられるのが嫌なだけじゃないのか、と邪推した。

「でも、あまり好き勝手やるな、くらいは言ってくぎを刺しておいた方が良くないじゃないだろうか。ぼくたちはカバルスとの友好を強めるために遠征を進めてきたわけだろう？ それなのに問題を起こして関係がもつと悪化でもしたら……」

「お前ね、人間関係と言うのはそう言う風にぶつかり合って良くなくていくもんなんだよ」

「何を言ってるのやら、君はそのぶつかり合いを積極的に避けるタイプじゃないか」

「おれは鋼鉄のように固い男だからな。まともにぶつかり合ったら相手の心を砕いてしまうのさ」

「おやおや何か言ってるよ。ええ？　なんだって？　おれは鋼鉄のように固い男？　待っててくれ、今すぐ日記に書いてくるよ。君の恥ずかしいセリフをレジエム家の末代まで残すためにね」

「いやなに、それはおそらく無理だろう。なぜならお前はここでおれに殺されるんだから。残したいなら血の文字で残すんだな。しかし、それもこの馬乳酒で汚されるが」

「君は本当にそれが好きだね。そんなに美味しいかい？」

「ジューズに比べたらうまくないさ」ギャロップはヨーグルトのような馬乳酒をシャンティに差し出した。シャンティは受け取って、匂いを嗅いだ。シャンティは馬乳酒の匂いになれないようで、鼻をつまみながらそれを飲んだ。「それでも馬乳酒は栄養価も高いし、産婦に飲ませれば乳の出もよくなる。お前の魔女にでも飲ませてやれ。奴ならきつとドバドバ出るようになるぞ」

「彼女はきつと飲まないよ」シャンティは馬乳酒を入れていた器を返しながら言う。「彼女はおいしい物しか口にしない」

あいさつがわりの会話が一息つくとシャンティは懷から羊皮紙で造られた本を出してギャロップのベッドに腰を下ろした。寝ころんでしおりの入れられたページを開ける。ギャロップは「なんだよ長期戦か」と冷やかしながらも馬乳酒を飲み続けた。

少しして、ドアがノックもなしに開いた。「シャンティ！」と怒鳴りながら入ってきたのはジャーニイである。シャンティは驚いて彼を見た。

「どうしたんだい？　何か？」異常事態でも？
と彼は首をかしげた。

「やはりここにいたか……連絡を取りやすいように出来るだけ自分の部屋にいろと言っただろう」とジャーニイはギャロップを意味もなく睨みつけた。ギャロップは、私は悪くありません、と言うようなおどけたようなポーズを作って見せた。「いや、それよりも……おい、軍議だ」

「軍議？」ギャロップが最後の酒をグイッと飲みほしてから言った。「昨日今日ここに着いたばかりなのになぜだ。各地の情報だつてまだ分かっていない」

「意味なく従軍してきた奴らがそれを望んだのさ」ジャーニイが言う。奴らとは今回の遠征に従軍してきた武官・文官ら監視官たちのことである。「反乱諸部族との戦闘に対してどんな策をとるのか聞いて、それを王都に送りたいらしい。なんでも……その作戦が認められない場合だつてあるらしいぞ」

「……はあ？」

シャンティとギャロップは顔をしかめながらお互いの顔を見た。そして、つまらないことが起こったと二人して立ちあがる。

「こつちだ」

とジャーニイが案内人を買って出してくれるらしいので、二人は彼の後について歩いた。シャンティは嫌な予感を覚えながらも、ギャロップの顔を見た。しかし彼の顔はいつもの無表情で、何を考えているか、何を感じているのかは見通せなかった。

板の床をトントントン歩いて、大部屋の前につくとジャーニイが「すでに皆揃っているからな」と部屋を指さした。ノックを二回して「入ります」と言った後に三人はそろそろと入った。

中には大きな机があり、その上にはカバルスの地図（精巧ではない）が敷かれていた。椅子に座っていた人々が一斉に立ち上がった。三人にお辞儀をする。ジャーニイが「座ってください」と言うような仕草をすると皆が一斉に座った。

今回の軍議に参加する者は総司令官シャンティ、ジャーニイ、將軍ギャロップ、侍従ウィス力、近衛兵団副隊長シェイバス、ジャー

ニイの侍従ベアード、ジャーニイの近衛兵団副隊長、四人の千卒長たち、カバルス騎兵隊隊長、サウルス騎兵隊隊長、王の侍従ラッドハッド、王太子の従者レフティス、エラルジス大將軍の部下サスホスとその他監視官……と雑用である。

見張りのためについてきた監視官たちはどこか尊大な態度だった。対して、実際に戦争を行うはずの者たちは居心地が悪そうにしている。

後から来た三人は上座に置かれた三つの席に向かった。中央にシヤンティが、左にジャーニイが、右にギャロップが座る。ギャロップは座るや否や、紙と木炭を雑用に要求した。

「まず……」とギャロップが最初に声を発するとゴホン、とどこからか咳払いが聞こえた。見てみるとラッドハッドだった。彼は軍議の開始においての始めの言葉をシヤンティに求めたのである。ギャロップは無視した。「まずは、言っておかなきゃならないことがある。面白い話だ、心して聞いてくれ」

監視官たちは口をパクパクしながら、同時に目を丸くしてギャロップを見た。当事者のギャロップはつまらなそうにツンとして言葉を続けた。

「シヤンティの戦史で聞いたかもしれんが……カバルス同盟国軍はおれの言うことをきかなかったから負けた。おれが様子を見ておけというのに、奴らは包囲なんぞをするから、お前たちに負けた。おれの言う通りにしておけば負けなかったというのに……」と、これが面白い話だ」ギャロップがそう言うときシヤンティは思わず、ふふっと笑ってしまった。監視官たちはじろりとシヤンティを見た。シヤンティは額に汗を浮かべながら目をそらす。ギャロップは続ける。「ここからはある教訓を得ることができる。さて、どんなだと思っ？ えー……君、その、髭の……」

ギャロップが無礼な態度でちょび髭のラッドハッドを指さしながら言うと、ラッドハッドはちょび髭を触りながら顔を真っ赤にしてそれを無視した。見かねた顎髭のベアードが声を出した。「私です

かな。ははは、参つたなあ」と起立した。

「いや、違う。お前じゃない。ラッドハッドだ」ギャロップは虚ろな目でベアードを見ながら言った。ベアードは汗一杯の顔でうすら笑いを浮かべながら、座った。ジャーニイは気まずそうに眼を伏せた。「まあ、いい。どうせわからんだろうからな。いいか、これから得られる教訓はこうだ……名将ギャロップの命令にはさからうな、だ」

「貴様」長身痩躯なレフティスが静かな声で、しかし怒りをあらわにしながら言った。彼はおかしくない背筋をただして座っている。「わかつているか？　ここは聖なる軍議の場だ。まずは主催者たる王子の言葉を聞くのが礼儀。それなのに貴様は……」

「シャンティがこの軍議の主催者？　馬鹿言うな、コイツはついさつきまでおれの部屋で本を広げながら、母乳の出を良くするといわれる馬乳酒をどうやって妻に飲ませようか、と策を練っていたんだ。こんなものの開催を画策する暇などなかった」シャンティは言い出したことがあったが、とりあえず彼に全てを任せることにした。「おれもコイツ同様暇ではない。なぜなら飲み切ってしまった馬乳酒を買いに行かねばならんからな。さて、お前たちをからかうのもここまでにして……では、本題に入ろうか？　まずは質問から入ろう。

質問があるものは？　………おや、いないようだ。では次に、閉会の言葉だが……これは、今もなお、妻に馬乳酒を飲ませる方法を考えているシャンティ王子に依頼しよう。シャンティ？」

「もういいだろう」彼は困り果てたように言った。そしてギャロップに懇願するように、彼らしく穏やかに言った。「彼らはほんと違っていいじめられるのには慣れていない。もう少し優しく接してくれ。戦闘時にとる隊形くらいでもしゃべってあげれば、彼らもうまく報告書をまとめてくれるだろうさ」

「なるほど、シャンティは夜の生活でよほど妻にいいじめられているようだな。君たち、これは報告に値する。今すぐ早馬を飛ばして、シュラク王に伝えるんだ。君の息子は大した男だ、とな」

「ギャロップ！」と、ついにシャンティは声を荒げながら立ちあがった。

「……はん、わかった」ギャロップは拗ねたように顔を背けた。で、雑用からさつき頼んでおいた紙と木炭を受け取ると紙の上に何かを書き始めた。皆がそれに注目する。「さつき、軍議の場を聖なる場と言ったがね……カバルスでは戦場が聖なる場所だ。覚えておいても損はないぜ」

ギャロップがそう言うのとカバルス騎兵隊の隊長は小さく「そうそう」と頷いた。数秒後、ギャロップは何らかの図を描いた紙を地図の上に差し出す。皆は身を乗り出しながらこれを見た。数個の四角が並べられている図だった。ギャロップが木炭で図を指し示しながら説明を始める。

「敵は騎兵が主体。こちらは、歩兵四千と騎兵千六百だから……歩兵が七割ほど、騎兵が三割ほど。で、主力はもちろん騎兵だ」

「しかし騎兵同士の戦いでは分が悪いだろう」ジャーニイが口を挟んだ。

「どうだろうな。カバルス同盟国軍が力を使っても四万弱の騎兵しか集められなかったのを忘れたか？ 仲間意識の小さいカバルスの諸部族がただけ頑張っても集められるのは千もいかなだろう」ギャロップがそう言うとはほとんどの者がハツとして、次には安心したような顔つきになった。「こんなこともわからなかったわけか？

ふん、こんなのにカバルスは負けたわけか。……で、だな。敵の数は低いことが大体予想できるわけだが、けれどもおれたちは補充を受けられるといっても基本的に現在の兵員で戦っていかねばならんだから敵騎兵の数が少ないからと言って、騎兵だけで戦うのは後々不利な状況を作る要因となる。防御力の高い歩兵で守りながら敵騎兵が分散し出したところを掃討する、と言うのが基本的な構想だ」「しかし」シェイバスが口を開くと、ギャロップはつまらなそうに彼を見た。言いたいことはわかっていて、と言うような目だ。「……まあ、言わせてもらおう。しかし、お前は前に言っていたじゃな

いか。戦場は全てが行き当たりばったりだ、と。もし敵がこちらの思う通りにならなければ？」

「例えばこちらよりも騎兵が多い場合とかな」

とジャーニイが追撃するようにギャロップに質問した。

「はつきり言っておこう。例えば敵がまた四万の騎兵を集めた場合、我々五千では対抗できん。大体、敵兵四万ともなれば本格的な大規模反乱だからな、おれたちはどこかで籠城戦をしてサウルス軍を待つことになるだろう。まあ、これは極端な例だ。じゃあ、四万よりかは少なければ戦うのか……いいや、相手が三万でも逃げる。二万でも逃げる。一万ならば……やれるかもしれん」ギャロップがにやりと笑う。シャンティは本当に楽しそうだな、と呆れた。「一万が相手ならば、こちらに戦いやすい場所を選び、弓兵で遠距離攻撃をする。さらに地面に罠を仕掛ける。簡単な、転ぶだけの罠でいい。騎兵は先頭が転倒するとそれに巻き込まれて次々に転倒し始めるからなあ。こうやってじりじり敵兵を減らしていつて、良い頃合いになると全軍で掃討だ」

「平原でそれと戦わなければならない場合はどうする？」ジャーニイが言う。

「戦わない……というのは駄目なんだろう？ 確かにそれを考えるのには価値がある。戦略上では戦わないという選択肢をとることができるだろうが、今回の戦闘は基本的に戦術単位の戦闘になることが多いだろうからな。それで、どう戦うか……まず、平原での戦いだから奇襲は難しい。つまりは側撃や背撃は容易には無理だな。これを踏まえて考える。つまりは残されたのは正面衝突のみ。こうなると……」ギャロップは手を顎にあてている。この場でこの問題について考えているようだった。「相手の弱点をつくしかない。敵の連携が弱い所、分散している所……ふむ、しかし、もしそれがないとすれば？ 兵を片方に集めれば何とか。……それ以外の方法は？ そうだな、盾を持つ歩兵を、壁を作るように並べ、衝撃力を殺し、瞬時に軽装剣歩兵で敵機動力を潰す。次に騎兵を使いたい、包囲し

て……これは……大丈夫か？　こちらの士気と練度に左右されるが……」

一番付き合いの長いシャンティですらこのようなギャロップを見たことがなかった。彼は興味深そうな顔つきでギャロップの横顔を見つめていた。

「も、もういい」ジャーニーが引いた。あまりにも酷な状況をつきつけすぎていると、彼は思ったらしい。「さすがに、これは誰にも無理な状況だ」

「いや、主要戦力を片方に寄せて片翼が敵を圧迫、反対の片翼は守りに徹する。つまりは、これが進めば片翼包囲になるわけだ。これで戦えば、ある程度大丈夫なはずだが、問題は防御側が都合よく耐えられるかどうかだ。そうだな、ここには防御専門の兵種でも作って置いておくか？　丈夫な鎧を着た者でも」ギャロップはそれでも考え続けていた。腕を組み、自分の描いた図を見つめて、息は静かに吸って、吐いていた。「これを発展させれば、士気練度共に高い三倍以上の敵にも勝てるだろうか？　……いけるかもしれない」

ギャロップは軍議そっちのけでぶつぶつと独りごちている。ジャーニーは図を指差して言う。

「わかったわかった。その話はもう終わりだ……それで？　この図はなんだ」

「……それは、基本的な陣立てだ。こういうものは有機的に動けるように、柔軟に動けるようにせにやならんからな。まず前方に盾を持つてる槍歩兵を設ける。その後ろに剣を持つ軽装歩兵。すぐ両翼に王子と近衛兵団。剣歩兵の後ろにカバルス兵（はん、これをおれが指揮できんだけで戦力は半減だ）。そんで最後方でおれがサウルス騎兵二百を率いる」

「その位置ならば、ええ、カバルス騎兵に指揮を与えられるように思えますけれども？　ギャロップ將軍」とラッドハッドが初めて口を開いた。

「直接指揮しなければ大丈夫だと聞いたが？」ギャロップはむつつ

りしながら答える。「とはいえ……やつらは、おれの行く方向についてくることになる」

「それならば指揮しているのと同じでは、ええ、ないでしょうか？」
「つまりは、おれと奴らの間はいくらか離れていなければならんわけか？ それなら、おれが敵陣にいる間は、カバルス兵は敵陣に突っ込めなくなる」

「それは……そうですが。ええ」

「もともと、お前たちの主人の突きつけた条件が常軌を逸している。もしこの陣形がだめならばカバルス兵など返してしまった方が良く、その方が食料の節約になる」

「そ、それはだめだ、ギャロップ」思いもよらずシャンティがそれを拒否する。「今回はカバルス人の地位向上のために行っている遠征だ。カバルス兵にも手柄を立ててもらわなければ困る」

「大体」ラッドハッドが心底納得しない様子で言った。「あなたが、ええ、敵陣に突入する必要があるのでしょうか？ あなたは後方で全体の指揮のみをしているほうが安心なのではないでしょうか？」

「……お前、戦闘に参加したことはあるのか？」彼の言葉を聞いたギャロップは違和感を覚えた。「たぶん、ないだろう？」

「……従軍ならば、何度か、ええ」

「話しにならん」ギャロップはカバルス同盟国軍の時のことを思い出しながら、頭を抱えた。「これはとある近衛兵団副隊長にも言ったことだがな。戦闘と言うのは行き当たりばったりなところが多く、現場での直感や機転と言うものが重要視されるわけだ。だからおれがいくら精密な作戦を支持しても、それを遂行するべく走って行った奴らが小事のハプニングにも対処できないようなボンクラだったら作戦もくそもない。おれが自ら隊を率いて敵主力や決勝点をつこうとするのは、おれが一番機転の効く将だし、その方が作戦成功の可能性が高いからだ！」

「……わかりました。ええ、カバルス騎兵の指揮については、少しは目をつぶることにいたしましょう」ラッドハッドは悩みながらも、

ギャロップの演説に納得した様子を示した。「戦闘中ならば、ええ、何が起ったかわかりませんからね」

「……」ギャロップは鼻から大きく息を吐いた。一息ついた感じだった。「それでだな、この陣形からどう動くかだ。さつきも少し言ったが、敵を倒したいならば弱点をつくのが一番だ。騎兵は防御力が弱点だからそこをつく……ってんじゃない。敵陣形の弱点をつくってことだ」

「敵陣形の弱点……兵力の薄い所ってことか。中央、左翼、右翼……それら兵力の差は顕著になるだろうな。なぜなら、敵は諸部族の寄せ集めにすぎないから」ジャーニイが図を見ながら言う。「大体はわかった。中央ではなく、左右にそれぞれ近衛兵団を設置したのはそのせいだな？ お前は後方からそれを見極めて、敵弱点のある方向の近衛兵団と共に敵陣に突っ込むわけだか。残った方は歩兵隊の所に残り、指揮を続ける」

「……けっ、正解だ」ギャロップは不機嫌な顔を隠しもしない。「もし全ての部位が均等な軍隊があるならばそれは統制のとれた奴らかもしれん。そして統制がとれているわけだから士気練度共に高いことも多いだろう」

「その場合は？」

ジャーニイは楽しそうな顔をしながら聞いた。シャンティはさながら兵学の授業を聞いている気分になっていた。子供の頃もジャーニイは兵学の授業だけはこうやって先生に食いつくように質問を繰り返していた。

「……お前の方から出る」ギャロップは頭を掻きながら言った。シャンティが見るに、やや照れている様子だった。「シャンティの戦史はおれも見た。そしてカバルス戦役時のこともできるだけ思い出して、二つを照らし合わせて考えたが……お前たち双子はその戦闘傾向もまるで違うじゃないか、本当に双子なのか？ シャンティは橋の下で拾われてきたとかじゃないだろうな」

「どつという意味さ」シャンティが思わず身を乗り出す。

「……シャンティ、お前の軍隊の密集隊形はかなり固い」とギャロップが言うと、近衛兵団に關係するウィスカとシェイバスのバルバム親子がどきりとして、顔を見合わせた。まさか、褒められるとは……という心境である。「しかしそれは兵士たちの意識が真ん中に行きすぎているということだ。お前はよほど兵士たちに好かれてゐるらしいが……そのせいでお前の軍団は展開と移動が遅い。性質から考えて攻撃には適してないんだ」

バルバム親子は恥ずかしさに顔を赤らめた。確かに、シャンティの軍団はその密集の固さから守りは得意なのだが、攻撃はうまくない。これはシャンティの人徳からの現象である。つまり、彼らは敵の首を刈つて得る栄誉よりも、王子を守る名誉を重視しているということだ。対して……。

「対してジャーニィ……いや、ジニーは」とギャロップが話を続ける。

「最後に様か、王子をつける」とジャーニィが返す。

「テメーの軍隊は兵士の意識がうまいこと外に向いている。戦闘に勝つには攻撃せねばならんことをわかっている。しかしそれはやはり守りが手薄になるということだ。シャンティの資料で見たが、カバルス戦役時は弟に比べ兵士の消耗が早かったはずだ。それはつまりそう言うことだな」

「……なるほど」ジャーニィは何やら考えながら頷いた。「改善方法は？」

「んなこと知るかよ」ギャロップが対して間髪いれずに返す。

「おい」

「つーわけだ。敵兵力が均等な場合は兄王子側から出る。攻撃力はそちらの方が高く。残ったシャンティは防御が得意。これなら一挙両得だ」

「素晴らしい！ ええ！」

とラッドハッドは拍手を飛ばしながら言った。その表情と仕草には邪気は感じられず、心底感心したようだった。

ギャロップは周りを見渡した。それぞれ、最低限の納得はしたような表情を浮かべ、じつとギャロップを見つめていた。

「……ふん、軍議はもうこれでいいだろ？　おい、報告書を作るのにはどうだ？　十分か？」とギャロップがラッドハッドを見た。ラッドハッドは十分、と言うようにうんと頷いた。するとギャロップは腕を広げていった。「それなら軍議は終了、即時解散だ。おれは好きに休ませてもらう」

「最後に」レフティスがやはり静かな声で、解散ムードにくぎを刺した。「聞いておかねければならないことがある。ギャロップ將軍、あなたはさつき、三万四万の敵ならば逃げると言ったが、もし……もし、その数の敵を相手に逃げられなくなった場合はどうするつもりかね？」

会議場がしんと静まり返った。皆は、今にも帰ろうとしていたギャロップの方を再度見た。彼は虚空をじつと見ていた。レフティスはもう一度「どのように対処なさるおつもりなのかね」と丁寧に訊き直した。

「……」ギャロップは床の方を見ながら言った。「最初に、その状況を考えなければならない。敵が三万四万で襲ってくるのならある程度事前に分かる。で、それからは逃げれない。……こうなった場合におれたちがとる行動は一つだ。たった一人の司令官を、逃がすことだ。その他五千の命を賭してな」

「ぼくを？」シャンティが苦痛に顔をゆがませる。「ぼくのために五千の兵の命を？」

「そうだ」ギャロップは顔をあげて言った。「まずは歩兵を二千ほどの歩兵を配置する。隠せる場所があるならば千ほどを伏撃要因として隠す。そいつらが敵を食い止めている間に他の者は逃げる。その時、カバルス、サウルスの近衛以外の騎兵に千の歩兵を乗せて行く。つまり六百人は騎兵に二人乗りだ。いくらか後、残っていた者たちが撃滅され、突破されたとなった段階でその歩兵たちを降ろして先の捨て駒と同様の配備につかせる。次に犠牲になるのはカバル

ス騎兵、サウルス騎兵、その指揮はおれがとる。次は兄王子。最後にシャンティの近衛騎兵……」

「戦いには勝てないか？」レフティスが嘲笑するように聞いた。「君は、常々自分のことを天才だと言っていると聞いたか？」

「なあに、おれが五千人もいるか……」ギャロップは右手をあげて、握り締めた。彼の顔はそれでも自身に満ち溢れている。「この利き腕のように、おれの意のままに動く五千の兵がいれば勝てるさ。どんな大軍にも！」

シャンティには、彼が嬉々としているのが声を通してわかった。なるほど、君は本当に戦争に狂っている、と彼は微笑ましく思った。シャンティはレフティスを見た。彼は嘲笑を止め、つまらなそうな顔を見せていた。

軍議が終わるとそれぞれが早々に自室へと戻って行った。ラッドハッドやレフティスなどの監視官たちは王都センチュリオンへの報告書を作成せねばならないと忙しそうにしていた。

シャンティは自室に戻って、少し固く、狭いベッドの上に寝転んで、天井を見つめていた。彼は軍議の最後にギャロップが言ったことについて考え事をしていた。

彼は考えがまとめられない様子でゴロゴロと狭いベッドを転げ回り、心機一転と言うように立ちあがるとテーブルの上にある日記帳の前に向かった。

「ぼくは……」シャンティは呟いた。「本当に、彼らを見捨てて逃げることができるのだろうか。ぼくにそれほどの価値があるのだろうか。いや、あるはずがない。ぼくはおおそ、そこいら中にいる人間と同じほどの価値しかない。……いや、彼ら以下の価値しかないかもしれない。ぼくは荒野を耕し農作物を作ったことなどない。鉄を打ち、剣や盾や鎧を作ったことなどない。家畜を慣らしたこともない。身にまとう服の原料を作ったこともない。木を組み合わせ、石を組み合わせ、住むところを作ったこともない。アストローボ^{アストロラーボ}ン先生のように識者を育てたこともない。ぼくは生まれ持った位や、

優しくしてくれる周りの人々に甘え、好き勝手に生きてきたただけなのだ。死の危機にみまわれてなお、ぼくはぼく自身の無価値を知りながら、そんなぼくを救おうとする皆の愚挙を了承することが出来るだろうか。そんな時こそ、ぼくは、最後の最後で自分に価値を生み出すために、皆のために自分を犠牲にするべきではないのか！たとえ、それによって、後世の歴史家にぼくが愚かだと評価されたとしても、ぼくには五千の命を救った事実があり、ぼくはそれを、この無価値で愚かな王子の唯一の誇りとして胸に抱き、晴れ晴れと死んでいける！ そうだ、そうなのだ！」

彼は同じことをその日の日記帳に書いている。このような考えの末に彼は「自分は仲間のために犠牲になる」という決意を抱くに至ったが、けれども、それは自分がもしもの時にとるであろう行為に対し、特に何の価値もない「理由付け」をしたにすぎない。

なぜなら、人として価値だとか、王族としての誇りだとか……そんなものがなくても彼はきつと仲間の命を助けるために、容易く自分なんかを犠牲にするだろうから。

9・将軍、軍議をさせられる（後書き）

画像はジャニ男です。

岩明均さんの「ヒストリエ」に出てくるアレクサンドロス三世に似てしまった。全く関係ない人をモデルにしたのに……。

10・戦いに休息などなく

> i 3 2 3 3 7 — 4 0 5 7 <

「槍歩兵隊、何をしている！ 突破されるぞ、もつと密集せよ！」
ギャロップの怒号が戦場に鳴り響く。

すでに戦いは始まっている。敵兵は歩兵二千、騎兵千の合計三千。それらが小さな平野で五千強の戦力のサウルス兵と激突している。まずは密集隊形の敵歩兵がこちらの歩兵と衝突を繰り返し、敵歩兵の密集隊形が崩れ、退却するかと見えた瞬間、敵歩兵の隙間から電光石火の騎兵隊が突撃をかけてきた。それによりカバルス鎮定サウルス軍は防戦に立たされた。ギャロップも防衛に残り、現状は反撃のタイミングを図っているところだった。

「ギャロップ！」ジャーニイが数人のお伴と共に彼に向かって走ってきた。「シャンティがいらない。おい、理由を知らないか？」

「馬鹿が、そんなことを聞くために持ち場を離れたのか？ 糞、お前の指揮している歩兵左翼を見る。押され始めている」

ギャロップが怒鳴ると、ジャーニイがそちらを見て顔を青くする。

「だから、シャンティは？」急ぎながら彼は言った。

「説明している暇はない。持ち場に戻れ！」彼が押しつけるように命令すると、ジャーニイはしぶしぶ持ち場に戻った。ギャロップは持ちこたえている歩兵たちに檄を飛ばす。「もう少し持ちこたえろ。すぐに反撃のチャンスがやってくる」

サウルス兵士たちが返事をするように、声を合わせて何事かを叫ぶ。断続的に突撃してくる敵兵の衝撃力に耐えきれなくなって地面に崩れる兵士が出ると、すぐにそこをカバーするように後ろの兵士が盾を構えて飛び出す。

オエアー、オアー、ゴラー、ハーンと獣のようなまったく意味のない雄叫びと、鉄と鉄が撃ち合う不愉快な金属音が響く。いつも乾いた空をしているカバルスにしては、この日は曇天だった。いや、

さつきまでは快晴だったにもかかわらず急速に暗雲が立ち込め始めていた。

グン、グン、グンと敵兵は勢いを増しながらサウルス兵の作る盾の壁を押してくる。サウルス兵は盾同士のわずかな隙間や、その上から敵兵を槍で突き刺す。敵兵の兜には槍の先端がいくつも埋まっている。

暗雲はごろごろと音を立てながら、やがては戦場に雨を降らせ始めた。その雨はすぐに大雨になり、「スコールだ！」誰かは叫んだ。一瞬にして周りの様子が分かりにくくなる。

「突撃い！」と良く通る声が雨音を切り裂いて戦場に響く。同時に敵軍に何らかの動きが見られた。

ギャロップは舌舐めずりして戦場を睥んだ。みるみるうちに敵兵の統制が無くなってくる。ギャロップは手を動かして、自分の指揮するサウルス騎兵団に突撃の準備をするように指示した。彼らは唇を真一文字に締め、槍を握り、それがなくなった時のための剣は腰についているかを確かめた。その中の誰かが言う。「のどが渴いた」「おい、水ならそこいら中にあるぜ」返事をした男は阿呆のように口を空に向かつて開け、空から落ちてくる痛いほどの雨を舌で受けた。何人かの兵士が苦笑しながらもそれをまねする。

「無駄だ」ギャロップは戦場の様子を観察しながら言った。戦場の音楽の中で仲間の声はなぜかよく聞こえる不思議。「その渴きは、敵を殲滅せねばならん」

「ちげえねえや」兵士の一人が答える。「行つて、殺して、血をすすらなきや」兵士たちの下卑た笑い声が響く。ギャロップは右手に持つており槍を天に向けた。兵士は恐怖を噛み殺すように、歯を食いしばった。ギャロップはふつと息を吐いた。

「まずは顔見せするだけだ。敵に、うぎゃー、おれたちを殺しまくってるサウルス騎兵がいる。うぎゃー、逃げろー。つてな感じに思わせるだけだ。それだけで、心理的打撃は大きい」敵兵を真似た將軍を見て、騎兵隊はうすら笑いをする。「ふん、この状況で笑う余

裕があるんなら、まあ、大丈夫だろう」

澄ました顔で目の前を見つめる彼の後ろで、兵隊たちはぶんぶん
と首を横に振った。

「……それでは、一同」ギャロップが気を取り直すように言った。
兵隊たちがびくりとする。「冷静に……速歩前進」

槍を敵方に向け、馬を速歩で駆けさせた。ギャロップを先頭にし
て、同じ速度でサウルス騎兵は続いた。ポクポクという音を戦
場に落としながら、彼らは前に進んだ。槍兵がさつと横に避けて彼
らの進撃路を作った。

前線はすでに混乱の渦にあった。敵兵は、自分たちの陣営の後ろ
で何かが起こっているのを感じ取って、慌てていた。ギャロップは
混乱して前を走り抜けた敵兵をグチツと槍で突き殺した。

「前へ！ 前へ！」ギャロップは一声ごとに敵を突き殺しながらポ
クポクと進んでいく。後ろのサウルス騎兵も「はっ！ はっ！」と
返事をしながら錯乱した敵兵を殺していく。雨降る戦場で蹄の音が
リズムカルに闊歩する。その音はこの慌ただしい場所に、驚くくら
いに穏やかに恐怖を振りまいている。戦争の中心地で猛威を振るう
サウルス騎兵を見た敵兵はついに完全瓦解し、剣と槍と盾と兜を捨
てて四方に逃げ始めた。

「逃がすな、逃がすな」と遠くでジャーニーが命令を飛ばす。「逃
亡者、反抗者は殲滅、殲滅だ。降伏者は全ての持ち物をはぎ取り後
方に送れ」

ギャロップのいる中心地ではもう敵はほとんどいなかった。ギャ
ロップが後ろを向いて言う。

「これから敵主力に向かう。第一百人騎兵隊はおれと共に敵主力の
撃滅を目指し、第二百人騎兵隊は敵主力にいるはずのシャンティた
ちを探せ」

兵士たちは元気よく「はっ」と返事をする。
「では散開。生きて会おう」

兵士たちは嬉々として「はっ」と返事をした。

雨はまだ降り続いている。ギャロップたちは速歩のままですいすいとすいーと敵主力に侵入した。

「総司令官たるシャンティを少人数で敵陣に突撃させるとはなんだ！」

死体がそこいら中に残る戦場後地でジャーニイがギャロップに突っかった。

ギャロップはつまらなそうな顔で戦場を見渡している。傷ついたサウルス兵たちは仲間に手当てしてもらっている。元気な者は逃亡者の追撃や周囲の見回りをしている。雨は完全に止んでおり、空は嘘のように真っ青だった。しかし彼らは空のついたその嘘によって一瞬にして勝利をもぎ取ったのだ。

「戦時中に、雨が来る前兆をおれに教えたのはシャンティだ。さすがに本を読みまくっているだけあつてそこいら辺の知識はなかなかある。それでおれは奴に、雨にまぎれての敵主力背撃をするように返事をした」

とギャロップは血や雨でぬかるんでいる戦場を足でじゃばじゃばと歩きながら言う。

「なぜ、お前やおれじゃだめなのだ！」ジャーニイは彼と並びながら歩く。

「おれが行く場合、後のことをいちいち誰かに説明せにやならなくなるだろう。あの状況ではその時間すら惜しかった。そしてお前はあの雨にも気付いていなかったし、それを使用することも考えだせなかっただろうよ」

「なぜ？ おれだって、あれが来ることがわかっていれば」

「この雨は基本的にあんなスコールばかりだ。お前は雨を使用して敵背撃などと聞いても、瞬時に納得してくれんだろう？」

「……」ジャーニイは地面に目を伏せ、悔しそうに歯をカチカチさせ始めた。

「あー！」

突然、ギャロップが悲痛な叫びをあげた。

「どうした？」

ジャーニイは敵襲かと思つて、腰の剣に手を伸ばしながら訊いた。「あれ……」ギャロップは遠くにいる二頭の馬を指さした。一頭は剣で造られた角のついた面甲シヤフロンを装備している白い馬で、もう一頭はすらりとした鹿毛の馬である。その二頭の馬は必死になつて交尾しており、それを見ている兵士たちが「いけ、そこだ、やれえ」と歓声をあげていた。「あれは……おれの馬だ。」

ジャーニイは遠く過ぎてよく見えないので、目を凝らしながら聞いた。

「……お相手は？」

「ルルディファイロ……」

ギャロップの目からは生気が無くなり始めていた。

ブランビーを出発したカバルス鎮定軍は西都ヒツパリオンにつく前に野盗と二回や鬭り合い。その両方をギャロップの戦術で打ち倒した。ヒツパリオンについた後はそこを拠点とし各地の紛争を治め始める。

中規模の、正面から戦おうとする敵兵に対してはギャロップの作戦も有効だったが、敵からの攻撃は基本的にゲリラ襲撃であり、ギャロップが最初に言つた戦術だけでは対処できなかった。しかしギャロップはすでに対策法を考えており、軍の分割などで敵を大きく包囲して敵の地の利を打ち消した。土地勘についてもギャロップは元からここにいたのだからもちろん十分すぎるほどそれがあつた。

シャンティやジャーニイも（精巧でない）地図や斥候せうこうの集めた情報を駆使して敵兵を追ひ回した。この時、シャンティは元ヒツパリオン王族、現カバルス地域監督者にカバルス地方の精巧な地図を依頼しており、これは大分後になつて完成する。

そして現在は二二七年の夏の真つ盛りである。ここまでに彼らは十回を超える中小規模戦闘を経験しており、敵を取り逃がすことは

あれど敗北はまだ無かった。

シャンティの侍従であり、近衛兵団の隊長であるウイス力は戦場に生えていたちょうどいい大きさの石に腰下ろしながら今回の戦闘の記録を記録していた。その横では息子のシェイバスが剣についた人の脂を拭いていた。

シェイバスはそれが終わると戦場後地を見渡していた。死者がすぐ近くにもあるが、それは大体が敵兵である。

「すごいもんですね。うちの將軍様はよ」と彼はぶつきらぼつに言った。「しかも王子やおれたちを一番危険な所に突入させてよ……全く、怖れいますぜ」

「まだギャロップ將軍を認めていないのか」

ウイス力は紙の上でペンを滑らせながら聞いた。

「認める？」シェイバスはムツとしながら返す。「將軍としては認めてる。しかし……」

彼は以前にも考えていたことが、いよいよ考えすぎではないのではないかと思い始めていた。強すぎるギャロップ將軍を恐れた王都の官人たちが王子もろとも彼を排斥しようとするのではないか、というあの考えである。

「親父殿はどうですか？」シェイバスは自分の考えを言わずに尋ねた。「ギャロップをどのように評価しているのですか？」

「將軍としては……おそらく、何者にも比類なき才がある」

「比類ない？　ならば、我らが王よりも……ですか？」

「……」ウイス力は少し考えた後、小さく頷いた。「そしてまだ若い。彼がサウルス国で本当に軍人をしてくれるのなら……」

「くだらない」

とシェイバスは返すが、その後の言葉は続かなかった。彼もギャロップの軍才には舌を巻いている。勝てる者も思いつかない。彼への対抗者として、ジャクナー世、シハルク王、シユラク王……それらの名を挙げてみても、それは臍臍にしかない気がしていた。

「お前は、彼に率いてもらいたいと思わないのか？　彼の下で名を

はせたいと思わないのか？」

「なんだって？」シエイバスはおかしそうな顔をして父を見た。「親父殿、それはどういう意味ですかね？」

「お前は思ったことはないか？ 歴史に名を刻みたいと」ウイスカは書くのを止めて、それでも紙の上に視線を落としま息子に、自分の心根を語る。「しかし歴史に名を刻めるものはそういない。おそらく、偉大なる業績を残した王族くらい……それか、その下でそれに類する功を為した將軍か……。ここより北、サウルス国よりもさらにさらに北の国に、そのような者たちがいたのはお前も知っているだろう。わずか二十歳にしてモーキリニアの北に広がるあの広大な地を支配した偉大なる王。わずか三十二歳にして死んでしまった偉大なる王を。そして、その下につき従っていた伝説的な十数人の大將軍を」

「しかしおれがこれから先、忠誠を誓うであろう王はおそらくジャクナ三世王太子で、その下にいる將軍がギャロップだとしたら、おれは名前など………親父殿？　つまりは、あなたはギャロップを？」

「違う。そうではない、本当にそうではない」ウイスカは苦しうに首を振った。「私は偉大なる大將軍の下、独りの侍従でもいいんだ。ただ……私は憧れているんだ。戦争の覇者の歩く、偉大なる勝利の道を……」

シャンティに物を書く喜びを教えた多筆家の彼は、やはり自分の愛するその分野にて何らかの業績を残そうとしていたのだろう。シユラク王につかえ始めた初期の段階で彼が書いた書物からもそれが伺える。

彼の残した『シユラク王東方遠征記』は起こった出来事の詳細ではなく、どちらかといえば古代に見られるような豊かで雄々しい詩的な表現で書かれている。なお、『シユラク王東方遠征記』はシユラク王へ差し出した物ではなく、彼は別に簡素に事実のみを書いた報告書も著している。

「つまり」悲痛さを含んだ父の言葉を聞いたシェイバスは、胸糞悪そうに立ちあがり、剣を肩に掛けながら、蔑むような目でウイス力を見ながら低く怒鳴った。「親父はギャロップの戦史を描く、奴専属の歴史家になりたいわけか？ シャンティ王子の侍従ではなく？……それほどつまらないか、王子の歴史を書くのは」

「お前にはわからない。歴史とはいつも喧騒と狂気と異物感を主人公に書くものだ。そして戦場にはその三つが揃っており、將軍の前にはその戦場と、物語を一層引き立てる勝利がごろごろと転がっているのだ！」ウイス力は顔中に汗の玉を浮かび上げながら、自虐的な笑みを息子に向けた。「……王子の静かで華やかで健やかな日々はきつと……未来を生きる人々には、つまらないだろうよ」

「ならば、今からでも奴の侍従になればいい！」シェイバスは胸の奥がぶるぶると震えるのを感じながら言った。自分が誇りに思っていた父親が、愛しきっていた父親が見事に自分の目の前で崩れ去ったのを感じながら言った。「奴と共に生き、退廃的で嗜虐的じぎやくで……そして……ふん、まあ、せいぜい良い老後を送るがいいさ」

シェイバスは言い残すと、とぼとどこかに歩き始めた。ウイス力はその後ろ姿を目で追いながら、頭を抱えて守護聖獣に懺悔した。

この頃、ウイス力は王子への不忠と將軍への畏敬などから来る葛藤を日記に書き綴っている。

シェイバスは戦場後地を歩いて兵士たちに指示を出した。敵兵を追いかけていた騎兵たちも戻ってくると、シェイバスは戦場から出て行く準備をするように全軍に伝令した。そろそろ日が暮れようとしていたが、こんな不衛生なところでは野営できない。死肉を喰いに集まる野犬共に悩まされ、恐怖から夜寝られないなんてことはつまらない。

シェイバスは元気な近衛騎兵隊員に野営地を探してくるように命令すると、自分の分の準備を始めた。その最中、ギャロップが顔を

真つ赤にしてどこかに歩いて行くのを見たシェイバスは何事か、とそれについて行った。

ギャロップはシャンティの寝ている木陰へ猛然と歩いていき、疲れ切つてぐったりとしているシャンティの胸ぐらをいきなり掴みあげて無理やりに引き寄せた。

「おい、お前の愛馬がおれの馬を無理やりやってやがるぞ！ どうしてくれる！」

「なんだ、ギャロップかあ」彼は寝起きすぐのふんわりとした感じに返した。日々の疲れが蓄積しているらしく、このところシャンティはよく眠っている。「ルルディファイロはこのところの勝利の連続で興奮してるんだ。おれもやればできるんだ、って昨日も言つてたよあ」

「え、しゃべつたの？ いやいや、それどころじゃない。その馬鹿がだなねえ、いま何してると思う？ シャンティ君？」

「そうそう、ルルディファイロと言えば、君から貰つた角の面甲シャンロン。あれをすごく気に入っていてね。戦闘が終わつても外そうとしないばく、調べたんだよ。あの角の面甲シャンロンはカバルスでは総司令官の馬がつけるものらしいねえ。君も粋だねえ。形から入るタイプとも言えるねえ」

「おい。おれの話聞け。聞かんと、てめえ、ぶん殴るぞ」

「おいおい」シェイバスは王子に掴みかかつているギャロップの手を握る。「話しは聞いた。將軍、それを王子に八つ当たりするのはおかしいんじゃないですかね」

「何が八つ当たりだ」ギャロップはほとんど涙目になって叫んだ。「コイツがちゃんと馬鹿馬を躡けておかないからこんなことになつたんじゃないかっ」

「ああ、それは、その、返す言葉ありませんがね。しかし……しかし……はい、返す言葉ありません」

「あ、ほら、ギャロップう。カラス飛んでるう」

シャンティはぼおつとしながらカラスを指さした。ギャロップの

こめかみに浮かんだ血管がぴくぴくと動きだした。

「隊長」今度は兵士がやってきた。「野営地を探しにいった騎兵隊が戻りました」

「わかったわかった」シェイバスはとりあえずギャロップの握りこぶしをほぐして、王子から引きはがした。「移動の準備をしてくれないませんか。こんなところで寝たくないでしょう？」

「……ふん」

ギャロップは涙目のままどこかに去って行った。シェイバスは胸をなでおろす。

その後、シャンティを何とか正気に戻して（ジャーニーが平手を見まった）一同は野営地に移動を開始した。

近くに川や雑木林がある野営地ではすでにテントなどの骨組みが建てかけられており、後の作業は皆で平等に分担して野営を完成させた。完成した頃には辺りはもう暗くなっており、サウルス軍は篝火台をいくつか設置した。

見張り以外の皆が同時にとった食事は質素な物である。内容は固いパンやチーズ、葡萄酒、ドライフルーツ、燻製肉、酢漬けの魚、卵などが毎日適当に配られる。これは野営の時の食事であり、宿営つまり都市での宿泊の時は柔らかいパンやもつと新鮮な肉や野菜果物を食した。サウルス軍は特に乳製品が好きなようだった。それを聞いたギャロップはサウルス女性の胸を想像しながら「なるほど」と言った。

彼らは食事の時に今日の戦功を発表し合った。やはり主役はシャンティと彼の近衛兵団であり、彼らはヒッパリオンで流行していた歌を、肩を組んで歌った。カバルス人も同じ所にいて、歌う彼らを生やし立てたりした。ここだけ見ればサウルス国にはびこる人種差別は見られなかった。シャンティの目には、彼らは戦友以外の何物でもなく、すでに強い絆で結ばれているように見えていた。

こんな時、シャンティは賑やかな兵士たちにうまく溶け込みコミユニケーションをとるが、ジャーニーは平民出身者たちとはどう接

すればいいかわからず自然と無口になった。だから彼の周りには比較的無口な兵士が集まった。けれども、そんなジャーニイも酔いに酔ってくると「自分が王位についた時はお前たちを官人や將軍として引き立てよう」と愉快そうに演説し、喝采を浴びたりもした。

さて、食事の最中も見張りのためのいくらかの兵士が歩哨となつて野営の外を歩くわけだが、これは交代制となっている。食事が終わった後、歩哨の任に当たっていない者はそれほどやることもないので、やや窮屈な大天幕^{テント}の中で眠った。

外から聞こえる人の話し声や、獣の声、虫の声に耳を傾けながらシャンティは上級職の者のためのテントの中で、簡易ベッドに座り日記を記していた。中身はやはり今日の戦史のことだった。けれども昼間少し寝たにもかかわらず睡魔が襲ってきて、ついうとうとし始めると結局戦史を完成させる前に眠ってしまった。

やがて獣や虫も眠りにつき、聞こえる音は歩哨の足音だけになった。

夜の闇は人から視界を奪う。視界を奪われることは人にとって重大なことだ。古来、夜戦と言うものは基本的に好まれない。なぜなら視界が十分でない状況においては戦場の情報は集めにくく、そのため計算が成り立たない。つまりほとんどの出来事を天運に任せなければならなくなる。だから戦争や、追いかける方に圧倒的有利な追撃でさえも夜になると自然と止むのだ。

それでも、視界を奪われた不自由さを十分に承知のうえでの、計算したうえでの夜戦ならば？

始めに気がついたのは卓越した聴力と危機感知能力を持つ獣たちだった。鳥はすぐさま雑木林から飛び立った。野犬たちは群れを為し、雑木林に迫る者共を偵察した後に退散した。

風切り音がした次の瞬間にはサウルス人の歩哨が一人地面に伏した。近くにいた兵士の一人が驚いて、倒れた彼の状態を確認する。が、しゃがみこんだ瞬間後頭部に矢が撃ち込まれた。残りの兵士た

ちが絶句する。まぎれもない奇襲だった。

木々の上から矢が射こまれた。矢は次々に兵士たちに食いついたが、胸を食いつかれた兵士は最後の力を振り絞って叫んだ。

「敵襲！」

野営の中にいた兵士がそれを聞いた。感染拡大するように「敵襲！」の聲が野営内に伝わり、兵士たちは跳ね起きると同時に鎧をつけ、盾と武器を取った。「上」と誰かが叫ぶと、皆が一斉にテントの天井を見た。赤々とした火がぱちぱちと音を立てながらテントの布を喰っていた。兵士たちがテントの外に出ると野営中のテントが燃えており、昼間のように明るく、暑かった。

「自分たちの隊長を探すとともに、王子たちを守るんだ」と隊長格の男が命令するとサウルス兵は各々の方向に走った。火災のせいで暑くて暑くてたまらないのに、齒はガチガチとなり、小便を垂れ流しながら走った。

世紀末的な感じにアーアーと狂ったように叫んだ男がいる。混乱して味方を切りつけた男もいる。その間も次々に火矢が野営内に打ち込まれている。サウルス兵は頭の良い兵隊だからこの矢が止んだ後のことを理解していた。敵兵の襲撃だ。それが始まる前に何とかして自分たちの態勢を整えなければならない。彼らは走った、走った。走るだけでは何も状況は変えられないのに。

「遅い、遅い」ギャロップが馬に乗って姿を表わす。「ちんたらするな。すぐにおれの下に集まって体勢を立て直せ。弓兵はいるか？ いるな。よし、ここからでもいい、すぐに反撃を開始しろ」ギャロップに言われると弓兵たちは外に向かって矢を射始めた。「奴らは自分たちが傷つくのを異様なほど嫌う。だから、反撃と共に逃げる者も多い。槍兵はいるか？ いるな。よし、従来の際は捨てて近くの者と新しい隊を作れ。隊長は年長者がしろ」槍兵たちは言われた通りにした。盛んにお互いの歳を聞きあうのが、ギャロップは少しおかしかった。「剣歩兵はいるか？ いるな。よし、お前たちは入り口で待ち構えて少数で突撃してくる敵兵を攻撃しろ。敵兵が多

かったり、相手ができないほど強かったらすぐに逃げる。後は弓兵と槍兵で相手をする」剣歩兵は返事すると散っていった。

ギャロップは燃える野営の中を冷静に見回した。こんな状況下でさえ、死の恐怖も、負けるかもしれないという思いも、彼の心の中には浮かび上がってこなかった。彼は大した焦燥感も感じず、敵の策略の全貌と自軍の次の一手を考えていた。

「ギャロップ將軍」と言いながら騎兵がやってきた。ギャロップが、^{テント}天幕から出て一番初めに会ったので情報収集を命じた者である。「ジャーニイ王子とその近衛兵団がいません。一足早く隊を再編することができたらしく、先に外に迎撃に出たようです」

「そうか。サウルス騎兵は？ カバルス騎兵は？ シャンティは？」
「サウルス騎兵は数が少ないので編成が早いようですが、夜に酒を飲んでいたのでまともに馬に乗れるのは半数のみです。それはカバルス騎兵も同様で、彼らは百人ほどこしか集まれています」

「シャンティは？」

「近衛兵団をまとめ上げています。……いえ、きました」

ギャロップが見るとシャンティは近衛兵団と共に彼のもとにやってきていた。シャンティは「糞つたれ、すごいな！」と言ったが、彼の顔は恐怖を隠せずにいた。

「ギャロップ。ジャーニイが敵騎兵を外で見かけたらしくて、それで、それを追いかけて行ったらしいぞ」

「何を馬鹿な！ まだ攻撃に移る時じゃない」ギャロップは眉間にしわを寄せて言った。「あの馬鹿王子。攻撃ばかり考えやがって。おい、これは罠かもしれないぞ」

「わかってる。君が行くんذار？ いくら兵を持って行く？ ぼくはいくらでここを守らなきゃならん？」

「お前の近衛兵団以外の騎兵は全て持って行く、準備できている者に限るがな。歩兵もだ、剣歩兵半数、弓歩兵半数、槍歩兵半数。お前は残りの兵を束ねろ。まずくなったら構わず逃げろよ。逃げる方向は時間があるうちにちゃんと調べておけ！ いや、北だ、北に逃

げろよ。都市があるから」

「わかった、すぐに行ってくれ」

ギャロップは彼の言葉を聞くと馬を翻して、準備に向かった。

弓矢はまだ降り続いていた。シャンティは矢を防ぐために近衛騎兵たちに盾を被るように言った。「王子、正気ですか？ かなりダサくなりますよ。ははは、ははは」と近衛騎兵の一人が顔をひきつらせながら笑う。シャンティは彼の肩を叩いて言った。

「君は正気らしい、この期に及んでファッションを気にする余裕があるとは？」

「……ははは、は」近衛騎兵は一度大きく顔を歪ませてから、真面目な顔に戻る。「い、いえ、すみません。取り乱していたようです」「なに、それが普通の反応だ。それが常人だよ」

「な、ならば、我が將軍は？」

「あれは、彼は戦闘狂いだ。そうでなければ超人なのだ。古代の英雄よろしくね」

「王子、武官たちの保護の準備ができました」

シェイバスがやってきて、近衛騎兵たちが頭に盾をかぶっているのを見て驚いた。

「了解した。さて」シャンティは盾を前に差し出しながら言った。

「君にもかぶってもらおうか？」

「王子」シェイバスは訝しみながら質問した。「ちゃんと正気ですか？」

ギャロップはサウルス、カバルスの両騎兵と大量の歩兵を連れてジャーニイが向かったといわれる西の方角に向かった。歩兵たちはひいひい言いながら騎兵たちについて走った。

後ろを振り向けば野営がぼんやりと燃えていた。まだ矢が射られているようだった。ギャロップは違和感を覚えた。こちらを襲う敵騎兵隊をジャーニイが追い払ったのに、なぜ弓兵はまだ矢を射っているのか。

そうこう考えているうちにジャーニイの近衛騎兵隊が見えた。兵力四百ほどの彼らは千を越えるであろう軍隊と対峙していた。彼らは歩兵、騎兵入り混じっている。そこにギャロップが千八百を率いて到着した。

「馬鹿王子」とギャロップが叫んだ。「どうした？ 戦闘は起こっていないのか？」

「ああ」ジャーニイは敵軍を見ながら、彼の下に近づいてくるギャロップに状況を説明する。「おれが二百ほどの騎兵を追いかけて来た時には奴らはここに集合していた。おれたちを見ると一拳に押し寄せてくるかと思つたら……そうではなかった。よくわからないが、見た所、敵騎兵の数はそれほどではないので、それを警戒したのかもしれない」

ギャロップはいまだに脳裏にこびりついている違和感がこの説明で強まるのを感じた。

サウルス軍殲滅のための騎兵突撃は失敗したのに、なぜまだ野営を攻撃しているのか？ 兵数劣勢のジャーニイに対してなぜ攻撃を仕掛けてこないのか？ いや、だいたいこれだけの数がいるのになぜ二百の騎兵で襲つてきたのか？

最後の疑問はここにおびき出して攻撃するためというのが「答え」であろうが、結局それも実行していない。だいたい、なぜおびき出さなければならぬのか。答えは簡単、サウルス軍の分散が目的だ。そして、分散は成功。それなのに、攻撃していない……。

「……やられた」ギャロップは顔を真っ赤にして、激怒を表に出さないように歯を食いしばった。しかし、それは失敗している。彼はその漲る怒りの感情を誰にも見える形で表現している。「奴らの目的は、シャンティだ！」

シャンティは北に向かって逃げていた。それと共に自分の現状を把握し始めており、さらにはギャロップやジャーニイの現状にもあらかたの予想をつけていた。

彼はある言葉を頭に思い描く。

戦闘の基本は自軍の分散、それにつられた敵軍の分散、敵決勝点への自軍の集中である。

「それを、これでもか、と言う感じにやられたね。それにしても彼らはずいぶん知恵を絞っている。もしカバルス鎮定軍総司令官のぼくが少ない兵力であつちに行つていたらすぐにぼくを撃滅したでしよう。彼らがジャーニイへの攻撃を開始していないであらう理由は色々考えられるが……第一に、攻撃を開始してジャーニイに逃げられたら、ギャロップのおびき出しが失敗する可能性があること。第二に、もし敵兵がジャーニイ、ギャロップと言う風に連戦で戦えば、合計の戦闘時間が短くなる可能性があること。だって、ギャロップは戦闘途中の混乱した敵軍に冷静な兵隊を投入できるからね。例えばジャーニイを倒せるとしても、それ以上に敵軍は戦闘時間の短縮を避けなければならぬ。なぜなら彼らの目的はジャーニイじゃない。カバルス鎮定軍の総司令官であるぼくなのだから。わかりますか？ 目的のみの遂行、それが軍隊の基本です」

シャンティは自分の後ろにいるラッドハッドに言った。ラッドハッドはがたがた震えながら質問した。

「ででで、では、ええ、ええ、ギャロップ将軍がこちらに残つていたならば？」

「ジャーニイを撃滅。そして、それをこちらにいる兵士たちに伝え、ほぼ無傷で退却。しかし敵兵には、ぼくが野営に残り、ギャロップがジャーニイ救出に向かうとわかつていたでしょう」

「ならば、ええ、我々は逃げる事が出来ていますが、ええ、この後は一体全体どうなるのですか？」

ギャロップが出て行った後、シャンティたちの残る野営には数えきれないほどの敵兵が強襲した。皆、ゲリラ兵とは思えない訓練された屈強な兵だった。それには混乱したサウルス軍では太刀打ちできなかった。

シャンティたち近衛兵団は監視官を自分たちの馬に乗せて野営を

飛び出した。残った歩兵はどうなったのかわからなかった。

「おそらく」シャンティは目の前の荒野を見た。まだ少し先も見えないほど暗かったが、遠くで蠢く影があるのが見えた。「敵主力が待ち構えています」

後ろからは野営を強襲した敵歩兵も迫っていた。

「しかし、大丈夫」シャンティは汗がべつとりの掌を握り締めていった。「ギャロップはすでに敵の思惑を看破しているでしょうから、すぐに何らかの対策をとります」

シャンティは言いながら騎兵隊を止めた。後ろについて来ていたサウルス歩兵隊は息を切らしながら立ち止った。

「では、ギャロップ將軍はすぐに？」きますか？

とラッドハッドはやや安堵の表情を見せた。

「いや、ギャロップが作戦を看破したのを知った敵は、ただの時間稼ぎであるにらみ合いを止めて行動に出るでしょうね」

「さつき、ギャロップ將軍が、ええ、言っていたのを聞いたのですが。ええ、ゲリラ兵は自分たちが傷つくのを恐れると。ええ、ならば、敵は一目散に逃げて行き、やはり將軍はすぐにこちらに来られるのでは」

「本当に、敵がゲリラならね……。おそらく、ギャロップはただ兵士を勇気づけるためにそれをいったに過ぎない」

「ええ？」

後方から追ってきていた敵歩兵が立ち止った。前方の敵主力（暗闇によりわからないが千から三千）は一步一步大きな足をたてながら近づいてきた。

「王子、逃げてください」ウィス力がシェイバスを含む数人の精鋭隊を即座に作った。「ここは我々が！」

「嫌だ」シャンティたちが会話をしていると後方の敵歩兵も彼らに向かつて歩み始める。「こんな状況なら、逃げる方が危険だ……と、ぼくが残る理由はそういうことにしておこう」

「王子！」ラッドハッドがぶるぶる震えながら叫んだ。「逃げるべ

きです、ええ、逃げるべきなのです」

「嫌だと言ったら嫌だね。大体、ぼくには、君たちすべての命をかけてまで守る価値があるのか？ いや、そんなものは無い」シャンティが一人一人の顔見渡しながら、すねた少年のように唸る。「ぼく一人のために何百人やら千人やらの命が無駄になるなんて……ぼくには耐えられない」

「王子！」ラッドハッドが逃げることを懇願する。

「皆の者、馬から降りろ。そして何の因果か頭についている盾をとれ、ぼくたちはここで防衛戦を行う。我々の勝利条件はギャロップ、ジャーニイの率いる軍がここに到着することだ」シャンティは馬を下りた。が、誰も彼の言う通りにはしなかった。誰もが信じられないような顔つきで王子を見ていた。「どうした？ 聞こえなかったかい？」

誰かが言った。「王子、正気ですか？」

「まさか！ 正気なはずがない。ぼくはどうやら、知らぬ間にギャロップの狂気にあてられてしまったらしい。いや、それとも……」シャンティはいつそう快活に笑いながら言った。「英気の方だろうか？ ははは、もし、ぼくがあてられたのが英気ならば、ぼくもまた英雄だ。そして君たちは英雄を支える勇者の大軍だよ」

彼の近衛騎兵たちは観念したように馬を下り、頭の盾をとった。

シェイバスは王子に近づいて言って晴れ晴れした顔で言った。

「死ぬ時は一緒です」

「なにを！ 生きるのだよ、ぼくらは生きるために戦うのだ」シャンティは笑顔で返した。「大体、言っただろう？ 生存確率から考えて、こっちの方が合理的さ。考えてもみなよ。ぼくらの防御力の高さはギャロップのお墨付きだが、逃亡力なんてのはまだ評してもらってすらない」

彼らは慌ただしく盾を集め、陣形を作り始めた。敵軍の方も、サウルス軍の突然の反撃にいつでも対処できるようにそろそろと彼らを囲み始めた。

彼らは包囲された。突破して逃げることはもうできない、反撃はありえない、敵を滅ぼすなど夢のまた夢。しかし、彼らの死命は自分たちの手に握られていた。しつかと自分の手で握っていた。彼らの生き残る方法は、ギャロップたちが来るまで盾に守られた小さな円を守りきることだけだった。

それは歪な陣だった。どういった意味があつてそんな陣形をとつたのかは敵兵にはわからなかった。盾によって作られた円、それを支える人、槍だけを持った兵、少しの弓兵、役立たずの監視官たち、王子、そして鞭を打つてもこの場所から逃げなかった馬。まるで、馬を守るために彼らは戦っているかのような陣立てだった。

一角獣ユニコーンの面甲シヤフロンをつけたルルディファイロにシャンティは手をついていた、その手はぶるぶると小刻みに震えており、やはり逃げればよかった、と彼はついさつきまでの勇敢な自分を呪った。

「行け！」と敵将が命令すると、敵歩兵たちはサウルス軍を圧殺するかのような勢いで突進してきた。

「耐えろ！」

シャンティが叫ぶ。盾だけを構えた兵士たちは踏ん張って敵を押し返す。敵兵が円の中には矢がパラパラと降り始めた。ほとんど真上に撃つようにして放たれた矢が、地面に垂直に落ちてくる。シャンティが馬の様子を心配すると、ラッドハッドが盾を使ってそれを防いでいた。彼の足は恐怖で震えている。何度も足をからませて馬の間に倒れ込むが、彼は顔についた泥を拭くこともせずに、落ちてくる矢をピンポイントに防ごうとしていた。それはほとんど成功していなかった。それどころか、死ぬ可能性を増やす愚挙とも言えた。それでも、震えるだけの他の監視官たちとは違い自分のできることを果たそうとする彼をシャンティは心の中で励ました。

勇敢な者だ。もう、ギャロップには君が戦場に出たことが無いなどとは言わせない。

「弓兵、隙を見て反撃を加えるんだ。この射的場、どこに撃つても

大当たり間違いなしだぞ」

弓兵は数本の矢をつがえて出鱈目に矢を放ったりした。それでも、そのほとんどは敵兵に命中したようで、遠くで何らかの反応が見られた。

シャンティは空を見た。星が燦々と輝いている。雨は無い、と彼は思った。ギャロップ達の救援を待つ自分たちにとっては、雨がないう方が都合だ、いや、いつそ雷でも落ちれば話は違うが……。

大きな金属音が響いた。探しに探して音の方を見れば、敵兵の一人が大きな鉄のハンマーを用いて盾を打ち叩いている。「剣歩兵！」とウィス力が叫ぶ。剣しか持たない歩兵が押されている盾の方に走って行き、生じた隙間から外に飛び出した。敵兵が「おお！」と驚いたような声を上げると共に、歩兵は敵数人切り裂いた。敵兵が退くと、飛び込んだ歩兵を中心にして大きな空間ができた。けれど冷静な敵兵が彼を槍で突き刺すと彼は口から血を吐いて容易く絶命した。

死んでしまった友の後を追うかのようにサウルス歩兵たちが陣の外に出ようとしたりした。

「行くな！」シャンティが一喝して止める。兵士たちは突撃を懇願するようにシャンティを見た。死ぬことを焦っているようだった。この状況から解放されるなら、死ぬ方がましだとも言わんばかりだった。「行くな。必要な時以外でこの盾の壁の外に出ることは許さない。ここで君たちを一拳に失えば我々は耐えられなくなってしまう。わかるか？ 君たちの望む、敵陣に突撃した勇者の物語は、おおよそ一千もの戦友の死と引き換えでなければ手に入れられないんだ」

そんなことをやっている間にも敵兵は返しては寄せる波のように攻撃を続けている。ある時、敵兵は前の兵の肩を踏み台にしてサウルス兵の盾の壁を超える攻撃を試みる様になった。

それは中に一回の確率で盾の壁を越えた。しかしそれを成功させたものは中の兵士にすぐに殺された。だから盾の壁を超える攻撃よ

りも、ジャンプに失敗して斜めに向けられた盾の壁の上に降り立つ方がサウルス軍にダメージを与えた。敵兵はやがてそれに気付いた。続々と盾の壁の上に降り立ち始める。

敵の、一人の勇敢な弓兵が味方の背中を台にして盾の壁に乗り上げた。彼はすでに弓を引き絞っていた。彼とシャンティの目があった。彼は歓喜して叫び声を挙げると同時に矢を放つ。その矢はシャンティの右上腕を貫いてちょうど真ん中のあたりで止まった。彼は弓矢を投げ捨て、腰にかけていた短刀を抜いて突撃してきた。盾の壁内部に降り立つと共に巨体が自分の前に詰め寄ったのを見た。次の瞬間、喰らったこともない衝撃を腹に受けて、気が付いたらふわりと空を飛びながら、星々を眺めていた。

勇敢な弓兵は数メートルほど遠くにつき飛ばされ敵兵たちの頭上に落ちた。腹には刃で貫かれた後が残っていて、まだかすかに息はあったものの、もはや戦力にはならない。兵士たちは気持ち悪そうにその男を放り捨てた。

盾の壁の中で角のついたルルディファイロが勝利のいななきを挙げる。

「ふふつ。やっとこさ、ぼくに懷いてくれたのかな？」

シャンティは右手の痛みを堪えながらルルディファイロを撫でる。敵兵はサウルス軍の中で突如存在感を発揮したルルディファイロを見て、サウルス軍には聖獣使いがいると声を挙げた。サウルス軍はそれを聞いて「ははは」と笑い声を挙げる。ちょっとした余裕が生まれていたが、盾による防御は少しずつ精密さを失ってきた。

誰もが疲れ切っていた。すぐ隣で死んでいく仲間に、ふがいない自分達のせいで腕を射ぬかれた王子に、そして馬にも頼らなければならぬ自分たちに、心を侵されていた。目をつぶってしまえばそれと同時に眠れそうで、眠ってしまえば死の恐怖も味わわなくてもいいと。

騎兵が突撃してきた。盾の壁が大きな衝撃を受ける。眠ろうと思っていた兵士たちが昼寝を邪魔された心境で騎兵に怒りを抱いた。

敵の騎兵突撃が繰り返される。一部の壁が突破される。弓兵が残された矢を馬に打ちこみ、シェイバスが槍で騎兵をつき殺す。比較的手の空いている者が死体を中に引きずり込んで、すぐさま盾の壁を修復する。

「突撃、殺害、吸収、再生。これを四回繰り返すだけで」シャンティは四体の馬と二十人の人で築かれた山を眺めた。「これだけの山が……いや、違うな、混乱している。先に何人も中に侵入していた」その考えすらもどうでもいいことである、とは彼は思わなかった。彼はもう一度空を見た。そして、早く明ける、早く明ける、と守護聖獣に願った。

「ギャロップ將軍たちはいつ来るんだ！」と赤ん坊のように泣きじやくる監視官の一人が叫んだ。「来ないじゃないか。もはや、奴らは倒されたか、逃げたかしたのだ！王子、シャンティ王子！これはあなたの判断ミスだ。お前のせいで私たちは死ぬのだ」

「そうか！」シャンティは戦場に似つかわしくない爽やかな笑顔で言葉を返す。「ははは、そうだった。ぼくたちはギャロップを待っていたのだった。思い出させてくれて、ありがとう！」

「王子！」ウイスカが叫んだ。「敵兵が！」

シャンティはウイスカの方を見た。けれども敵の弓兵は彼の背後の盾の壁の上にのっていた。彼は狙いを定めて弦を引き絞り、一射必殺を狙ったが、中のサウルス軍に槍を突き刺された。彼の体から力がふつと抜け、矢が発射された。その矢がシャンティの胸のあたり突き刺さると「あえ？」と言う声が漏れた。

シャンティは倒れ込みもしなかった。ただ呆然と立って、次の瞬間には戦場に目を向けた。サウルス兵が敵に対して深い憎悪を抱いた。皆、手に持つ得物を強く握りしめた。

「行つてはならんぞ」シャンティは強い光の灯った目でサウルス兵たちを見渡しながら命令した。言葉を考えるような余裕はなかった。熱と激痛が体中を支配して、神経がそこだけに集中していた。それでも彼は兵士を制しようと、真つ青な顔をしながら言った。「くだ

らない命だ、ぼくの命など……」

兵士たちは絶望している。この期に及んで自分たちに勇者らしい行動すらとらしてくれない、この愛しい主君に。敵陣への突入を認められない己たちの実力に。

「シャンティ様」

ウィス力は目頭を熱くしながら下唇を噛んだ。彼はある一つの決心をする。それは……。

ふと、誰かが気が付いた。敵の攻撃がやみ始めているのに。向こうで敵の叫び声が響いているのに。

近づいてくる微かに足音があった。この悪夢を散らす音。地響きのような音。足音。唸り声。金属音。

「……王子」やけに野太い声の誰かが感慨深そうな感じに言った。
「騎兵団の音です」

戦場の熱気を割いて闇と共に駆けてくる騎兵集団の、先頭を走っていたのは誰だろう。ギャロップその人だった。彼は暗闇の中で槍を掲げる。刃は月光の黄色い光を宿す。

「一同、襲歩ギャロップにて、全速前進！」ギャロップが、大口を開け、激怒を少しも隠しもせず、顔を真っ赤にして叫ぶ。「たとえ、愛馬の息が切れようとも、走れ走れ！ 我らが！」

「我らが！」將の命令通り襲歩で駆ける千の騎兵が將軍と同じように顔を真っ赤にして、槍を意気高らかに掲げながら雷のような雄叫びを挙げた。「我らが、主君のもとへ！」

全力突撃だった。

サウルス軍の千の騎兵たちは槍を前に構えて、反撃をもとめせずに突き進んだ。槍はすぐに折れた。腰の剣を抜く間も、彼らは一瞬も立ち止まらずに敵の固まりを駆け抜けた。

月光を反射する彼らの刃は地面を這う雷いかずちのよう。

「我らに竜の加護あり！」

サウルス兵らが一喝する様に叫ぶと、敵將はすぐに逃げ出した。

将を失った兵士たちは騎兵から逃げ惑う。

ギャロップたちは一直線に盾の壁の下に向かった。全速力のままたちまち盾の壁をすっぱりと覆い尽くすと、ギャロップは馬を下りた。

「將軍！」盾の壁を築いていた兵士がばらになり、その中の一人が涙目でギャロップに抱きついた。ギャロップは鬱陶しそうにそれを跳ね除けて、シャンティのもとに歩いた。

二人は対峙した。シャンティはもう立ってはいられないほど疲れ切っていたのに、ギャロップの顔を見たらすぐに疲れが吹っ飛んだように感じた。

「ふん」ギャロップは初めて心底優しそうな顔を彼に見せて言った。「思ったよりも元気そうじゃないか？ 新しいアクセサリーも手に入れたみたいだしな」

「ん？」シャンティは突き刺さる矢を眺めた。「残念ながらプレゼントの送り主は名も知らぬ男性だったけどね」

「……全く、お前は馬鹿だな」ギャロップは真ん中に集まっていた馬を見る。「逃げることもできただろうし、残るにしても馬を使って敵を攻撃するとかも考えられただろう」

「……」今度の言葉には、シャンティは潤んだ瞳を彼に返すだけだった。ギャロップは何も言わず彼を見返した。

「ギャロップ」シェイバスが前に歩み寄った。「それが王子なのだ」ギャロップはなんだか嬉しそうな顔をして、シャンティから離れた。入れ違うようにジャーニーがシャンティの元に走り寄って、彼の姿を見て腰を抜かしていた。

ギャロップは無言のまま歩き、馬に再度騎乗した。

「將軍、どこへ？」

とカバルス騎兵の隊長が訝しげに尋ねた。

「敵を追いかける」ギャロップはひやりとするような雰囲気ですあのかくそども言っいふかた。「お前はすぐにカバルス兵を集める」

その後、ギャロップはカバルス騎兵を率いて敵追撃に向かい、十

数人の捕虜を得た。

そして、それによってある事実が判明することになる。

10・戦いに休息などなく（後書き）

読み返しているとすごく恥ずかしいです。もういやっ。

あと、画像のギャロプンがかぶっている兜は適当。別に作中でかぶってるとかでもない。

11・敵は誰か？

> i32405—4057<

その戦いの後、カバルス鎮定軍は近くの村落で手当てを受け、カバルスに駐屯していたサウルス国（総督）軍を迎えに呼んで西都ヒツパリオンに帰還した。

シャンティの体を貫いた二本の矢のうち、胸に刺さった方は大したことはなかったのだが、上腕を貫いた矢は骨を砕いており、骨折は治るまで時間がかかることだった。

そう言うわけでシャンティはヒツパリオンにて休養をとることになり、その間のカバルス鎮定軍の総司令官は事前の決定通りジャーニイということになった。この際、父王から賜った佩刀サイカニアをできればジャーニイに渡すべきだったのだが、それはあの夜襲の際に紛失してしまったようでそれは現在になっても見つかっていない。

シャンティは元王宮であった建物の一等景色の良いところを療養場所として充てられ、次の出兵が決まっていなかったカバルス鎮定軍の兵士はしきりにそこを訪れた。シャンティは誰もいない時には本を読むか、左手で器用に日記を書くかして過ごしていた。

シャンティの充てられた部屋から見える景色を、彼は日記にスケッチしている。色々な物を元から日記に描きこむ癖のあった彼のスケッチはそれなりに上手であったが、今回は左手だったせいでいまいちその時の風景はわかりにくい。

「そう言えばヒツパリオンには浴場がないんだ」シャンティは隣でリンゴを剥いているウィスカに言った。「たぶんカバルスの気候のせいだろうね。ここは空気が乾燥しているから、あまり汗をかかないだろう。それでも、たまのスコールの時には、外に出て体を洗っている人がいてちよつと面白いけどね」

「ははは、元気なもんですな」

とウイスカが笑い声を挙げながらリングゴにかぶりついた。

「それって、ウイスカが食べるために剥いていたんだ……」

そんな風にシャンティとウイスカが話しをしていると、ノックがして返事をする前にドアは開いた。外から入ってきたのはジャーニとギャロップで、二人は険しそうな顔をしていた。

「シャンティ」ジャーニがすぐに話し始める。「前回の夜襲で捕まえた敵将の一人が情報を吐いた。やはり敵兵はカバルスの諸部族だけじゃない」

「だろうねえ。特にあの夜襲は出来すぎていたよ。それで？ 敵はここより南の？」

「イハテリオ地方の国の二つ、サンジャヤだ」ジャーニが手に持っていた地図を広げてシャンティに見せた。シャンティと、リングゴをもう一個剥いているウイスカも地図を覗き込む。「ここ最近の規模戦闘にはほぼ全て関係しているだろうと捕虜は言っていた」

カバルス各地に出る反乱軍がどこから援助を受けているのかわかり前々から検討をつけていることだった。

ギャロップは最初の軍議にて「敵は少数が基本」と説明したが、それに反してシャンティたちの戦った賊や軍は中規模の割合が多かった。少数の騎兵だけで襲ってきたのは、おそらくただの諸部族でそれには特別な感覚を抱かなかったが、歩兵などを混ぜて中規模の軍団が鎮定軍を襲ってくるのには外から軍事システムに手が加えられたような違和感を覚えていた。

しかし今までの捕虜からはそれを聞き出せなかったのだ。

「なんでいきなり情報を？」

シャンティが地図を睨みながらシャンティが質問する。

「今回捕まえたのが、そのサンジャヤの将校なんだ。どうも……情報を隠すという義務よりは自分の命の方をとるらしい。忠義心は薄いみたいだな」

「サンジャヤ人は、手懷けたカバルス兵には自分たちの情報をあまり教えないように決められているんだとよ」ギャロップはいつも通

りつまらなそうに言った。「大体、カバルスは部族が多いからな。よくわからん奴がよくわからん部族名で自分を紹介しても、おれはカバルス人だ、ってカバルス語を使われたら信じるんだ」

「決められている？」シャンティが困ったような顔をする。「ってことは、やっぱりサンジャヤの国を挙げての作戦なのかい？ このカバルス人を使ったカバルスでの反乱は？」

二人は気まずそうに頷いた。

「ともかく」ジャーニイが地図を取り上げ、折りたたみながら言った。「このことは王都に通達しておいた。だから父上はすぐに何らかの反応を返してくるだろうさ」

「……もしサンジャヤと戦うとなったら、ぼくたちだけじゃ倒せないけれども……」シャンティが不安そうに二人を見つめた。「もしそうなった場合、父上は軍を率いてくるのだろうか」

「倒せないとは決まってるじゃないさ」ギャロップが微笑を浮かべながら言っただけだ。「おい、馬鹿王子。カバルスに駐屯している軍隊の総指揮をとっている男は現王の死後の派閥争いで誰の派閥に入っている？」

「各地域に駐屯する国軍……つまり総督軍の指揮は総督が執るから、カバルスの軍は現カバルス総督のスタコイス・リザドス殿が執ることになる。彼はジャクナ三世の派閥だ」ジャーニイが馬鹿王子を気にもせず返す。「だから、おそらくおれたちが勝手にサンジャヤを倒そうとしても総督軍の協力は得られないだろう。同時に、おれたちで勝手に戦うってことはカバルスの軍人たちを使うこともできない」

「サンジャヤは対して大きな国じゃない。一万五千あれば倒せるはずだ。それすらも集められねえか？」

「さすがにあと一万の兵力は……」

「……ふん」

ギャロップは腕を組んで不機嫌そうによそを向く。ジャーニイは大きなため息を吐いて地図を懐にしまった。

「それで、おれはこれから監視官たちと話し合ってくる。カバルスで頻発する反乱とサンジャヤの関係性が立証された以上、遅かれ早かれサンジャヤとの戦いは避けられんだろう。まあ、そんなに悪い風にはならないだろう。ラッドハッドは最近親切だし、サスホスはおれが懇意にしてもらっているエラルジス大將軍の部下だからな」

それではお大事にな。とジャーニイは部屋の外に出て行った。

「そう言えば」ギャロップがウイスカの向いていたリングを取り上げてかぶりつきながら言った。「嫁にはけがのことを書いた手紙を送ったのか？」

「送った送った」シャンティはよくぞ聞いてくれた、とばかりに笑顔で返す。「カバルスの市場で買った邪を払う土偶を送ったんだ」

「馬乳酒は？」

「それを何とって送るのさ。ギャロップが送れと言いました、とても添えて送ろうか？」

「はん、前々から思っていたが、お前のその軽口は、英雄の物語でありがちな脇役の性質そのものだ。そして大体においてそんな脇役は物語中盤から後半の間に死んでしまう」

「なるほど、ぼくが英雄の親友役をするとすると、ぼくの死に怒りを覚え、逆襲するべく敵陣に突撃しそれを壊滅させる無双の英雄は誰だい？ やはり、君のことかな？」

「親友？ おれたちはまだ友達ですらないのだがね」ギャロップは心底つまらなそうな顔をして言った。「大体、お前のその思考の飛躍はおれの思い通りに行ったためしがないな。おれとしては、軽口は寿命を縮めるぞと忠告したにすぎんのだよ」

「これはこれは……友達でもないぼくになんとも慈悲深いお言葉」シャンティは手を合わせながらギャロップに向かう。「よし、今から……守護聖獣ギャロップに祈りをささげるとしようかな」

「お前の目の前にいるのは獣ではなくてカバルス史上最強の英傑だから、祈るのではなくて、褒め称えるのが正解だぜ」

「よく言うよ、敵の陽動に引っかかったくせに」

「お前だつてそうだろうが！」

「あれは仕方無かつたじゃないか。あんなに炎が燃え盛っている中で敵兵に突撃されたら逃げるしかないだろう」

「もつと早く消し止められなかつたのか？」

「君には火を早く消し止める策略まであるらしいね。ぜひともここで御教授願いたい」

ウィス力は二人の口喧嘩をよそに三個目のリングを剥き終わっていた。それを六等分に切つて皿の上に並べると、二人の邪魔をしないように部屋を後にした。彼がドアを閉めた後も、部屋の中からは二人が罵り合う声は続いていた。

「全く……あれだけの屈強を、聖獣に特別守られているかのように次々に越えて行く二人の喧嘩とは、とても思えないな」
ウィス力はひひひと笑いながら立ち去った。

二六六年、夏の終わり。ジャーニイを総司令官としたカバルス鎮定軍がヒツパリオンから出発した。シャンティの近衛兵団はもちろんヒツパリオンに残り、その代わりに総督軍の騎兵五百が彼らと共に旅だった。

シャンティは療養中に「サウルス国力カバルス地域」としてのカバルスを政治的に観察することにした。彼はまずカバルス同盟国が潰れてからの法律や税制の変化を調べた。

シャンティは、一応ベッドから立ち上がることはできるのだけど、肺のあたりの傷が痛むので基本的にベッドで過ごし、彼の求める資料はベッドの周りに集められた。

その日もシャンティはベッドの上で資料を読み込んでいた。そこに三回のノックの後に入ってきたのはキツネのように目の細い男だった。

「ええと」とシャンティは注文した資料を運んできた男を見つめた。

「私の名前はヒツパリオン・ハンスと申します」

彼ははきはきとしたサウルス語で自己紹介をした。

「ヒツパリオン……元王族……それか、貴族の方でしたか」

「いえ、カバルスがまだ国だった時代に私の父は王族の身分を捨てていまして、それより私の家系は貴族となっております」そう言う彼のキツネ目はシャンティに何となく優しい印象を与えた。「理由は……正直、私にもよくわかりません。五、六年前にいきなり王族を止めると言いだして。まあ、王族とはいっても末端でしたし、おそらく、議会で王族の力の及びうる範囲を拡大するために戦略的に貴族に落ちたのでしょう」

「へえ……」シャンティは興味深そうに話を聞いていた。するとハンスは彼が運んできた資料に目を移しながら、何をお読みにになりますか？ と聞いた。「ありがとうございます。じゃあ、税に関する資料をいただませんか」

「……どうぞ」とハンスはすぐにそれを見つけ出して、シャンティに手渡した。

「どうも……」シャンティはその本の中身をじーと見ていき、ある所で小さく呟いた。「軽いな」

「軽い……税が、ですか？」

「いや、悪く言ってるんじゃないよ」シャンティは慌てて取り繕う。「サウルス国内の他の地域と比べてみると税が軽いと言ったんだ、それ以上の意味はない。それどころか……民のことを考えた良い税率だと思う。カバルスの民は基本的に自由を好むようだからねえ。」

それに見合った年貢やらを取り立てているよ。ほら、エピ族は獣の皮を中心に税を納めているね」

「ありがとうございます……とはいっても、それを考えたのは私ではありませんがね」

「税を考えるのは地域に派遣された総督のはずだね」総督は税を決めるだけではなく、法務なども取り締まるし、現地駐屯の総督軍の総司令官も務める職である。「しかし……そうになると、この総督はかなりのやり手だな」

「いえ……カバルスはサウルスの属州となってまだ日が浅いので、

リザドス総督はほとんどの決定をカバルス地域監督である元王族たちに任せています。そう考えるとサウルスの統治は寛大の一言に尽きますね」

「そうか……いや、そうかな？ リザドス総督の統治は怠慢の一言に尽きるとも捉えられるが……」シャンティがいたずらっぽい笑顔を向けるとハンスはどうでしょうね、と言う顔を返した。「そういえば、君はその……監督者と言う役職の権限について何か知っているかい？ ぼくは総督などの役職は知っているが、この監督と言うのはよくわからないんだ。本国で色々な人に話を聞いたんだけど、いつもあいまいな返事しかもらえなかった」

「すいません、私もよくは……」ハンスは首を横に振った。「ただ、総督よりは低い地位にあるらしいです。だからもし、総督が仕事熱心な方ならこの税法を敷けてはいませんでした」

監督者と言うのはサウルスが新しく領地を手に入れた時に現地にいた親サウルス派の貴族に与える職であり、それはカンプトケファレを征服した時にも使われた。サウルスはその時も今回同様、監督者の上に総督を置いている。実際、監督者には実質的な権限を全く与えていなかった。いわば監督者と言うのは名ばかりの管理職のことで、総督の傀儡かいらいとなり、あたかも元からその地方にいた貴族が政治を行っているかのように見せるための道具に過ぎなかった。それは紙上には記されることはない事実なので、シャンティたちがその実態を知ることができなかったのも無理はない。

「ふむ」シャンティは違う資料にも目を通し始めた。「法律も、裁判も……うん。悪くない、やはりややサウルスよりだけでも」

「それは戦勝国の唯一の特権……と言う物ですね」

「ははは、これのために四万の兵を失ったわけかい。それならば、なんと安い命なこと。でも……それではだめだ……ぼくたちは四万の兵が命を張っただけの意味を手に入れなければね」

「そのような、言葉を聞くと……」ハンスは悲しそうな顔をしながら言った。「やはり、シャンティ殿もサウルス人なのだ、と思って

しまいますね」

「ああ、ぼくはそうだ、サウルス人だ。なに……いずれは君も、だよ」

「……」ハンスは両方の眉を上げて、なんとも言えない顔をした。

「おっと、私はもう職務に戻らなければなりません。こんな私も一応上級官人できてね、私がいないと立ち行かない案件もいくつかあるのです」

「それならば、きっとぼくよりは偉い役職なんだろうね。なんてったって、カバルス鎮定軍はぼくがいなくても十分に機能しているんだからね」

シャンティは、はははと笑いながら彼を送りだした。ハンスは渋い顔を作って、それを彼に見えないようにしながら部屋を出た。そして、ドアを閉めた後にぼそりと呟いた。

「ふん、なんとも……恨みにくい性格をしているな」

彼は石の廊下を歩いて自分の仕事部屋に向かった。

部屋の中には数人の同僚がいたが、全ての者は何もすることが無く、ぼおっと天井を見上げたり、意思のこもっていない目を机の上に向けているだけの腑抜けだった。ハンスは心の中で舌打ちをして、自分の仕事机の前に座った。

彼は机の紙に何かを書きつけ始めた。それと同じ文章を他の紙にも書いた。ハンスが何を書いているのかを気にするものは誰もいない。夕暮れ近くになり、カラスが鳴き始めると一様に帰宅する準備を始めた。ハンスも例外ではなかった。

彼らは同時に仕事部屋を出た。先に帰る罪悪感を抱かいたために、一人で帰って他科の同僚に冷やかされないように。そして彼らはそんなさやかな心的衝撃を食らうこともないであろう場所まで来ると、誰一人別れのあいさつもしてないのに、自然と各々の家に向かい帰り始めた。

彼らは総督と監督の共同秘書ともとれる複雑な役職についているある意味エリートだった。しかし今はもうほとんど何の仕事はなか

った。総督が判子を押すだけしかないので、監督や監督の部下から送られてくる書類の縦と横を綺麗に切りそろえたりして総督の部下に渡すだけが彼らの仕事である。

もともと彼ら 統合本部 は監督・総督間の摩擦を解消するため に作られた部署だった。だからハンスも上手にサウルス語をしゃべっているわけだが、その統合本部も彼らの高い能力を何の役にも立てることのできない部署となってしまうている。同僚たちの間では密かに「人気ナンバーワン部署」などとも言われて冷やかされたりもしていた。

彼らはもちろんそれを恥じていた。彼らも始めは立身出世を夢見る若き英才たちだった。けれども、そんな彼らは一年もたたないうちに腑抜けのになってしまった。仕方がないのだ。総督と監督、片方だけが仕事をしていては、彼らは役立たずのままなのだ。もつと両方が意見をぶつかり合わせたり、書類を何度も訂正するように相手に注文しなければ彼らの仕事は一向に増えない。

ハンスは職務途中に作った十数枚を持って、汚い路地裏に入口がある地下の酒場に訪れた。そこにはすでに彼と思想を共にする者たちが集まっていた。

「おお、皆。今日は昨日徹夜で考えたことを書いてきたんだ。ははは、いつも通り複写は仕事にした、馬鹿野郎！ ははは、ほら、回すから読んでくれないか？」とハンスは職務中に書いた紙を手渡していく。同志たちは勤勉なハンスを冷やかしたりしながらハンスの考えを書いた紙を読み込んでいった。店主の女がハンスに冷えたビールを出した。ハンスはそれを呑みながら思い出したように言った。「ああ、そう言えば今日、カバルス鎮定軍の司令官様に会ってきたぜ」

「なに」一人の男が反応した。「あの優男風の奴か。それで、どうだった？ きつと頭の回りが悪い奴なんだろう？ 王族にはありがちなんだよ」

「結構普通の奴だったよ」ゲブツと彼はげっぷをする。「しかしお

れに向かつて……いずれは君もサウルス人だよ……　　つていつてきた時は、さすがに張り倒してやろうかと思つたねっ」

いたるところで「張り倒せばよかったんだよ!」「ハンスの意気地なし!」と声が飛んできた。

「馬鹿野郎!　そんなことしたら、あんなに良い仕事を失くしちゃうだろうがよ!　ははは」

と彼は自虐的な高笑いを浮かべながらビールを飲み干した。

その後、ハンスの書いてきた物を皆で批評し合い、それが白熱してきたことに一人の客が息を切らしながら店に飛び込んできた。彼らは驚いたように飛び込んできた男を見た。男は言つた。

「皆、捕まっていたサンジャヤ人が死んだぞ。ははは」

「おいおい、まさか毒とかで殺したんじゃないだろうな。そんなことしたら一発でばれちまうぞ」

ハンスが額に汗を浮かべて問いだす。

「まさか!　ははは、けれどもさすがハンス。毒を使つて所は正解だ」と男はカウンターに近寄つて行き、そこでビールを飲んだ。

「おれは上司を騙してな、うまいこと奴の専属の看守になることができたんだ。それで、始めて飯を与えるときに奴の耳元で、おれはお前の仲間だ、だから忠告するが、この飯には毒が入っている。そのうちに毒の入ってない飯を持つてきてやるから絶対に国の与える飯は食うな。つていつたんだ」

「それでお前が飯をやらなかったから餓死しちゃったのか?」

「いや、商人の旦那に貰つた弱い下剤を毎回おれの与えた飯に入れてたんだ。ははは、ははは、あいつ、飯食うごとに下痢してて、牢屋が臭いのなんの!　そのうちに衰弱して、病氣になって、まともにしゃべれなくなった頃におれが毒を入れてたのに気が付いたらしい。死ぬ瞬間までおれの方をずっと睨んでたぜ!」

「かつこいいー!」「あつたまいいなあ」「我らが智将!」と同志たちがはやし立てる。

「それでハンス」男がハンスの方を熱っぽく見ながら言つた。「こ

の後どうするんだ？」

「もうサンジャヤ人は無理だ。奴らに頼ってもあの裏切り糞野郎のギャロップには勝てない。だからサンジャヤとは手を切る。サンジャヤの商人たちにもその由を伝える手紙を送っている」

「ハンス」同志の一人が言った。「あの夜襲の時はシャンティを狙ってたんだよな？ よく考えてみたら、今ならすぐに殺せるんじゃないのか？」

「馬鹿野郎！ あの時は、カバルス鎮定の象徴になり始めていたシャンティを殺せて、戦場だから犯人が誰とも分らないってくらい有耶無耶に出来るからこそ、あの作戦を実行させただけだ」ハンスは心底悔しそうに拳を握りしめながら言った。「都市の中じゃあ、毒殺にしたって、刺殺にしたって、どうやったって足がつく。シャンティ一人殺しておれたち全滅なんてばからしいぜ。なんてったってよお！」

「おれたちの目的は！」同志たちは声を合わせて怒鳴りを挙げた。

「カバルスの自由の再興！」

「そうだ。おれたちはこのままカバルスに反乱や暴動の種をまいてカバルス人の軍事力が育つのを待つ。同時に、おれたちの反乱に疲れ切ったサウルス国がぼろを出すのを待つ」

「しかしもうサンジャヤは使えねえぜ」

「カバルスは広い。サンジャヤの他にも隣接国はいくらでもあるぜ」
「もう一つ質問がある。サンジャヤが暗躍してたのはサウルスにばれた。ってことは、サウルス軍がサンジャヤに向かって攻撃を開始して、サンジャヤの軍人たちが奴らに捕まるとおれたちのことがばれちまうんじゃないのか？」

「それに関してはもう頭が手^{ヘッ}を打ってるらしい」ハンスは意地汚そうな笑みを浮かべながら言った。「ははは、なんでも……亡国の幻将こと糞ギャロップを反逆者に仕立て上げて、今回の事全部有耶無耶にしちまうらしいぜえ」

同志たちは笑い声を挙げた。

彼らは皆、カバルスの自由の再興という旗印を掲げて、カバルス周辺の裏社会を暗躍していた。

もう千年以上も前の話だから詳しい話はよくわからない。組織の名前すらも、組織の頭の名前すらもわからない。しかし彼らは実在していた。しかも、サウルスが侵攻してくる前から存在した（もつとも、その時の彼らはヒツパリオン王族とカバルス同盟国の存在を憎んでいた）。

組織は二百人の同志を集い、カバルスの理念とも言えた自由をサウルス国（あるいはヒツパリオン王族）から奪取するために、彼らは剣を打ちあう以外の方法で戦った。そう、彼らは「自由」という言葉を病的なまでに信奉した。最古のカバルス人のように、馬や風と共に草原を駆ける、そんな悠々自適な生活こそ人の生きる道だと考えた。

つまり彼らは無政府主義者アナキーなのである。

その謎めいた組織の若き幹部の一人であるハンスは地下の酒場を集会場としていた。彼は、現在にもその名前が残る数少ない組織の幹部である。

彼はこの日のシャンティの日記内で初めて歴史上に登場する。そして……。

サウルス軍の、盾を持った槍歩兵は一步一步地面を踏みしめながら前に進んでいた。戦場は雑木林の中にある小さな空き地であり、空はいつもと変わらぬ快晴だったけれど、雑木林の中は陽光に向かって伸びている木々の葉に覆い隠されて暗かった。ゆっくりと進んでいく兵士たちの瞳の中にはときどき光の一端が差し込む。

敵の数は目測中隊一個半（千五百）。相対あたいするサウルス軍はその空き地の小ささのせいで半個軍団の数的有利を行使できずにいた。「隊列が乱れてきているぞ、密集隊形を維持しろ」ジャーニイが喝を入れる。兵士たちは調子を取りながら返事を返す。両陣営を矢が

飛び交う。「遅い」サウルス軍は決定打を撃てない。「遅すぎる」このままじりじりと戦っていたとしても万が一にも負けることはないだろうが、しかし負傷者数を減らす術があるならばすぐに使うべきである。「何をしているギャロップは！」

その時、近くの茂みからサウルス軍の軽装剣歩兵部隊が飛び出してきた。その指揮官はギャロップだった。彼は左右を通り過ぎていく兵士たちに最後の命令を発する。

「各自、敵陣に切り込んだら三人一組を保つように。もし、はぐれでもしたら近くの兵士の隊に勝手に入れ。以上！」

「ギャロップだ！」と敵兵の誰かが叫んだ。叫ぶと共に兵士に切り裂かれて地に伏した。命のなくなった体はゴムで造られた人形のようにならんと地面に倒れ込んでいて、地面がそれからあふれる熱い血液をじゅるじゅると飲んでいった。彼らは明日には野獣の餌かウジ虫の肉家だ。^{すみか}

「やつと来たな」ジャーニイは敵兵が歩兵隊に気をとられたのを見てください兵士を動かした。「槍歩兵隊突撃！」歩兵隊は両手でがっしりと槍を握り締めて、敵を貫いていく。四、五人貫通した槍を握る兵士はぽいつと死体ごと槍を捨てて、腰に帯びた剣を引き抜く。慣れていた。彼らサウルス兵は驚くほど慣れていた。それは彼らも感じていた。半年前に来た時とは明らかな別人。「騎兵突撃！」

趨勢は決した。騎兵は逃げ惑う敵兵を蹂躪し、その光景を見ていたギャロップは満足したような笑みを浮かべている。

「うむ……」ギャロップはこの戦闘で騎馬を捨てて歩兵として行動した。彼は自分のいるところが主力だといつも思っていた。主力は決勝点に投入しなければならない。だから、より決勝点に突入しやすい歩兵を選んだ。ギャロップはぬふふ、と笑いながら呟く。「^{ニコン}角獣の蹄……と言っのはどうだろうか？」

「なんですか？ それは」

ギャロップと隊を組んでいた男が訊いた。

「いや、敵はおれと言う天才がいつも騎兵を率いているのを知って

いるだろう。だから、あえて、騎兵を捨てておれは歩兵になった。普通ならば、こんな歩兵での奇襲は予期していなければならんが、やはりそこは突入してきたのがおれだからな。敵も対処できなかっただろう」

「はいはい、敵は將軍が率いているはずのサウルス騎兵に氣をとられ過ぎていたから、こんなことも見落としていたっていいたいんでしょう」男は地面で苦しそうにしていた男にとどめをさす。「それで……ツノに氣をとられ過ぎているから、おれたちヒヅメにやられるんだ、ってことで一角獣ユニコーンの蹄ね」

「な、なんでわかるんだ？　おい……おい！　お前はなんだ？　どつかの幻将か？」

「將軍って三本の角トライコーンの戦術！　とか、そういう名前つけるの好きでツスよね」

「なんだこら！　良いじゃねえか、カツコいいんだからよ。それとも、お前、おれの名付けた作戦名がダサいってのか？」

男がふいと他方を向く。向こうではジャーニーが各隊を集め始めていた。どうやら戦争はもう終わっているらしい。騎兵も彼のもとに集まっている。今回の戦闘が雑木林の中なので、逃げた敵を追撃できないから、まあ、当たり前である。

男は「ほら、將軍。行きましょう」と言うと、彼らの方に歩いて行ってしまった。ギャロップはそれを見送りながら腕を組んで違う作戦名を思案していた。

二六六年の冬の手前だった。ジャーニーはシャンティに代わってカバルス鎮定軍を率い、カバルス各地を平定し続けていた。この頃には頻繁に起っていた暴動も徐々に減少傾向になっていたが、それが冬に近づいたからなのか、彼らの軍事行為が功を為したのかは彼らにはわからなかった。

彼らは多くの捕虜を手に入れたが、サンジャヤの兵士はあの夜襲以来、一度も捕虜になっていなかった。カバルス人の捕虜に聞いて

も、サンジャヤと言う国すら知らないものも少なくはなく、唯一のサンジャヤ人も夏の終わりには死んでしまったらしかった。ジャーニイはそれをシャンティからの連絡で聞き及んでいた。

ともかく、捜査が進展する兆しもなく、王都からの通達も「にわかに信じがたい、再調査せよ」だったので、彼らはどうにもできなかった。ジャーニイたちはあまり必要以上に寒くはならないカバルスでの冬をどうやって過ごすか考えていた。兵士たちはほとんどが徴兵だから一度王都に返すのが普通である。……が、サウルスで冬を過ごすことも出来た。

ジャーニイたちはとりあえず西都ヒツパリオンに戻ってシャンティと話し合うことにして帰路を急いだ。急ぐといってもカバルス人の捕虜が何人もいるせいで対してスピードは上がらなかったが。

ほとんど寒くなく、雪も降らないので風情もないカバルスの冬が到来した。途中の村で見かけたカバルス人の子供は上半身裸で相撲をとったりして元気に遊んでいたが、サウルス軍にいるカバルス人の男たちも同様に上半身裸で相撲を取りだしたのは辟易へきえきした。カバルス人は冬の相撲が好きらしい。彼らの相撲では賭けが行われていた。主に金をかけていたのはサウルス人で、相撲をとっていたのはカバルス人である。ほとんど相撲をとらないサウルス人たちは土俵を作り、一試合ごとに小さな賭けをした。総当たり戦での賭けは大きなもので、優勝者には賞金も出されるらしかった。その年の優勝者はサウルス人の戯言で特別出場させた馬だったらしい。優勝賞金を馬が得たかは記録がない。

そうこうしている間に鎮定軍はヒツパリオンに到着し、ジャーニイは戦史や細々したことをシャンティに報告した。ジャーニイの記憶力は大了なもので、ほとんどの戦いの詳細を空で言うことができた。シャンティは相撲の勝敗も克明に記録している。

『その日の大一番は全勝負せんしょうぶけ無しの馬、星影（黒毛で額に真っ白な星がある。体は大きく、いつもは馬車を曳いている）と亡国の幻将

ことエウクス・ギャロップである。』

『まず、ギャロップは意表をつくように猫だましを放った。驚いた星影は土俵から土俵上で暴れ始め、ギャロップは後ろ足で蹴り飛ばされて「押し出し」となった。』

『観客は総立ちになって手に持っていたチーズやら燻製やらをギャロップに投げ始めると彼は怒りで我を忘れて暴れ始めた。負傷者は五名。』

これはシャンティが残した「カバルス鎮定軍相撲打ち明け話」という名で今も残っている。

もつとも、これらの話を聞くことができたのはカバルス鎮定軍がヒッパリオンに帰還した次の日の夕方前のことである。なぜなら、ジャーニイたちはヒッパリオンに帰還するとすぐに挨拶もなしにベツドに入り込み、その日の朝遅くまで目を覚まさなかったからだ。シャンティの方も今の今まで激務に耐えていた彼らを自分の都合で起こすのも忍びないと思ったので、起こさずにいた。

それで鎮定軍のヒッパリオン機関の次の日、シャンティが外に出て街並みをスケッチし、それが終わって昼過ぎに部屋に戻ると、ジャーニイが彼のベツドを占領して昼寝をしていた。彼はすぐに叩き起こし、今回の旅の話を聞き始め、数時間かけてやっと大体の戦史と、相撲の面白話を聞き終えたところだった。

「そうだ、この前手紙で聞いてきた話……兵士たちの王都帰還の話だけだね。普通に考えれば兵士たちは返さなきゃならない」シャンティはイスに座って、もうほとんど良くなった右腕で日記帳をつけながらジャーニイに答えを返した。「これはサウルス軍の掟だからね。兵士たちが残りたいといっても返さなきゃならない。ま、そんな兵はそうそういないと思うけども」

「そこらへんは兵士たちに直接聞いてはいないからわからないけど、普通の奴は残りたいがらないふだろうな」ジャーニイは窓枠に肘をつけて外を眺めながら言う。「特にお前が負傷した夜襲の件で神経をすり減らした奴らは戦争になるときどき手がつけられない。なに、

お前が気にすることはない。あの時にお前が指揮官として残っていないかったら、あいつらは死んでいたかもしれないんだからな」

「そう言ってもらえるとありがたいけど……」シャンティは筆記を終えると日記帳を机の上に開けたままで置いた。「それでぼくたちが王都に帰るかどうかな？　そうだね……どちらかが残るといふ考え方もあるけれど？」

「その場合はおれが残るべきだろう？　あの魔女も、早く帰ってこい、と手紙に書いているんじゃないのか？」

「大丈夫さ、彼女は理解ある女性だからね。この前も、ぼくが送った邪を払う土偶を真つ二つに割って送り返してきたよ。そんなわけぼくは、今年はこっちに残ってもいいよ」

ジャーニイは、妻は熟考して選ばねばならんな、と思いながら窓を閉じた。

「ならばそう言うことだな。おれは兵をサウルスの歩兵を連れて王都に帰る。お前はサウルス、カバルスの騎兵隊と共にこっちに残れ」シャンティは了解と頷いた。「さて、飯を食いに行くぞ。もうお前もそれくらいには元気なんだろう」

「ああ、行こう！」シャンティは日記帳を閉じると、すぐに身支度し始めた。とはいっても、彼の準備は財布を懐に入れて、剣を腰に帯びると終わりである。さつとそれらを揃えるとシャンティはドアを開けて兄よりも早く廊下に飛び出た。

廊下に飛び出た瞬間、ラッドハッド、レフティス、サスホスなどの監視官たちに出会った。たまたま、という雰囲気を彼らの顔は醸し出してはいなかった。シャンティが、また面倒なことが起こりそうだと身を強張らせる。

「シャンティ様、あなた様にはそれほど関係ない話なので緊張なさらないでください」王太子の従者の一人であるレフティスは静かに言った。彼の視線はちゃんとシャンティを見ているはずなのに、どこか違う空間を見ているかのような印象を受ける。「用があるのは兄王子様です」

「そうか、おれに用なのか」と部屋の中からジャーニイが歩いてきた。「その陰気な面から想像するに、碌でもない用なんだろうな？」彼が皮肉な感じにそう訊くと、彼らは何も答えなかった。「正解か……」

「ええ、いや、ジャーニイ王子」とラッドハッドが、内容も聞く前に静かな怒気を発し始めた彼をなだめる様に口を開いた。「あくまでも、ええ、我々は質問をしなければならいだけなのです」

二人の王子が同時に眉をひそめる。

「質問？」

「ここですしょうか」レフティスが暗く沈んだ声で言う。「それとも、部屋の中で？」

「ここでもらおうか？」ジャーニイが挑発するように答えた。

「これから弟と飯を食いに出かけなければならいのでな」

シャンティはレフティスの口元がふつと微笑むのを見た。レフティスはすぐに顔を元に戻して言った。「よろしいでしょう」

監査官の一人が紙に何かを書き始める。大方その紙には質問の内容とジャーニイの答えが書かれるから、まずは質問者やら質問場所やら時間やらを書きこんでいるのだらう。シャンティは本格的だ、と思いながら廊下の端に寄った。レフティスがラッドハッドの方を見る。ラッドハッドは汗を浮かべながら頷いた。

「ええ、簡単な質問を一つですよ。王子の答えによつては……の話ですが」ラッドハッドは出来る限りの笑みを作つて言う。そのぎこちない笑みが、事の重大さを示している。「ええ、ええ、ええ、王子……あなたは、いえ、あなたとギャロップ將軍は………カバルス兵を使つて、王都への反乱することを企てていますか？」

11・敵は誰か？（後書き）

ギャロプン「それにしても、ねえねえ、どこの幻将だったの？ 南のナランとか？ それとも北にある後継者の国で幻将とかしてたの？」

男「……」

ギャロプン「ねえねえ。この亡国の幻将に教えておくれよ」

男「うるせえ……」

12・しょうぐんとあにおうじのおそるべきけいかく

> i 3 2 4 7 4 — 4 0 5 7 <

王都センチュリオンのシユラク王や緒將軍への反乱を企てていると疑われたのはジャーニー王子だけではなかった。將軍ギャロップもまた、ジャーニーの前に同じ質問を受けていたのだ。

その質問を受けた時、汗が体中から湧きでてきたのをジャーニーは感じた。

彼の後ろではシャンティはわけもなく兄の名前を呼んでいる。ジャーニーは意味がわからないと感じながら、うなだれ、そして狼のような目つきでレフティスを見た。奴だ、と彼は思った。奴はジャクナの使いだ。だから、おれを嵌め^はようとしているんだ。糞、糞、糞。

「そ、そんな事実はない」

ジャーニーは震える声で返した。

「ええ、わかりました」ラッドハッドは頷いてからレフティスの方を見た。彼も頷いた。で、諭すようにジャーニーを見て言った。「王子、あなたはすぐに王都に行かなければならない。ええ、そうです。カバルス鎮定軍に参加したギャロップ將軍やカバルス騎兵と共に！」

結論から言ってしまうと、この事件を起こしたのはジャクナ三世やレフティスの一派ではない。前述している通り、例の組織の者がこの噂を流していた。いや、もしかしたらカバルス鎮定軍のカバルス騎兵の一人に彼らの同志がいたのかもしれない。もしかしたら、ジャクナ三世と組織が繋が^{アナーキ}っていたのかもしれない。しかし、これも前述した通り、この無政府主義者たちの組織の資料は少ない。だから彼らがこの事件にどこまで関与していたのかは全く持ってわからない。

とはいえ、彼ら無政府主義者^{アナキー}はサンジャヤ人の件を一時的に有耶無耶にすることに成功した。そして同時に国の裏切り者であるギャロップを苦境に立たせることにも成功した。

ジャーニイは彼を守り奉る近衛兵団を取り上げられ、中からは開けることのできない罪人用の馬車に乗せられて強制的に王都へ帰還させられることになった。ギャロップも同様の馬車に乗って、しかし、ジャーニイとは分けられて王都に運ばれた。三百人弱の力バルス騎兵は馬と武器を取り上げられて、捕虜同様の扱いで王都に連れていかれた。

シャンティは黙っていなかった。じつとしてもいらなかった。彼は兄たちを乗せた馬車を守るという理由で近衛兵団と共に彼らのすぐそばに張り付いて王都まで帰還した。

彼らは石の街道を進みながら陰鬱な雰囲気^{ひんぎ}で歩いた。シャンティは自分たちの食料などをカバルス人に分け与えて彼らを励ました。食事だけは完璧に保証されていたジャーニイは、けれどもほとんどの喉に通さず、大きなクマを目の下にこしらえて、じつと馬車の隅を睨みつけながら、何事かを考えているようだった。

シャンティはギャロップのもとにも訪れたが、彼はいつものようになつまらなそうな表情を浮かべて鉄格子の向こうの景色を眺めていた。

「来る時は荷馬車だったのに、帰りは（鼻^ひ目で見れば）普通の馬車。これなら花吹雪舞う中を歩く凱旋帰国だって期待できる」ギャロップは自虐的な笑みを浮かべながらシャンティの持ってきた葡萄酒を飲んだ。「おい、シャンティ」

「なんだい？」彼は馬車の中の、ギャロップの前の席に座っていた。「今回のことの概要を説明しろ」

「……なんでも、カバルス人の官人がある噂^{みみざと}をしゃべっていて、それを監視官が耳聴^{みみざと}く聞きつけたってことらしい。その噂^{みみざと}って言うのは、君たち二人がカバルス騎兵と組んで王都を狙うとか、そんな信じるに及ばないものだよ。この噂はぼくが負傷した後に急速に西都

で広まったものなんだけど」シャンティは知っていることを全て話す。「ヒツパリオンにいたサウルス官人がその噂の出所を探っていたんだけど結局わからなかったらしい。その話をしていたカバルスの官人は酒場で聞いて、酒場の主人はカバルスの兵士たちが言っていたのを聞いたとか……」

「結局詳しいことはわかってないってことか」

ギャロップはくわー、とあくびをした。まるで、自分が助かるのがわかっていようだった。

シャンティの方は不安満々で、どうにかしたい、どうにかしたいと思っていたが、カバルスに戻って調査している時間はもはや無いそうになると父の前で彼らの無実を、現状の情報量で証明せねばならない。しかし、どうやって？

対策が思いつかなかった。はつきり言ってしまうえばギャロップが反逆を企てていた証拠など微塵もないのだ。しかしこんな曖昧な時に異様なほど効果を発揮する言葉がなぜかこの世に存在する。

「火のない所に煙は立たない」

その、たった一言で多くの人々が反逆者に仕立て上げられたことだつてある。疑惑は毒に似ている。そしてその毒に侵されるのはいつだつて為政者の方である。

父上はどうだろうか。この疑惑と言う毒に侵されて簡単に人を殺してしまうだろうか。それとも……。

馬車がごとごとと揺れた。シャンティは街路の乱れのおかげで、外を見ずとも現在位置が分かった。もうすぐ王都だ。

白髪のシユラク王は荘厳な玉座に座って待っていた。シユラク王の左右には従軍した監視官やジャクナ三世、エラルジス大將軍などの有力者が起立していた。

ジャーニィとギャロップは玉座の前で片膝を立てて跪いた。シャンティは監視官に導かれ、ジャクナたちのように王の横に立つ。

ラッドハッドがシユラク王に今回の事件についての報告をする。

シュラク王はやや顔を歪ませもしたが、それほど目立った反応はしなかった。少なくともいきなり頭ごなしに死刑を宣告されるという危険性はこれで無くなった。

「証拠が足りんのじゃないか？」とシュラク王が当たり前のようなことを言つと、監視官の一人がシャンティの考えていたあの一言をいった。火のないところには煙は立ちません、と。「しかし王都を襲おうとする理由はなんだ？」

「父上」ジャクナ三世が余裕しくしゃくな感じで口を挟んだ。「そんな風に言えば理由などいくらでも思いつきますよ。ジニーは常日頃から王位を欲しています、しかし、王位には父上が、王太子には私がついていきますので、彼が王位を手に入れようと思えば何らかの行動を起こすしかない。そしてギャロップについてはですね……彼は大体、カバルス人ですし、我々の命を狙う理由などいくらでも考えられます」ジャクナ三世はジャーニイの顔が酷く醜く歪むのを横目で見ながら続けた。「しかし、私は彼らの無実を証明したい。まあ、証明するも何も、証拠が何一つないんじゃないや彼らを罰することなどできませんってことなんですがね」

「そうだ、証拠がない」シュラク王は二人の容疑者の顔を交互に見ながら呟いた。「噂だけで人を裁けはしない」

シャンティはひやりとしながら彼らの会話を聞いていた。特にジャクナは本当にジャーニイたちの味方なのかを疑いたくなるような物言いだった。

「王」レフティスは怖れ多そうに言った。「その証拠ですが……と言つよりも証人ですが、一応連れてきております。数人おりますが……まずはカバルス人をここに呼ぼうかと」

「……呼べ」

そう言うシュラク王の顔はさつきよりも険しかった。

シャンティは証人だと？ と信じられない様子で向こうの扉からやってくるカバルス人を見ていた。彼はカバルス人らしい質素な服を着て、通訳付きでやってきた。彼がシュラク王の前につき、自己

紹介するとレフティスは質問を開始した。

「私が以前に質問したことを言っただけなんです……いいですね」とレフティスがたずねると、彼はこくりと頷いた。ジャーニイはその様子を充血した目で、食い入るように見ていた。「君は誰に何の計画を話されたのかね？」

「私は……噂がいくらか広まった後、たまたま会った名も知らぬカバルス騎兵が言っていたのを聞きました。彼は本物の甲冑を持っていたから本物の騎兵だと思います。だって、普通の人は武器を持つことなんて禁じられている。それで、彼は笑いながら言っていたんです。カバルス鎮定軍の偉い方がその戦力を使って王都に反攻を企てていると……」

「嘘だ！」ジャーニイがたまらず叫んだ。「お前は誰だ！ おれはお前など知らんぞ！ どうせ、金で買収されたのだろうが、てめえ……糞野郎、覚えていろよ、覚えていろよ！」

「王子、自己紹介を聞いていませんでしたか？ 彼はカバルスの一般市民です。だからあなたが知らないのも無理は無い」レフティスは静かな感じで言った。その声にはいつもと違い、潤いがあるのをジャーニイは気がついた。ジャーニイは体を震わせながら彼を睨みつけた。彼は質問を続ける。「それで？ たしか、計画の内容を知っていたはずですが」

「はい、知っています」カバルス人はまるで人形のようにしゃべっている。シャンティは彼の上には人形師がいるのじゃないかと、ふと彼の頭上を見上げてみた。いない。いないが、その人形師は彼の目の前にいる。レフティスは先を促した。「鎮定軍の偉い方は、いま持っている五千の兵士とカバルス兵数千、カバルス駐屯の総督軍（一万）を加え、さらに各地にいるカバルス人やサンジャヤ人にも力を借り、王都を素早く奪い、王権を手に入れるつもりだと……」

「サンジャヤ？」王が呟いた。「たしか……レフティスの書簡にそんな名前が」

「父上」ジャーニイが言う。「サンジャヤ人はカバルス人の反乱の

手伝いをしていたそうです。考えても見てください。カバルスを鎮定しようとする我々が、逆にカバルスを乱そうとする奴らと手を組むはずがありません」

「いや」ギャロップが澄ました顔で王を見つめながら言う。「おおよそ二万でサウルス軍と戦おうとするよりは現実的だ。武器を集めるにしても、サンジャヤなどの国外ならば監視の目が届かないしな」

「お前、どっちの味方だっ」

ジャーニイがギャロップに掴みかかる。ギャロップはつまらなそうな目で虚空を見つめる。

そこでシャンティが口を挟んだ。

「すいません、父上。少し考えたことがあるんですが……言ってみてもいいでしょうか？」

「まあ、いいだろう」

「カバルスにいたサウルス官人たちはジャーニイたちが西都に帰る何日も前から噂の調査を開始していたわけですが……ということは、カバルス騎兵団がヒッパリオンに帰還する前にその噂は広まったわけです。それでその男の人は、カバルス鎮定軍のカバルス騎兵から聞きました、って言いましたけど……ジャーニイたちは帰還した次の日には拘束されていたんです。じゃあ、彼はたった一夜しかないグッドタイミングで話を聞いたことになるわけですね」

「つまり？」王が問うた。

「いえ……別に……都合がよすぎると思っただけで」

「いや、待て」監視官の一人が言った。「王子が負傷した際にも、いやそれ以前にも何回かヒッパリオンには訪れているだろう？ その時に聞くことだってできるし、その男が発信源であるとも考えられる」

「良いこと言うじゃないの？ 確かにそうだ」ギャロップは、はははと笑いながらカバルス人の方を振り向いた。「で、いつ聞いたんだ？」

男は黙った。本当に男が話しを聞いていたならば、そんな簡単な質問はすぐに応えられるはずなのに。

「おれたちの最後の帰還した時か？」

とジャーニイがやや威圧的に質問した。

カバルス人は首を振った。

「……違います」

「そうか」ジャーニイはやや悔しそうな顔をして見せた。「もし、あの時だったのならば、外にいるカバルス騎兵の話しを一人一人聞いて回れば、コイツの正誤が判定できたかもしれないのだが」

以前に聞いていたならば、例えば遠征の最中に死んだ兵士に聞いたと言い逃れできるのだが、最後の帰還の際に聞いたならば、何とか嘘か本当か確かめられると言う意味だ。

この流れを見てレフティスが汗を浮かばせる。ジャーニイに質問を続けさせるのは得策じゃない。

「ギャロップ殿」レフティスはやる気のないギャロップに一度質問をする。「君は言いたいことはないのかね？」

「え？ おれか？ 別に質問はないけど……ああ、でも監視官に質問なんだけだな」ギャロップはつまらなそうな目を向けて、そしてニヤニヤ笑いながら言った。レフティスはしまった、と感じる。「カバルス鎮定軍の偉い方って発言なのに、なんでシャンティは疑われてないんだ？」

「てめえ、何言ってるやがる！」

ジャーニイはギャロップの胸ぐらを掴みあげる。ギャロップは彼から目を逸らしてシャンティの方を見た。

楽しんでいるな、とシャンティは思った。余裕の理由はなんだい？ まあいい、助かる術を持っているのは事実なんだろうね。

「確かにそうですね」シャンティがそう言つと監視官たちは驚いたような顔つきでシャンティを見た。シャンティは泰然とした調子で、証人を指差した。「そこにいる彼だけを信じるならば、ばくもちろん疑惑の輪の中に入っていないかならない」

「いいえ！」レフティスが声を荒げる。「シャンティ王子が容疑者でないのは、後に出てくる証人によって証明されております」

「おいしい」とギャロップが呟いた。

「貴様！」ジャーニイは掴んでいた胸ぐらをグイグイと上に引き上げてギャロップを締め上げる。「さつきから何をふざけていやがる」「何をしている、さつきと引き離せ」

ついには王も声を荒げてジャーニイとギャロップの二人を引き離す様に兵に命令した。兵士達は慌てて二人のもとに駆け寄る。

ギャロップ何をやっている。シャンティは眉をひそめる。まさか、勝算がないからって自棄になってるんじゃないだろうな。

羽交い絞めにされて引きはがされたジャーニイは額の欠陥を浮かび上がらせている。たいして、ギャロップの方はさつきと変わらない様子で頭を掻いていた。

「ふざけるなつて」ギャロップは苦笑しながら言う。「ふざけているのはおれじゃない。どっちかかっていうと、監視官の方だつつの」彼はつまらなそうな瞳を王に向けた。

「ギャロップ。貴様、何かを掴んでいるのか？」シユラクは疲れたと言う感じに嘆息しながらギャロップに聞いた。「それならできるだけ早くに言ってもらいたいものだ。なにせ、老いた身なもので、心的衝撃を何度も受けるのはつらい」

「そうですね」ギャロップはジャーニイを見ながら言う。「馬鹿王子の額の血管も限界が近そうですし」

ジャーニイは羽交い絞めにしていた兵士を振りほどき、額に手を当てる。

「それじゃあ、話を始めよう」

ギャロップは腕を組みながらふん、と鼻を鳴らした。

「まず、お前」ギャロップは証人の方を見た。「お前はいつ噂を聞いた？」

「そ、それは」証人はレフティスの方を見る。レフティスは目を合わさないように顔を背けた。こっちを見るなど言っている。「シャ

ンティ様が負傷してご帰還なされた時です」

通訳はそれを周りにも伝える。

「あ、あの……」証人はおどおどと言葉を続ける。「私、もう……何も知りません」

「ああ、別にいいぜ。次に、監視官に聞きたい。お前たちが噂を耳にしたのは確か……冬の、最後の帰還の際のことだったよな？」監視官たちは顔を見合せた後、一様に頷いた。「じゃあ、それまでに今回の謀反騒動にかんすることの兆候は見られたか？」

「ええ」レフティスは泰然として言った。「ギヤロップ將軍に関しては……カバルス騎兵を一度率いたことがありました。しかも、その際にサンジャヤ人を捕まえたのです」

「そう言えばそうだったな」

とギヤロップは笑いながらあつけらかんと言う。

「ラッドハッド」王が従者に尋ねた。「お前の報告書ではそんな事実は無かったが？」

「ええ……その……ええ」ラッドハッドは少しかりカバルス鎮定軍をひいき鼻肩したのを悔んでいた。「それは……その」

「もう良い」

王は舌打ちしながら話を切る。

「しかし」ギヤロップがレフティスに、不思議そうに尋ねた。「なんでおれはサンジャヤ人を捕まえてそいつから、サンジャヤ人が実は黒幕でカバルス人を操っているんだ、ってことを白状させ、それを監視官に伝えたんだ？　もし反乱するつもりなら、そっちに目を向けさせたくないはずだ」

「さあ、わかりません。もしかしたら、それを退治しに来たサウルス軍を攻撃するつもりだったか、それとも、もしかしたら味方にするつもりだったか……」

「なぜ、サンジャヤを選んだ。他の所でもよかったはずだ。カバルスの隣接国は多いからな」

「だから知りません」

「もしかしたら」ギャロップが嘲笑するように言った。「誰かがおれたちを嵌めようとしているのじゃないかね。まあ、もしかしたらだがね」

「あなたの言いたいことはそんなことですか」レフティスはどすを利かせて言う。「もし、そんなことですべてをはぐらかすことができるとお考えなら、その考えを改めるべきですよ。なぜなら、あなたの言葉は憶測の域を出ていない」

「ふん、自分が危なくなりそうになったからって、突然にキレるなよ」ギャロップはせせら笑う。「憶測と言う言葉は悪で、事実が善であると言うのなら、ちゃんと事実のみを証言するべきだ。いいや、証人が事実を言っていないとか、そういうことを言っているんじゃない。しかし、奴の事実を聞いたんだから、おれ達の持つ事実の話も聞いてくれてはいいいんじゃないのかね、って言いたいだけなのさ」

「お前の事実とは？」

王が問いかける。

「カバルス鎮定軍とカバルス民族との戦闘の事実ですよ」ギャロップはレフティスの肩をポンポンと叩く。「おれたちはカバルス鎮定軍としてカバルス各地にはびこる反乱民たちとの度重なる戦闘を行ってきたわけだけれど、もし、おれが本当に王都に攻め込むのならそんなことはしない。なぜって？ 簡単な話さ。王都を奪うために使う虎の子のサウルス兵たちを、そしてカバルスの民族たちを無意味な戦いで失うことになるから」

「私たちの目をだますためなのでしょう」

レフティスはシユラク王の方を見ながら言った。

「憶測は悪だぜ」ギャロップが顔を寄せて笑いかける。レフティスは恐怖を殺す様に下唇を噛む。「しかし、そうだな。謀反人ギャロップ大將軍としては監視官たちの目はウザったくでしょうがない。

よし、それならどうしようか、謀反人ジャーニイ王子？」

「あ？」ジャーニイは不意に質問されてうろたえる。それでも、彼はギャロップの質問の意味を理解した様だった。「……ああ、そう

だ。謀反人のおれなら監視官を殺す」

「げ、現に彼らは私たちを殺そうとした！」レフティスは叫んだ。

「シャンティ王子を亡き者にするための夜襲で、私たちも命の危機に瀕しました。なるほど！ あれは私たちだけではなくシャンティ王子をも亡き者にするための……」

「だからお前のは推測だつての」ギャロップがきつとレフティスをひと睨みすると、レフティスは黙りこくった。「もし本当に、おれたちが監視官やシャンティを殺すつもりだったなら、普通、助けに行くか？ あの時、夜襲された時、シャンティに逃げる方向を命じたのはおれだ。北に逃げろと。それを聞いていた者は少ないはずだから、おれはやるうと思えばシャンティは西だ、とか、シャンティは東だ、とか言つて、いつまでもそこら辺をぐるぐる回り続けてシャンティや監視官が死ぬまで時間を潰すこともできたんだ。しかも王都への報告は手紙だけ。偽造は笑えるくらいに簡単。それにもう一つ」

「なんだ？」

青白い顔で黙りこくつたレフティスの代わりに王が訊いた。

「証人は例の噂はシャンティが負傷して西都に帰還した際に聞いたと言つたな？ それにサンジャヤ人を捕まえた例の夜襲のことなどを考慮すると、謀反の計画はシャンティが軍の中にいる間に立てられたということだ。結構早い段階から計画は立てられていたわけになるが……さて、いつだ？ 鎮定軍がカバルス地方に着いた後、すぐにか？ それとも着く前か？」

「着いた後と言うのは、ええ、無理でしょう」ラッドハッドが耐えかねた様に言つた。「なぜなら、私たち……監視官が、ええ、あなたたちを見張っていたのだから」

「ならば」ジャクナ三世が無慈悲なように呟く。「前から計画されていたのでは？」

「それはいつ？」シャンティが返した。「ぼくがカバルスへの遠征を企画してから、それともする前から？」

ジャクナ三世は顔を背けた。

後からに決まっている。だがそうすると、カバルス遠征が決まっ
てから遠征に行くまでの間にすべての段取りを整えなければならな
い。そんな計画を本当に立てる奴がいるのか？

ギャロップがその質問に答える。

「カバルス遠征が決まってから、遠征出発までに、計画からなにか
らのすべての用意を整え、しかも向こうに行った後は監視官とシャ
ンティにばれないように本来味方であるはずの敵と本気で戦い、監
視官らを抹殺できるチャンスを用意に潰し、わざわざカバルス騎兵
を率いて、わざわざサンジャヤ人を捕まえてきて、連絡に使うなら
まだしも死ぬまで放っておいて、拳句の果てには謀反の計画がバレ
るって？」ギャロップはそこでレフティスを見た。レフティスはが
たがたと震えている。「なあ、お前もう気付いてんじゃねえのか？
これらのことは、ある一つの点の考えを改めればすっきりするつ
て」

ある一つの点とは？

レフティスは目にいっぱい涙を貯めた目でギャロップを見ながら
首を振る。左右に頭を揺らすごとに涙はどんどんこぼれ落ちる。ギ
ャロップは無視して頷いた。

「ああ、そうだ。シャンティとお前たち監視官が謀反人の仲間だと
するならば、色々都合がよくなる」

それにはシユラク王が異議を唱える。

「確かにそうかもしれないが、それでは監視官がこの謀反のことを報
告する理由が見いだせないではないか」

「危険が迫った監視官がトカゲのしっぽ切りよろしく、おれたちを
排除しようとしたというのがまっとうな意見かと思えますが」

「信じがたい」

「でも前述した馬鹿で阿呆で無鉄砲で、そのくせやけに遠大な計画
が本当に立案され、実行されていたのだとすれば……そっちの方が
自然ですぜ」

「というか、それしか考えられない」

とシャンティは口をはさむ。シュラク王はじろりと息子を見たが、シャンティは視線を虚空にそらしておどけたような顔をしている。

「それとも」ギャロップが澄ました顔で問いかける。「それでもこの計画は立案され、実行されていたのだとお思いですか？」

シュラク王は唸ってから、シャンティと監視官を見渡す。

「たしかに、今回の話は常識的には考えられんな」シュラク王は息を吐く。「そう言うわけだ。今回の事は不問とする」

場が静まり返った。シャンティもほつと胸を撫で下ろす。ジャーニイは未だに何が起こったのかを理解できないかのようにギャロップの方を見ていた。監視官たちも、もはや口を挟もうなどと思う者はいなかった。

シュラク王の先の発言はつまり形勢の逆転を意味する。ギャロップとジャーニイは完全に優勢に立ったことを意味する。ということは、今度は……。

「それで」ギャロップが証言をしたカバルス人をちらりと見た。「お前は一体何を聞いたって？」

今度はギャロップたちが攻める番だった。

「そ、そうだ！ 奴の証言は嘘だとわかった」ジャーニイが高圧的な態度で彼に歩み寄る。「奴を連れて来た者も怪しい。これは憶測だが、おれたちを嵌めようとしていたのかもしれない！」

ジャーニイがレフティスを見ると、レフティスは一気に崩れ落ちた。シャンティはギャロップたちのもとに歩み寄る。

その間にジャクナ三世や宮廷の有力者たちはシュラク王に目配せする。シュラク王は渋い顔をしながらあごを動かした。

兵士たちが足音を響かせて歩き始める。カバルス人は顔を青くしながら、自分をここに連れてきたレフティスを睨みつけていた。兵隊がレフティスやカバルス人を取り囲み始める。

「もしかしたら！」シャンティは声を上げた。「彼はジニーやギャロップたちを陥れるために金で雇われた男かもしれない。もしかし

たら、それを主導したのはレフティス殿かもしれない。……それでもそれは全て、もしかしたらで、結局、推測の域を出ていない」

「シャンティ」ジャーニイがいらいらしながら返す。「ならば奴はなんなのだ？」

「そんなことは知らないよ、ジニー。でも、もしかしたらで、誰かに不利な事柄だけを採用するのは駄目だ。それならば君たちはいまだに容疑者だ。それに……もしかしたら、彼は本当にその話を聞いたのかもしれない。彼はその男が本物の騎士だと信じていたが、実はその男が偽物だったのかもしれない」

「つまりは……」

とシユラク王が身を乗り出しながら問いたです。

「彼を責めるのはおかしいことです。そしてレフティス殿を責めるのも……。父上、だいたいさ、殺さないで済むのならばそれで良いじゃないか」

「そんなの、正気の沙汰とは思えんぞ」

ジャーニイは釈然としないのをはつきりと示す。

「ならば殺すのかい？」シャンティは真面目な顔になって言う。「

疑惑、憶測……ふん、ぼくはもう憶測で誰かが死ぬのなんて嫌だね」

「あ？ 何の話を……」

シャンティはジャクナ三世の方をちらりと見た。ジャクナ三世はふと見つめられて、驚いたような顔を少しする。その仕草でジャーニイはシャンティの言わんとすることを理解した。

ジャクナの母親のことか。あいつもそうだ。憶測で死んだようなものだ。けれども。

「馬鹿言うな」ジャーニイが呆れながら嘆息する。「お前じゃなくて、おれが殺されそうになったんだぞ？」

「でも殺されなかったじゃないか」

「お前は……くそ、とんでもない馬鹿だ」

「馬鹿は君だ。一時の激情で罪を犯して、いつも後になってめそめそと泣いているくせに」

「はあ？」

なに言ってるんだ、こいつ？ とジャーニイははつきり顔を歪めてから、勝手にしろと顔を逸らした。

シャンティの意見が愚かな考えであることは、ここにいる全ての者がわかっていた。レフティスがカバルス人を雇い、ジャーニイやギャロップを嵌めようとしたのは明瞭なことだった。そして、それを許すことは彼らにもう一度それをするチャンスを与えることも言えた。

敵は弱みを見せた瞬間に殺しておかなければならない。不用意に生かしてしまえば、さらなる恨みを抱かれていつか本当に殺されるかもしれない。

「まったく、馬鹿は手に負えねえやな」

ギャロップはそう言いながらジャーニイの肩を叩いた。ジャーニイは煩わしいと思いながらギャロップを見た。見て彼は驚いた。將軍の顔には白い歯をのぞかせた快活な笑みが珍しく浮かべられていたからだ。

結局、レフティスも証人のカバルス人もお咎めなしと言うことになり、ジャーニイは近衛兵団を取り戻し、カバルス人たちは捕虜扱いされた慰謝料を「カバルス鎮定で見事功を為したことへの恩賞」という形で与えられ、解放された。彼らはこの冬の間に護送兵団と共にカバルスへ帰ることになった。

シユラク王はほとんどの事柄が自分の意を通さない形で決められていくのにおかしさを覚えた。同時に、自分がないがしろにされたことに対して抱くはずの怒りは無かった。それは、王の深層意識が彼らの支えるサウルスの新時代を望んでいるのを証明しているようだった。

時代の潮流は止めることができない。同時に、老いも止めることができず、死も避けることができない。それならば、自分が古代の遺物になり果てる前に、新時代を新時代の人々に任せるべきではな

いのか。彼はそう思った。

シュラク王は三人にある試験を課することにした。三人に一時的な領地を与え、その成果を試すのだ。それによって後継者を選ぶのだ。

二二七年ももう終わろうとしていた頃に、それは王子たちに伝えられることになる。

12・しょうぐんとあにおうじのおそるべきけいかく

(後書き)

シュラク王「ところでギャロプン」

ギャロプン「なんですか、王」

シュラク王「王じゃなくて、陛下って読んでね」

ギャロプン「サウルス国は王って呼ぶ体^{てい}ということをお願いいたします」

シュラク王「それ、君の意見じゃないのよね」

ギャロプン「はい」

嫡男^{ちやくなん}三世「俺からもいいか？」

ギャロプン「どうぞ」

嫡男三世「こんなアホみたいな裁判どうなんだ？」

ギャロプン「今回はやや特別なので形式は通常とは違うという体で」

嫡男三世「それ將軍の意見じゃないよね」

ギャロプン「はい」

|||||||

画像はシュラク王様なんですが、ライオンみたいな鬣^{たてがみ}という設定を忘れていたので……。どっちにせよ、六十代の肌ツヤではないな。

13・頼み

> i 3 2 5 2 0 — 4 0 5 7 <

二二七年冬。

シャンティの日課は隣で眠る妻を起こすことから始まる。

ふかふかの柔らかな布団に包まれた彼は、同様の布団で寝ている妻の肩を揺さぶって一旦目を覚まさせる。次に従者を呼んで朝の飲み物を用意するように言うと、彼はベッドから起きて、運ばれてきた水などで顔を洗ったり、繊維がちょうど良い柔らかさの木の棒で歯を磨き、すっきりしたところで妻をベッドから抱き起こす。妻は必ず二度寝している。

妻をベッドに座らせておはようのチューをしてから、侍女に彼女の世話をするように伝える。寝ぼけ眼の彼女は歯を磨いてもらったりしながらも三度目の睡眠を必死にむさぼろうとしている。

シャンティは離宮内の廊下を歩いて従者や奴隷たちに挨拶をして周り、ちょうど妻が完全に覚醒したところで共に朝食をとる。そのあと妻の小言（主にカバルス行きの際にほっておかれたことへの文句）を聞いた後、離宮の端にある馬小屋シャフロンにいるルルディファイロに挨拶に行く。彼がいまだにつけている角の面甲シャフロンに命を脅かされたりしながら何とか離宮内に帰るとまた妻の小言を聞く。

昼食をとるまでの間に読書か訓練かをして過ごし、昼食をとった後は妻をお姫様抱っこして中庭を歩いたり、彼女を兄嫁のユルシユの所に連れて行ったりする。移動最中はもちろん小言を聞かされる。夕食までの間に小腹がすいたら菓子を食べる。近衛兵团との訓練がある時はこれも出来ない。近衛兵团はカバルスでのことがあったせいで張り切っており、何かと言って訓練を行っている。

夕食が終わると外は暗くなっており、灯籠の明かりで日記をつけるか、妻を離宮の高い所まで連れて行って王都の夜景を見せるか……。

こうやって王子の華やかな一日が終わる。

「……と、まあ、最近のぼくはとても充実しているよ」

シャンティはウイスカにジューズを注いでもらったコップを揺らし、中の波紋を見つめながら、熱っぽい感じに言った。

その日、エレが「ユルシュに会いに行く」というので、彼は抱っこして彼女を連れて行き、その帰りにギャロップに出会った。実は、センチュリオンでの裁判があった後、彼ら二人は色々な職務のせいで会えていなかった。シャンティは彼に会うや否や、噴水のある中庭に誘って近況を話しあうことを提案した。

「嫁に振りまわされて疲れてるから、そう感じるんじゃないのか？」
ギャロップは彼を気の毒に思いながら言った。「お前それは、奴隷以下の扱いだぜ」

「む、つまりは愛の奴隷と言うことだね？ うまいこと言うね、君も」このセリフはシャンティの日記とウイスカの日記の二つに記録されている。「文学と言う物がわかってきたらしい」

「もう、お前、好きにしろよ」

「……王子」とウイスカがやや驚きながらシャンティを呼んだ。「王太子様です」

シャンティとギャロップがウイスカの示した方を見ると赤髪のジャクナ三世がいた。彼は微笑みながら三人に近寄ってきた。

「シャンティ、ギャロップ將軍。久しぶりだね」ジャクナは明るい表情で言い、彼らのすぐそばで立ち止まった。「さつき妻の所に言ったが、先客がいたのでね。邪魔しちや悪いと思って退散してきた」「それは御賢明ですね」とギャロップは笑う。「なんせ、相手は魔女ですから」

「そういうこと。彼女は王である父よりも怖いからね」ジャクナが恐ろしい、と言うような仕草をする。シャンティはこの二人が冗談を交わし合っているのを始めて見た。二人はそれほど仲が悪いわけではないらしい。「それよりもシャンティ？」

シャンティが急に真面目な調子になったジャクナを見て、目を丸くする。

「はい？」

「父上から話しは聞いたか？」

「話……ですか？ いえ、何も……」

「コイツは最近」ギャロップがつまらなそうに答える。「嫁の世話か、訓練しかしてないですぜ」

「そうか……」ジャクナはシャンティの顔を見つめながら言う。「実はな、おれはさっきまで政務室に呼ばれててな……で、グナトウス総督として南部に派遣されることになった。父上にそう任じられたのだ。そして、この話を任じられた場で、お前たちにも同じような命が下ることも教えられた」

「……とはいっても、おそらく僕は西部カバルス地域の総督でしょう」シャンティが言うと、横にいたギャロップはもつともだ、と頷く。「なにせ、まだカバルス鎮定は完全に為されたわけではありませんし、サンジャヤのこともあります」

「そうかな？ カバルス鎮定に関してはすでにそれなりの成果が出ている。少なくとも、おれは報告書を見てそう感じたよ。それに關しては、冬になったから反乱や暴動が減ったという輩もいるが、カバルスの冬はそんなに寒くは無いし、雪が降って交通路が遮断されるわけでもない。だから野盜が冬を理由に仕事を休むことも考えにくい」

「まあ、そう言われてみると……そうですね。兄上？」シャンティは何かに気がついたように言った。「もしかして兄上は、ぼくが派遣されるのは西部ではないと御思いなのですか？」

「そうだ」ジャクナはよくぞ、気付いたという風に返す。「お前は西で一度負傷したからな。あの報告が来たときなど父上は顔を真っ青にして王宮を右往左往していた」

「じゃあカバルスは……ジニーが？」シャンティは焦るように言った。「そうになると、カバルス鎮定に欠かせないギャロップも彼と共

に、ですか？」

「どうだろうな。例の噂の件で二人一組にされていた奴らをも一度西へ送ると思えないし、父上はお前とギャロップをコンビとして考えているだろうから」

「なぜですか？」

ギャロップが不満そうにいう。

「將軍の真価を見抜き、戦犯としての罪状を知ってもなお生かし、將軍として取り立て、功を為させたのはシャンティだぞ？」ジャクナはやや説得するような表情になって言った。「ともかく、ギャロップは今やサウルス王国の剣だ。自分の危険を顧みず引き立てたのはシャンティなのに、真価を発揮した途端に他人に渡すように言われたんじゃないやあ、シャンティも不満だろう」

「ぼくはギャロップを物として扱うつもりはありませんよ。彼が」とシャンティはギャロップの方を向く。「彼がいいなら、カバルスにジャーニイと共に向かうのだって別に良い。その方が王国やカバルス人のためになるならね」

「まあしかし、おれが南部だからな。お前かジニーがまだ治まらぬ西部に派遣されるだろう」ジャクナは指を立てて、注意して聞くように喚起しながら言う。「その時は必ず將軍の誰かと共に派遣されるだろう。お前なら確実にギャロップ將軍とコンビ。ジニーならば……そうだな、まあ、順当に言ってエラルジス大將軍だろうな」

度々話題にでるエラルジス大將軍はカバルス戦役時にジニーと共に右翼に配備された男である。シャンティはいつからこの二人が周りに認められるほど懇意な間柄になったのか知らないが、おそらくエラルジス大將軍はいわゆるジャーニイ王子派閥なのだろうと思った。

「兄上。もしぼくの派遣先が西でないとしたら、他にどこに派遣されると思いますか？　まあ、北か東しかありませんが……」

「お前はどこが良い？」

ジャクナは笑いを堪えるような感じで聞いてきた。

「……ぼくは」シャンティはあることに気がついて言った。「そうだ。東だ、東しかない。だって、東部ヘドロケラスはエレの実家のある地域だから……。なるほど、そう言うことか」彼は中庭から見える晴天を見つめながら、晴れ晴れとした表情で、守護聖獣に感謝するかなのような心持で言うのだ。「妻への良いプレゼントにもなる！」

「お前には、北部カンプトケファレに行ってもらいたい」

「話が違う！」

「な、なにが？」

「い、いえ、こちらの話です」

ジャクナが父王シユラクに呼ばれた翌日、ジャーニイは兄同様シユラクに呼び出され西部カバルス地域へ総督として派遣される由を伝えられた。同伴する将軍はエラルジス大將軍であり、西部カバルス地域はまだ情勢が安定しないという理由で総督のジャーニイには総督軍としての一個軍団（一万）、エラルジス大將軍には鎮定軍としての一個軍団を与えられた。

そしてシャンティはそのことを昼前にジャーニイから聞いた。

昼過ぎ、待っていると父からの使者が来た。シャンティは離宮からすぐ近くの王宮に移動して、何度も通ったことのある長い廊下を案内されて政務室に向かった。

部屋についた時、シユラクは「すでに知っていると思うが、お前たちを各地に派遣しようと思うのだ」と言いながら、シャンティに椅子に座るようを勧めた。

シユラクの前には大きな机があり、机の上には書類の山とペンがあった。王宮での政務よりも侵略戦争を好むのめんどなくわかる量である。大量の紙の山が築かれた机の前にいすが置いてありシャンティはそこに座った。

「兄上は南部グナトウス、ジニーは西部カバルスらしいですね」シャンティが訊くと、シユラクはうん、と頷いた。「二人とも言って

ましたよ。これは王位継承のための試験だ、つて。けれども、ぼくは何度も言っていますが王位を欲してはいませんか？」

「つまり地方への派遣は嫌だと？」

「そうではありません。地方への派遣は望むところです。ええ、本当に。それでも、あのカバルスにジニーだけを送るのは少し……」

「今回は総督としての一個軍団とカバルス鎮定軍としての一個軍団を送っている。前は総督が一個軍団、カバルス鎮定軍が半個軍団だから……それから考えると半個軍団が多い。それに、大丈夫、歴戦の将であるエラルジスも同伴してくれるのだしな」

「前は地理感のあるギャロップが敵の地の利を打ち消してくれました。しかし今回は……まあ、これ以上はぼくが口を出すことではないのかもしれませんが」

「大丈夫だよ」 シュラク王は彼を安心させるように、にっこりとほ笑みながら言葉をつないでいく。「今回はカバルス兵の制限など設けていないから、カバルスにつけば好きなだけ軍備の増強ができることになる」

それでやっとシャンティは安心した表情になった。

「それで……お前には、北部カンプトケファレに行ってもらいたい」とここで、シュラク王の最初のセリフが来て、東部ヘドロケラスへの派遣を期待していたシャンティは思わず「話が違う！」と叫んでしまった。シュラク王は「な、なにが？」と驚きながら聞き返して、「い、いえ、こちらの話です」とシャンティは大声を出してしまったのを恥じて顔を赤くした。

「シャンティ、北は嫌か？」

シュラクが不安そうに尋ねる。

「いや、ぼくははてつきり、妻の実家のある東部に派遣されるのかと思っていたので……」 シャンティは赤い顔のまま頭をぼりぼりと掻いた。「昨日も妻に、そのようなことを……」

「ああ……それはすまないことをした。本当にすまないことをした」 シュラクはわなわな震えて、蒼い顔をしながらエレのことを考え

る。

「いえ、大丈夫です……」

「そ、それで……北の情勢だが、北部カンプトケファレのさらに北、モーキリニア地方に大きな国があるのは知っているね？」

王は王子の持つ、北法に関する情報の提示を促す様に、掌を差し出す。

「ええ、もちろん」シャンティは人差し指を立てて知識をひけらし始める。「国名はイムサで王都の名前はコルドスノア。十数年ほど前に出来た新興国ですね」

「そうだ」

「モーキリニア地方の北にあった例の大国……それは偉大なる王の死後に十数人の大將軍によって分割統治され、それぞれが後継者の国と呼ばれるようになるわけですが、その後継者の一国の領土内にモーキリニア地方の半分があつたんですね。後継者の国の王はモーキリニアを統一しようとしていましたが、それが逆にモーキリア人の怒りを買ってしまった。もともとモーキリニアの民は偉大なる大国でも勇猛果敢として恐れられており、偉大なる王もあの伝説的大遠征の際にはモーキリニア人の多くを兵や将として招き入れていたくらいなもので（そのため傭兵の出産地とも言われていたわけです）、まあ、モーキリニア人はいとも簡単に後継者の国の侵略を跳ね除けて、逆に敵の領土を奪って豊かな文化をも手に入れたと」

「座学は完璧だね」

「ええ、座学は、ですがね。それで？」

「で、だな。国内情勢が安定してきたモーキリニアは北ではなくこちらへの侵攻を企てているらしい。ああ、そうだ。モーキリニアとサウルスの間には古代の人々が作った川がある」

「潮の川 ですね」

「それを度々越えてきているらしい」

「川を……船で海を渡ることではなく、川を渡って陸から侵略作戦

をしようとするわけですね」シャンティが記憶の中にある、北のことを書いた本を思い出しながら言う。「古代の、傭兵だったころのモーキリニア人は、彼ら単体での海戦をしたことがない上、船を作ったことすらなかったらしいですからね。まあ、自分たちの得意な攻め手で勝負するということで、順当な方法を選んで来ていますね」

「もしもの時のために、北の港街には船を作らせてもいる。だが川を越えての侵攻の方が問題だ。今のところは少数のスパイを送り込んでこちらの地理の調査をしているにすぎんが、いつ大軍で襲ってくるともわからん。もしそうなれば……」

「それに対抗するためにギャロップを使おうと？」

「そういうことになる」シュラク王は間髪いれずに頷いた。「それだけではない。そのような重要地点に投入するということは、いわずもがな、我々があのカバルス軍人を重用しているということになる。この事実だけでもお前の望んでいるカバルス人の地位向上にも役立てることができる」

「ですがね、父上。ギャロップは私の持ち物ではありませんので、彼の北への派遣は彼の承諾を得なければなりません。まあ、国からの命令と言われれば行くしかありませんが」

「シャンティ……それで、お前はどうか？　まだ返事をしていないが、お前だって王からの命令ならば行かねばなるまいだろう？」

「……」シャンティは考え事をするように、目を伏せた。そして息をついた後に言った。「まずは妻に相談せねばなりません」

三王子の各地派遣は王位継承者を選ぶための試験であると官人たちは噂していたが、噂が本当なのかどうかは、それを実施したシュラク王にもよくわかっていなかった。

この派遣で良い成績を残したからといって王位を譲る相手にふさわしいかどうかもわかるわけではないし、ずっと王太子として役目を果たしてきたジャクナ三世のこともあった。もし、この派遣で誰か一人が他に類を見ないほどの成果を出したのならば、王太子を代

えることもありえたわけだが、そんなことはよほどないだろうと彼は考えていた。

彼は基本的に王太子をジャクナ三世から代えるつもりはなく、この派遣も本質的にはジャクナ三世の最終試験でしかない。だが、もしも、ジャーニイがカバルスを完全に鎮定した上に本国に何の害もない形でイハテリオ地方まで領土を拡大したならば……シャンテイがモーキリニア地方のイムサ国を打倒し……それ以外にも彼らが評価に値する事業を成し遂げたならば……。

しかし、と言うよりもやはり、常識的に考えてそんなことはありえないだろう、とシユラク王は思っていた。思っていたからこそ、この派遣の本質はジャクナ三世の為政者としての最終試験なのである。

彼はそのことを誰にも言っていない。一度たりとも「次王を選ぶための試験の派遣である」とは言っていないし、「よほどのことがない限りジャクナが次王である」とも言っていない。そしてこれは考えようによつては「ジャクナを次王に選ぶことを完全に自分に納得させるためにこのようなことをした」とも捉えられた。

二二八年年明けの冬の終わり。シャンティとジャーニイの二人はそれぞれの愛馬に乗って王都近くの草原まで来ていた。もちろん彼らを護衛する近衛兵団は彼らの周りにぞろぞろと突き従っている。

石畳によつて綺麗に整備された街道をそれて、草原の中心まで馬を歩かせる。冬独特の乾いた、強い風が吹くが、背の低い冬の草はしっかりと根を張って地面にしがみついている。

昔はここで競争したもんだ。とジャーニイがオヤジ臭いことを言いながら二人はくつわを並べて草原を歩きまわった。少ししたら湖で休憩をとる。持ってきたパンと燻製を食べ、薪たきぎをして残り物を即席スープにしたりして腹を満たすと二人はまた馬に乗って辺りを歩き始めた。

二人は木漏れ日がなんとなく風情漂うような感じのする街道を歩

き、頂上に一本だけ木の生えている丘に登って、そこから王都センチュリオンを見降ろした。眼前に広がる王都は焼き煉瓦の赤色や青く染めた布などによって彩られ、生き生きとした息吹の様なものをまざまざと感じさせた。

ジャーニイが王都を見降ろしながら呟いた。

「そういえば……結局、魔女は許してくれたんだって？」

「そうだよ。まあ、実家も近くなるし許してあげるわ、ってさ」シヤンティは眉を八の字にしながら困ったように言った。「そんなこと言うけど、彼女は両親に会うと途端に不機嫌そうな顔をし出すんだ。ははは、それが可愛いんだ。君にも見せてあげたいよ、彼女の照れている姿を」

「頼まれてもそれだけは遠慮しておこう。なにか、後で彼女に恨まれそうだからな」

ルルディファイロが突然丘を下り始める。小走りでポクポクポクと、ある程度下りると今度は草をついばみ始めた。ジャーニイは「次は水だな」と思いながら後を追う。ルルディファイロは彼の思った通り湖に戻って、水をごくごく飲み始めた。

「王子、お早いお帰りで！」とシェイバスが向こうから冷やかした。「なに、これからもうひとつ走り行ってくるさ」

シヤンティがそう返してルルディファイロの腹を蹴ると、ルルディファイロは地面に座り、次に寝そべった。カバルスの夜襲の際に愛馬との絆を強めたと思ってシヤンティは呆然として立ちつくした。「おい、シヤンティ。おれの馬に乗れ」

ジャーニイがそう言うのとシヤンティは恥ずかしそうに頭を掻きながら、彼の馬の背に乗った。

彼らは再度丘を登った。もうすぐ、この王都から遠く離れ、各々の派遣された任地で為政者とならなければならない。期間は詳しくはわからないが、永遠にその場所にいなければならないわけではないだろう。

「今回は二人別々の所に行くんだな」とジャーニイは弱きな感じで、

気持ち目を潤ませながら言った。「考えてみれば、初めてじゃないか？　こんなに遠くに離れて長期間過ごすのは」

「ジニーは大丈夫かい？　ぼくがいなくてさ」

「どちらが兄か忘れたんじゃあるまいな？　ふん、大体、それはおれのセリフだ」ジャニーニはちらりと後ろのシャンティを見る。「敵はモーキリニア人だろ？　おれはお前みたいに詳しいことは知らんが、やけに強い奴らしいじゃないか」

「より寒い地方に住む人々は体が屈強な場合が多いからね。体格や身体能力という点では完全に負けだね。それでも……」シャンティは力強く言った。「守りきれると思うんだ」

「深い理由は？」

「もちろんない」

「やつぱりか」ジャニーニは苦笑する。「余裕だな。おれはあのカバルスのじゃじゃ馬共とまた何度も戦わなきゃならんと言うのに」

「ジニーならば大丈夫さ」

「深い理由もなくそう思うんだろう？」とジャニーニが言うとシャンティはその通りさ、と笑いだした。ジャニーニもひとしきり笑った後、急に真面目な調子になった。「……なあ、ちよつと聞いていいか？」

「なんだい？」

「お前は父上に……王位を譲るといわれたら……受けるのか？　王位を」

ジャニーニがそろりそろりとそれを口にした後、二人の間にわずかの沈黙が流れ、大きな雲が太陽を遮った。二人は空を見て、急速さで進む雲の端から、また太陽の光が草原に向かって注ぎ込まれるのを見た。シャンティは言った。

「もしその場合は受けるよ」

「なぜ？」なんだと？「王位はあれほどいらないうっていったのに！」あれは嘘だったのか？

ジャニーニは強い口調になって、まるで責める様にシャンティに

言った。

「少し考え違いをしているよ。ジニー？」シャンティは少しもおくびる様子もなく返した。「父上がぼくらに王位をあげるといつてもね、ぼくらが貰うのは、本当は王位じゃない。いや、貰う、と言う言葉もニュアンスが違う。ぼくらはね……国と民を託されるんだよ」「……」ジャーニイは胸の奥がざわざわとゆれるのを感じた。「託される」

ふざけるな。

「そう！ 託されるんだ。この国に、この者たちに、どうか更なる繁栄を……そんな風に託されるんだ。そう考えるとね……やはり、断れないじゃないか」シャンティは微笑を浮かべて、それでも困ったように言う。「国と民の立場に立って一番良いのは誰かと考え、三人の中で、もし自分を選んだのだとしたら、それは断ってはいけない。それを受け取るのは父上のためであり、国と民のためなんだ」ふざけるなよ。

ジャーニイはついさっきまでの自分に深い嫌悪感を抱きながら、今の自分にも深い嫌悪感を抱きながら弟の言葉を聞いていた。

丘の上を強い風が吹いていく。それは草原の葉を散らして、空中に巻き上げた。

ジャーニイは思った。

シャンティ、お前は変わったよ。と彼は王都を険しい目で見ながら考える。変わってしまった。あの男のせいで、ギャロップのせいで。昔はおとなしい、ただのおとぎ話の好きな弟にしか過ぎなかった。誰もお前に王位を期待しておらず、そしてお前もお前自身の王位継承を欲していなかった。今もお前は王位を欲しないままだ。けれども……お前のその底知れなさはいつの間にか王宮内の官人の人望を集め、カバルスでも功を為し、いまでは、お前が王位に立とうとも誰も不審に思う者はいなくなるまでになった。おれは、ああそうだ、畜生め！ おれはお前が怖い！ お前はいつしか、王になつて、おれの憧れる領土拡大の侵略戦争を全ておれの手から奪い去り、

馬鹿みたいなただっ広い知識と無意味に深い思慮によって温厚な賢王として今の領地を治めることに努め、その阿呆とも言える優しさで歴史に名を残し……おれをこの歴史から消し去ってしまうんじゃないのか？ そう考えると……おれはお前が怖い。なあ、お前にもしその時が来て、お前がいまのままで歴史に名を残すことなど微塵も考えないのなら、その時は、おれに王位を譲ってくれ。おれは……そうでないと。おれはそうでないとお前を殺してしまう。……いや……いや違う。

かもしれない、じゃない。おれはお前を殺すのだ。もし、そうなる 때가きたならば、おれはお前を殺すのだ。殺すのだ……。

ジャーニイは決意を秘めた。そうやって決心をつけてしまうと、彼の心は悪くない感じだった。晴れやかだった。奇妙にさっぱりした感じだった。心の中に溜まっていたヘドロがまるで、綺麗な額縁がくぶちに入れて、大事な家宝として自分の中で飾られているかのような……それはそんな存在感を放ち、それが彼に安心感を与えた。彼は自分の矮小さにはつきりとした高評価を与えた。起こりうるかもしれない事柄に物語の英雄性も添加した。彼はもう揺ぎ無かった。

「シャンティ」彼は言った。いつもと変わらない顔で。「帰るか？」
シャンティも同じようにいつもと変わらない様子で微笑み、うんと頷いた。

ジャーニイは馬の腹をけりながら、さっきのように空を見上げた。風は空の高いところでも強く吹いて、雲をどんどん押し流した。彼は思った。

この空は、いつしか雨になり、雷を降らし、嵐を作って、いつかはまた何もなかったかのように澄み切った空になるのだ。けれどもその中で、取り返しのつかないものを残すのだ。そして知らん顔でまた、いつもみたいな表情を見せているのだ。

ジャーニイは眩しそうに空を見上げながら丘を下っていった。

13・頼み（後書き）

展開、すごくいきなりな感じがするなあ。

画像は古代のスペインで使われてた剣だったと思います。『武器』
と言う名前の本で見た。たしか、岩明均さんの『ヘウレーカ』でも
イベリア人騎兵が使ってるはず。

で、カバルスの方の人はこんなのを使ってたという設定です。

14・シャンティ、偉大なる大国の偉大なる王に関する考察をするの巻

> i32608 — 4057 <

二二八年の春。シャンティたちはサウルス国北部カンプトケファレ地域に向けて移動を開始していた。今回は総督として出向くから、家族や使用人を連れていくことも了承され、連れて行く兵士の数も一万にぼるので、長い長い行列が作られていた。

愛すべきシャンティ王子はカバルス鎮定での功などの影響で人気を急上昇させていた。特に、カバルス人の地位向上に努める姿勢から、王都センチュリオンに連れてこられていたカバルス人奴隷からはことさら人気があった。

ジャーニイたちは、西都が遠いという理由からシャンティよりも一週間も前に出発していたが、そのときよりもカバルス人たちの熱狂はすごかった。シャンティに亡国の幻将と呼ばれて冷やかされているギャロップの人気も高かった。彼はサウルス国民にとっては戦犯であり、カバルス人にとっては裏切り者であるにもかかわらず、その高い軍才からある程度の評価を得ていたようである。

この頃の王都では「ギャロップ少年の冒険」という本が出版されており、人気を博していた。それは彼の名前と風貌を使っているが、物語は全てが嘘っぱちだった。西方の一角獣を倒した^{ユニコーン}ただの、竜に乗って各地を旅したただの、万病に効く竜の鱗を病気の少年に与えたただの、最後に若い麗人と道ならぬ恋をしたただのと言っことを面白おかしく書いており、シャンティとジャーニイはそれをギャロップの前で読み聞かせして哄笑していた。ギャロップの方は真っ赤な顔を苦々しそうに歪めていた。

ともあれ、シャンティたちは北に向けて旅立った。

シャンティとエレは王族用の馬車に乗って優雅に旅し、兵隊たちは規律正しく歩いて歩いて歩きまわって旅を続けた。北に進むにつれて気温ではなく風が冷たくなってくる。サウルス人の兵士たちは

対して気にもとめていなかったようだが、去年の同じ頃合いには温暖なカバルス地域にいたシャンティはやや寒そうにしていた。馬車の中でがちがちな震えるシャンティを見てエレは「軟弱」と高笑いし、それは周りの兵士たちにも聞こえたようだった。もともと東部と北部は緯度がほとんど同じで、と言うことは東部出身のエレは寒さになれていることになる。

「なるほど、寒い地方にいたからあんなに肌が白いのか」

とギャロップはことさら寒そうにしながら言った。ギャロップではない。温暖な地域に住んでいたカバルス人は皆が皆寒そうに震えていた。

カバルス人は今回も五百人ほどの従軍である。もつと連れて行くうと思えば連れていけたが、北部で戦地になるであろう地域の資料を見たギャロップはすぐに騎馬の無用さを指摘した。次は基本的に森の中の戦いになるのだ。

行軍するだけの日々が何日も何日も続くと、何不自由なかったエレもさすがに我慢の限界が近くなってきたようで「目的地の北都ウチノホークにはいつ着くの？」としきりにシャンティに質問するようになった。でもシャンティは「もくてきち……」の言葉を聞くと同時に用意しておいた菓子をはつと出すことで彼女の機嫌がより悪くなるのを防いだ。

列を為した一万人以上の人間は、大小色々な山をいくつも越え、深い森をいくつも越え、川に掛けられた芸術的な橋を渡り、やつとこさウチノホーク近辺まで辿り着いた。

シャンティは日記帳に『ウチノホークには何度か来たことがあるが……始めて気がついた、空の色が違う気がする。北の空は薄く、遠い色をしている』と書いている。エレはそのことを良人から話されると、彼の夏の晴れ空色の目と、今自分の見ている北の空の色を見比べて「そうね」と頬笑みを返した。彼の目の色の表現、つまり「夏の晴れ空色の、はつきりとした青色の目」という表現は、エレが侍女に一度だけ言った言葉を引用している（シャンティの自画像

を描いた絵師に、侍女がそれを伝えたことによって今にその表現が残っている）。彼女は夫の千分の一も書き物も残さなかったが、それでもこの話を聞けば、彼女に夫同様の文才や表現力があつたのがわかる。

さて、サウルス国の特産品とも言われる石畳の街道を通り、丘を頂上まで登つたところで、シャンティたちは目視できる所に北都ウチノホークがあるのを知つた。

ウチノホークはどことなく重厚な感じの都市だった。寒いことに関係性があるのか、市城壁や建物の壁はセンチリオンのそれより厚いように見え、全体としてはぼつたりとした灰暗い色の町だった。しかしそれらは近くにある木々やのどかな農地と見事に調和しており、町に漂う雰囲気は古風で落ち着いたものと言えた。

良い都市だ、とシャンティは嬉しそうに眼を見開きながら思った。シャンティは兵士たちの元に行き、笑いながら「ここまでくればウチノホークまでは目と鼻の先だ。どうしようか？ このままウチノホークまで休みなしで行くかい？ それともウチノホークを見ながら昼食をとるとするかい？」と語りかけた。

「王子と共に！」カバルス人が片言ながらサウルス語をしゃべりながら言つた。「昼食を！」

すると兵士たちは一斉に「パキケファ口の丘で昼食を！」と叫びながら、荷馬車から荷物を下ろし、昼食の準備をし始めた。シャンティはギャロップから「予定外のことを行われては困るなあ」と小言を言われながらも、うきうきしながら昼食の準備を手伝つた。

準備ができるとすぐに宴会が始まつた。酒は一人二杯までと決めていたが、將軍であるギャロップがそれを率先して破りながら大量の馬乳酒を飲んでいた。カバルス人は相撲を始め、サウルス人はそれを取り囲んだ。近衛兵団は憲兵より騒ぎが大きくなり過ぎないようにパトロールをしていたが、行く先々で酒やつまみを勧められて腹がパンパンに膨れていた。

シャンティは丘の頂上で嬉しそうにその光景を見ていた。エレは

呆れたような顔つきで彼のすぐ横に立って「なぜ、こんなことをするのかわからないわ」と静かに言った。その声には怒気は宿っていない。

「明瞭なことさ」シャンティは彼女の好物の菓子差し出しながら笑いかける。「彼らと共にここでこうやって過ごせるのは最後だから」

「仕方ないですわ。聞いてあげましょう、あなたの良き妻としてね」エレは溜息をつくような仕草をしながらお菓子をとった。「それは一体どういうことかしら？」

「北の……モークリニアよりも北にあった大国。偉大なる王の作った大国。小ウアズマの北半分を征服し、しかし、それすらも鮮やかなる地方ウアズマへの足がかりにすぎず……」シャンティははるか遠くを見つめるような眼つきをする。「偉大なる王はなぜ軍を率いてそこに向かったのだと思う？ ウアズマの文化に触れたいのなら、ただ一人の冒険者でも良かったはずだ。ましてや、多くの民から敬われただけならば、ウアズマへは行かず、小ウアズマを征服するだけでも良かったはず……」

「さあ？」

「ぼくはね、思っただ。彼は、家族や友や將軍や兵士や、つまり愛する者たちと一緒に色鮮やかなる土地に臨みたかったんだ。もちろんウアズマの、きらびやかな黄金や宝石、肌触りの良い絹の衣服、食べたこともない味の食べ物、美しく官能的な女性……そういう物がほしかったのかもしれない。それでも彼は、例えばウアズマの一国の王の側近として取立てられ、それを享受できるとしてもそれを望まなかっただろう。だって……」

「これが出来ないからでしょう？」

とエレは馬鹿騒ぎする兵士たちの昼食会を馬鹿にするかのように指さしながら微笑んだ。

「長く広く大きな世界で、最愛なる者たちと共に享受する唯一の間。それは何ものにも勝るんだ」シャンティはいっそう瞳を輝かせ

ながら彼女に言うのだ。「友や、兵士や、君たちでなければならぬ。君たちとの一瞬でなければならぬのだ。たしかに、見ず知らずの者たちとの時間も代えがたいものだ。けれどもその時間も、艱難辛苦を共にして心一つに繋ぎあつた今のぼくたちの一瞬には敵わない！」

「その時間を愛するがために、あなたは何者も嫌えないのかしら？」

「それは……なるほど、初めて相対するタイプあいたいの質問だね。答えを考えておかなくちゃね。難しい質問だから、老後までかかるかもしれないけれど、君は待てるだろうか？」

「シャンティが私に尽くしてくれるのならね。いつまでも待つわ」

「善処します……と言うしかないね。それに關しては」

「あなたならきつと大丈夫よ。なに、私の機嫌をとるなんて、用兵術よりかは簡単なことよ」彼女はいたずらっぽい笑顔を浮かべて言う。「不機嫌になったら、お菓子を出せば良い。……違つかしら？」

シャンティは、もう通用しないなあ、と思いながら困つたようにお菓子を食べた。

「王子！」焦つたような声が遠くから聞こえてきた。シャンティは、騒ぎ過ぎたのだろうか、と思いながら声の主を探した。声の主である近衛騎兵はウチノホーク側の丘の麓の方からやってきた。そしてシャンティのすぐ前に着くと、丘の麓を指さしながら言った。「カンプトケファレ自警軍です。王子を呼んできてほしい、と」

「自警軍……」シャンティが麓を見ると、数十人の屈強そうな男たちが彼を睨んでいた。「わかった。ぼくに任せてくれ」

シャンティは丘をおり始めた。宴会をしていた兵士たちは騒ぐのを止め、下りていく王子と麓で待つ体の大きなカンプトケファレ兵たちを交互に見た。近衛兵団の兵士たちは下りていく王子のすぐ側に集まり始める。

さて、自警軍についての説明を始めなければならない。

総督は一個軍団を引き連れて任地に赴くが、もちろんそれだけでは広い範囲をカバーできないし、侵略戦争にもなるとほとんどの兵士は侵略軍側に引き抜かれてしまう。そうなると手薄になった各地域を守るための個別の軍が必要になる。そのために自警軍と呼ばれる軍隊が作られたのだ。

自警軍はいわば警察であり軍隊である。地域内の野盗を退治したり、町の治安維持を行う。

軍（ここから少しの間、区別のために国軍と書く。侵略軍や総督の持つ軍も国軍である）と自警軍はほとんど同じであるが違ってくるもある。二つの軍の持つ権力の差を見れば、国軍の方が上である。国軍はサウルス国の各地域から兵士を集めるが、自警軍は各々の地域からしか兵士を集めない（カンプトケファレ自警軍はカンプトケファレ地域からしか集めないし、サウルス地域もサウルス地域のみから兵士を集めて、国軍とは違うサウルス自警軍を作る）。

国軍は侵略戦争を行えるが、自警軍は原則として防衛戦争しか行えない。

つまり国軍は地域間の境を越えることができるし、国境も超えられる。自警軍は地域間の境も越えられず、もしそれをしようとする

と反乱とみなされる。国軍は自警軍から精鋭兵を引きぬけるが、自警軍は国軍からそれを取り戻すこともできず、国軍からの返還を待つしかない。

国軍の兵員数には限度は無いが、自警軍は反乱を防止するという理由で一個軍団から二個軍団の間の兵員数しか認めない。

ここでサウルス国の徴兵制度的なものも説明しておかなければならない。

サウルス軍の兵士には貴族出身の兵士と平民出身の兵士がいる。そしてその両方共に志願兵と徴兵がいる。志願兵は軍人を生業とする者であり、徴兵は他に職があるが国の義務により兵になった者である。軍内部での権力はもちろん進んで兵士になった志願兵の方が高い。

次に軍隊内での貴族と平民の差である。言わずもがな、貴族の方が上級職につきやすく、貴族と平民が同級の場合でも、貴族の方が強い権力を持つ。

国軍において軍集団を率いるのは王族か大將軍のみである。軍団を率いるのが將軍。大隊を率いるのが大隊長（千卒長）。騎兵隊を率いるのが騎兵隊長。近衛兵団は近衛隊長。ここまでは基本的に貴族しかなることはできない。

中隊を率いる百人隊長（百卒長）を貴族がする場合はあるが、基本的には志願兵である。百卒長になるのは徴兵内でも今までの戦闘で戦功のある者、それと一般市民内での有力者（つまりはある都市で幅を効かせていた者など）、志願兵の有力者である。

小隊を率いるのは隊長。基本的に志願兵である。これも百卒長同様の理由で決定される。

さて、自警軍は最大二万人の兵員数の中で、百人が貴族であり、全員が上級職である。自警軍の長は自警軍長であり、これは各地域の最上級貴族（サウルス王族ではない）になる。その下の自警軍団の長は自警軍団長であり、これは上級貴族になる（厳密には上級貴族などと言う身分はない。ただ単に家名の高い貴族の表現として上級貴族と言っ言葉を使う）。各兵種隊長は貴族になる。千卒長は貴族と志願兵になる。百卒長は貴族と志願兵になる。隊長は志願兵と徴兵になる。

次に志願兵の説明をつけたしておく。

志願兵はつまるところ、軍人を仕事にしている者たちのことであると前述した。国軍と自警軍の志願兵では少し質が違うが、彼らはおおむね公務員と同じであり、徴兵よりも多い給料を貰いながら暮らしている。しかし給料は下級官人より低く、志願兵用の寮などとも与えられるが結婚すると追い出され、その後の住処探しの手助けを国はしない。

侵略戦争などの有事の際、各地域の自警軍の精鋭志願兵はすぐに国軍に引き抜かれていく。引き抜かれた彼らは国軍内で隊長職につ

き、隊を率いる。自警軍では千卒長をしていた者が、国軍では百卒長などと言うことも普通にあるし、給料も自警軍と比べてそれほど変わらない。それでも、国軍に引き抜かれると言うのは十分に名誉なこと、彼らは地元に戻った時には尊敬の眼差しで迎えられるところになる。

「王子」シェイバスが馬の上から王子に声をかける。「地域の自警軍には粗暴な者が集まると聞きますが」

「粗暴と愚かは同じ意味ではない」シャンティが丘を下りながら泰然として返す。「もしばくが王族であると彼らが知っているのなら、彼らは手荒なことはしないだろう。なぜなら、ぼくを殺せば彼らの数倍の戦力を持つ国軍が動くのだからな」

「……」シェイバスは近くの兵に小声で何事かを話す。話しかけられた彼らは、すぐに馬を走らせて自警軍を取り囲んだ。「王子……とりあえずのことをさせてもらいましたよ」

シャンティは前を向いたまま、うんと頷く。それから数十歩前に進むと、待ち受けるカンプトケファレ兵の前についた。彼らは皆、体が大きく、一番前に立っている男はギャロップと同じほどの背丈だったが、骨格は將軍よりも一回り大きいようだった。

シャンティは彼が腰に帯びる剣を見た。

「北の剣は他の地域よりも大きく分厚いと聞きました。見せてくれませんか？」

とシャンティが言うと、自警団の彼らは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした後、噴き出して笑いだした。近衛兵たちはムツとして腰の剣に手をかける。丘の兵士たちも王子を笑ったことに対して気分を害し、むつくりと立ちあがった。

一番前の大男がそれを見て、感心したように口角をあげる。彼は腰の剣をシャンティに差し出した。シャンティは興味深そうにそれを見て、鞘から剣を抜いた。

「確かに……少し違う」

「サウルス・センチュリオン・レジーム・シャンティ様」大男が片膝をついて跪くと、後ろの男たちも同様にした。「お迎えにまいりましたぜ」

「ありがとう。立ってくれ」シャンティがそういうと、彼らはすぐに立ち上がってシャンティの前で膝についた砂埃を払い始めた。「君たちの名は？」

「カンプトケファレ地域自警軍。第五歩兵千人隊……の第二軽装剣歩兵隊」

「君が隊長か？ 名前は？」

「おれですかい？ おれの名前はフートスですが……ははは、んでも、おれは副隊長ですぜ」とフートスが哄笑すると、後ろから老人がひよこひよこと現れた。老人は顔いっぱいに深い皺を刻ませており、髭は鎖骨の辺りまで伸びていて赤いリボンで結んでいる。身長はシャンティよりも少し下、けれども、体つきは若者のそれだった。そして、彼は隻腕だった。

「私^{わたくし}めはこの歩兵隊の隊長をやとります、ジョージョー・ビグフトスと言います」老人は懐から本を取り出し、おずおずと差し出した。「恥ずかしながら、私の若いころの冒険を書いた本を出します。読んでいただければ光栄です」

「ジョージョー？」シャンティは眉に皺を寄せながら本を受け取る。本の題名は「ジョージョー脱獄記」であった。シャンティは題名を見た瞬間がくぐくと震えだした。「い、生きていたのですか？」

「おい、何をしてる？」とギヤロップがつまらなそうな表情を浮かべてシャンティたちのもとにやってくる。隣まで来るとシャンティの持つ本を見て言った。「それはなんだ？」

「君は馬鹿か！」シャンティは獣の皮で表紙を作ったハードカバーの本をギヤロップの顔にぶち込みながら演説し始めた。「この本『ジョージョー脱獄記』は、モーキリニアの若き戦士であったジョージョー・ビグフトスが村落内の権力闘争に巻き込まれ、そして紆余曲折の末に彼は投獄された。固く分厚い鉄格子の牢屋に繋がれた彼

はその鉄格子の欠片で針を作つて鍵を作つた。彼はしかし、逃げ出してすぐに発見され、森に逃げ込んだ。彼は考えた。モーキリニア人は、海は苦手だから船を盗んで海に出よう、と。そして彼は遭難したあ！彼は漂流した島で何とかその日の食料を手に入れていたが、それも徐々に限界に達し始め、そこからの脱出の図ることになった。そしてそして、彼はサウルスの北であるカンプトケファレに辿り着いた！その時はまだ、カンプトケファレが国として存在していた頃だ！そして彼は……」

「うるせえよ」ギャロップは大きな手でシャンティの口を塞いでから自警軍の方を見た。「それで、結局お前たちは本当にこの馬鹿を迎えに来てただけなんだな？」

「ああ」とフートスが答える。「それと、爺さん……ビグフトス爺さんはおれの本当の爺さんなんだが、爺さんが王子のサインを欲し……」

ビグフトスはおずおずと紙を取り出してシャンティの前に差し出した。フートスの方がペンとインクを取り出す。

「……」ギャロップは紙に『亡国の幻将ギャロップ参上』と書いてそれを返した。「よし、じゃあ宴会は終わりにしてウチノホークに入ろうじゃあないの」

「その前に聞きたいことがある」

大男フートスは差し迫つたような、鋭い目つきで言った。

「なんだ？」

ギャロップが片方の眉を上げながら返す。

「あんた、シャンティ王子のなんなの？」フートスは青白い顔をしながらか小指を立てて言った。「これかい？」

ギャロップはシャンティを思い切りつき放して、猛烈な勢いで首を横に振った。シャンティは「ギャンツ！」と言いながら地面にたたきつけられた。

「そうか、ならいいけど」彼は晴れ晴れした顔で、北の薄い空を見上げながら言った。「ほら、中央の人ってそう言う奴が多いって聞

くからさあ。そんなもおれはそういう文化だけは受け入れられないんスよ」

彼の後ろで彼の部下たちがうんうん、と頷く。ギャロップは、そう言えばおれもカバルスにいる頃に同じようなことを聞いたな、と思いついた。

かくして宴会は終わり、シャンティたちはその日のうちにウチノホークに入った。次の日に総督職の引き継ぎ式を行い、前任の総督から書類やら冠やら剣やらを渡されてシャンティは難なく総督に就任した。

引き継ぎ式にはカンプトケファレの貴族たちが集まり、東部貴族であるはずのエレの家族も出席していた。また、自警軍も新しい総督のために行進などの見世物を行い、都市中に新総督就任のニュースを流した。

シャンティの人気は北でも大したものだった。大体、シャンティは顔が良いものだから女性には好かれやすい。その分、男性からはあんまりだったが、ここ最近の彼の行動、つまりカバルス人の地位向上のためにカバルス鎮定軍を出したことなどから、一本筋を通す男気があるとして北の男たちには高く評価されていた。

そしてウチノホークに入って三日目。まだ肌寒い春の日に、モークリニア地方イムサ国対策会議が始まった。

この小説は4月くらいに書き終えて、それからずっと文章の直しとか絵の描き貯めとかをしてました。

そうこうしているうちに『アイドルマスター』というアニメが始まって、そのキャラクターの四条貴音という娘がエレの設定とややかぶってた（ふわふわの髪に大食い）ので、僕の頭の中ではエレのビジュアルがこの娘に定着してしまった。

そういうわけで、エレのビジュアルはかなり（というか、ほとんど）その娘の容姿に似てる。パクリではありません。リスペクトです。パクリスペクトです。

もちろん「パクリやないかい！」と言われたら、ぐうの音もありません。

まあ、絵が下手なせいであんまり似てないからいいではないですか、ぬはは（完全な開き直り）。

15・モーキリニアの將軍

> i 3 2 6 6 6 — 4 0 5 7 <

二二八年、夏の真つ盛りの頃。その夏はどこもかしこも猛暑で、比較的涼しいはずの北の大地もその例からは外れていなかった。そんな中、一人の男がのどの奥も干上がるような暑さを感じながら炎天下の農村を歩いていった。

彼の名前はエムノン。彼が歩くと村のいたるところから挨拶の声が聞こえた。全てイムサ兵の声だった。「おはようございます!」「今日もお元気そうで!」「出撃はいつでしょうか!」「いつでも出撃できます!」「戦いは?」「戦争は?」しかし彼はそんな声にはほとんど反応もせずに一軒の大きな木製の建物に入った。

ノックもせずに不躰に家の中に入ると、身長短足小太りの、やけに頬の赤い男が中にいた。相手の男はエムノンを見ると不機嫌そうな顔つきになった。

「ブシッタコス、何の用だ?」

エムノンは言いながら、部屋の中にある適当な椅子に荒々しく座った。

「我が王バテル・オルニス様からのことづけだ。いつになったらお前は敵国に攻め込むのか……とな」ブシッタコスはくるくると巻物を開きながら言った。「本当に、いつになったらお前はサウルスへの侵略を開始するんだ? 情報収集からずつと話が進んでないじゃないか」

「つい最近カンプトケファレの総督が代わった」エムノンは足を組んで、高圧的な態度で答える。「調べて見たがそいつはカバルスの鎮定で功を為したらしい。少しの間は相手の様子を見なければならんと思っている」

「だから早く攻撃を開始しろと言ったのだ!」ブシッタコスは頬をさらに赤くして叫んだ。「この臆病者! モーキリニアの名折れ!」

「ブシッタコス？」エムノンはイスから立ち上がると、腰に帯びていた剣に手をかけながら威圧するように彼に近づいた。ブシッタコスは身を後ろにそらす。「おいおい、ブシッタコス。ブシッタコスはブシッタコスらしく、王の言ったことだけをおれに伝えればいいんだ。おいおい、わかったか？ お前は自分の仕事を忘れているんじゃないのか？ おい、そしてなあ……お前はおれの言ったことを王に伝えるだけでいい。それ以上は、いらない。つまりは、おれの悪口をいちいちいい、王に言わなくてもいいのだよ」

エムノンは鞘から剣を抜くと、ブシッタコスの真つ赤な頬にあてて、すつと横に引いて見せた。すると彼の頬には一本の細い傷ができ、その傷から血が浮き上がり、端から血が流れ始めた。

「……」ブシッタコスは悔しそうに、さらに顔を赤くして言った。

「私はお前が嫌いだ、大嫌いだ。しかしお前の軍才は信用している。イムサで一番の軍才だと信じている。そしてこれまでのことは……

……私なりの忠告をしたまで」

「気が合うな、おれもお前が大嫌いだよ。いや……」エムノンは剣を収めながら言う。「それどころか、お前以外の文官全員も大嫌いだ。なぜモーキリニアが、なぜイムサが、お前たちのような剣も扱えん無能共に牛耳られねばならんだ。領土はいつだってペンではなく、剣で手に入れてきたというのに。お前たちは土地を手に入れるとすぐにそれを文官の中だけで囲い始める。それを手に入れるために命を賭したおれたち武人を差し置いてな」

「文官はお前たちが手に入れた土地を管理・維持しているだけだ。

囲い込んで……」

「しかし、その維持の最中でお前たちは享樂を享受している。權益を得ている。そしておれたちには……次の戦場に行け……だ」エムノンは吐き出すように言う。そのくせ笑顔である。「いや、いいのだ。いいのだよ。おれたちには戦場しかない。戦いしかないのだ。モーキリニアの恐ろしき女たちとは一週間だって一緒にはいられないのだ。だからおれたちの住処は戦場で良いのだ、そののみを望ん

でいるのだ。この、狂奔と喧騒が支配する場所を望んでいるのだ」

「ならば！」

「しかし！ お前たちは許せん、お前たちは許せん！ 歴史を紐解けば、奸臣と言つのはいつだって文官から出るというじゃないか。お前たちだってそうだ。王を誑かし、享樂に誘い込み、墮落させ、家畜のように太らせ……」エムノンは顔を真つ赤にしている。「いや、それすらも別にいいのだ。お前たちが快樂を貪るのも、王が腑抜けになるのも。しかし……しかし……おれたちの美しい戦争を妨害しようとするのは許せん」

「私も勇猛なるモーキリニア人の端くれ……お前の気持ちは、わかるつもりだ」

「わかるはずがない。ならばなぜ、王を焦らせておれたちの戦争計画を潰そうとするのだ」

「私のせいではない。王が望むのだ。王は国の長期的な……」

「黙れよブシッタコス」エムノンは一転して静かに言った。が、続く言葉は激しく熱い。「長期的？ ふん、馬鹿らしい。どうせ、それを教え込んだのはお前たちだろう？ ふん、馬鹿らしい。長期的だと、ふん、ははっ、長期的だと！ 長期とはどれくらいだ？ 一年？ 十年？ 五十年？ 百年？ それよりもっと遠い、見果てぬ未来のことか？ 馬鹿らしいったらありやあしねえぜ！ 長期的にはおれもお前も王も、誰も彼もが死んじまつてるぜ！ そして戦争は！ 今起きている！ 戦争では！ 一瞬の気の緩みが、一瞬の判断ミスが、積み重ねてきた全てを終わらせる！」

「……エムノン」ブシッタコスは死の恐怖をひしひしと感じながら呟いた。

「伝える！ 王に伝える！ 腐ってしまったバテル・オルニスに伝えろ！ ブシッタコス！」エムノンは満面の笑みで、いや、見ようによつては憤怒の表情にも見えるような顔でブシッタコスに詰め寄った。「戦争の準備を一日早ませ、万が一にも戦争に負けたのなら、貴様の千年帝国も夢の話よ、とな」

エムノンは言い終わるとブシッタコスが部屋の中に残して、去った。ブシッタコスはぶるぶると体を震わせながら、下唇を噛み、定まらぬピントでさつきまでエムノンがいた所を睨んでいた。彼はエムノンを憎んでいた。絶対に彼の思い通りにはさせないと誓っていた。

「追い詰めてやる。いや、追い出してやる。エムノン、お前をお前の望まぬ戦争に追い出してやる。そして金も肉も酒も女も、何一つの快樂も希望も無い所で、戦士らしく重い防具をかぶって糞尿をかぶって切り裂かれ倒れ込み、名も知れぬ兵士の一人として、惨めに惨めに死ね」

ブシッタコスの下の床はアンモニア臭い小便で汚れていた。彼は、糞を漏らしてなくて良かったと思いつつ立ちあがり、大きなため息を吐いた。

エムノンはブシッタコスがいた建物から出ると兵舎に向かって歩き始めた。

「各隊長を兵舎の会議室に集める！」エムノンは道の真ん中でそう怒鳴りながら歩いた。「これから軍議を行う。すぐに集まるように伝えろ」

イムサ兵たちが慌てながら四方に散る。

彼らがうまいこと隊長に命令を伝えたのか、エムノンが兵舎に着くまでにすでに彼の周りには数人の隊長が集まっていた。

平凡な見た目だが、やけに騒がしいアレクトール。軽装歩兵たちを束ねる小柄なケリーバーン。兵を思い通りに指揮することが出来る色白の美男キュクノス。まだ隊長に昇格したばかりの若造、ひよっこネオツトス。

彼らは木造の兵舎の中に入り、奥のドアから会議室に入った。会議室の中は暗く、資料やら地図やらが雑然と置かれていた。中央には大きな机があって、各々は指定席についた。

雑用が彼らに飲み物を出しているうちに次々に隊長たちが入って

くる。

戦闘ごとに役割の違う独立部隊を束ねる浅黒い肌のコローネ。エムノンの右腕である壮年のストルーツス。体がでかい派手好きタオース。アレクトールの弟で情報収集が得意な優男アレクトリス。

彼らが全員着席したところでエムノンが口を開いた。

「アレクトリス、情報収集の方はどうだ。新総督の情報を言ってもらおう」

「それよりブシッタコスはどうでした？ また王からの伝言を持ってきたんですかい？ 毎回毎回ご苦労なこつて。んでも……はいはい、わかりましたよ。で、情報ですがね。もう少し時間があれば書類にできたんですが、今回はいきなりなもんで書類は用意できませんでした。だから口述つてことで」アレクトリスは長い前置きをしてから本題に入った。「新総督は王族、しかもシユラク王の実の三男坊のシャンティ王子。王位継承権第三位で、優しい性格で、書物を良く読む。例のカバルス戦役にもサウルスの軍集団（まあ、つまり三万人位の兵隊ですね）を率いて従軍。都市防衛や退却戦で功績をあげています。固い密集隊形から生まれる防御が得意らしいですね。その分移動の速度は遅い、非常に。しかしこれも過去の話。つてことで忘れてください」

「忘れちゃっていいんですか？」

とひよっこネオットスがおどおどしながら尋ねる。

「いいよ、忘れちゃって」アレクトリスは手をひらひらさせる。「カバルス戦役後にシャンティはカバルス人の軍人を自分の臣下にとりたてているらしいですぜ。しかも、將軍たちの集まる宴会の席で、そいつの実力を試すためにカバルス鎮定に行かせてくれ、と言ったんだとよ。このカバルス軍人、よほどの軍才を持っていると見えます。事実、そうでした。カバルスの軍人の名前はエウクス・ギャロップ。カバルスで最強と言われた部族の男です。この男はカバルス人らしい勇猛な戦闘を好みます。それ以外にこいつの特徴と言えば、自分の率いる騎兵隊での決勝点攻撃ってやつですかね。事実、コイ

ツはカバルス戦役にてサウルス軍を四万撃破する戦術を編み出しているそうです。でも身内^{ない}の不和でそれも最後は役に立たなかったとか……」

「けどもよ、潮の川攻略の際には騎兵なら役に立たんぜ」

と彼の兄のアレクトールが怒鳴るように言った。何度も出てきているが、潮の川とは二つの海をつなげて作った防衛線の川の名称である。潮の川の周りには深い森があり、そのため騎兵はその機動力を大きく奪われる形になっている。

「その森だけどね……奴らは自国側の森に手を加えているんだ」アレクトリスは頭を掻きながら言った。「木を切って、根を掘り返して、まっ平らな道にしているらしい。まあ、何をする気かわからんが、騎兵を役立てるために改良しているのは確かだろうね」

「それならうちもそれをすればいい。あのカバルス人と騎兵でやりあえるんなら兵士たちも気合が入るぜ」

とタオースがニヤニヤしながら言う。

「ま、馬鹿は置いといて、敵の情報を続けますが」アレクトリスが自分の作った資料に目を移す。「カバルス戦役の後、シャンティ王子とギャロップ、さらにはシャンティ王子の兄であるジャーニイ王子は六千の兵を率いてカバルスの暴徒たちを治めに行っています。この軍隊をカバルス鎮定軍といい、これはカバルス各地で連戦連勝を重ねています。負け無しですよ。逃げられた記録はあるらしいですが。中規模の戦闘はいつでもギャロップが作戦立案をしているそうです。そして……決勝点への打撃もギャロップが務める」

「つまりは」右腕ストルーツスが口を開く。「そのギャロップの騎兵に注意してればいいってことか」

「ええ、とはいえ、歩兵として戦ったこともあるらしいんですよ。まあ……実はよくわからないんですけど。それで、カバルス鎮定の途中でシャンティ王子は負傷。その後はジャーニイ王子を最高將軍（サウルス流に言えば総司令官とか大將軍とかですかね）にしてカバルス鎮定を続け、同様に負け無し。これってつまり、シャンティ

王子はカバルス鎮定軍では大きな影響力を持つてなかったことですよね？」アレクトリスがそういうと隊長たちは頷きあった。「それで……よくわからないけど、サウルス国内で内輪もめがあつてカバルス鎮定軍は冬の間に一時全員王都に出向いています。で、ジャクナ三世王太子、ジャーニイ王子、シャンティ王子は各地に派遣されて現在に至る、と。ついでに言っておきますが、ジャクナは比較的に穏やかな南部に、ジャーニイは引き続き西部に、派遣された模様です」

「そんなことはいいよ。それよりも、シャンティの持つ軍のことだ」右腕ストルーツスが急かすように言う。

「彼は総督なので、シャンティの持つ軍はサウルスの国軍一個軍団です。北部の自警軍は彼の指揮下にはないので、彼に協力的です。つまり有事の際には二個半の軍団が敵になることになります」

「えつと……こっちは一万五千だから」ひよつこネオットスが考える。「一万の差ですか？ それってかなり……」

「森の中での戦闘じゃあ、軍は大きく広げられないから問題ない」ストルーツスが教える様な口調で言った。「おれたちの作戦は潮の川を攻略して向こう側に軍隊を送ること。同時に森を支配し、王都コルドスノアからの増強軍を待つ間にサウルス国の陸地の要塞都市を一つ、港の要塞都市を一つ落とすことだ。その後は数万の屈強なイムサ軍がどうかしてくれる」

できれば始めから屈強な兵士を数万単位で動かしてほしいものだが、と彼は心の中で苦笑する。

「敵が数的有利を駆使するために森で囲まれた潮の川を捨てるってことは無いんですか？」

とネオットスが訊いた。

「あのねえ」アレクトリスが答える。「おれの話聞いてたか？ 敵さんはすでに森の整備に乗り出してる。すでにそれはないの」

「それに」ストルーツスが優しげに言う。「こっちはとにかく川を攻略支配してしまえば、いつでも主力軍が渡せる状況を作り出せる

んだ。敵が森の外で待つていたとしても、こっちは森から出ず主力軍を待ち、到着したならば敵兵よりも大きな兵員数で奴らを叩けばいい」

「ああそうか……」

「もし」ストルーツスは続ける。「森の中にいるおれたちを攻撃してきたら、その時は数的有利を使えないことにもなるし、敵軍は得意の騎兵を使えない」

「火を放てばどうっすか？」

と派手好きタオースがニヤニヤしながら質問する。

「……逃げる、しかないか？」とストルーツスが不安げに返した。

「森におびき出してから一気に火で焼き殺す……案外それが相手の策かもしれないな」

「森の整備もそれと関係あるのかもしれないねえ」

これはアレクトリス。

「敵の」といきなりエムノンが口を開いた。隊長たちがエムノンに注目する。「敵の必勝パターンは決勝点の打撃なんだろう？」

「そうですね」

アレクトリスが資料を見ながら返事をする。

「おれたちが今とっている作戦は少数で川を渡って、森の中でゲリラ活動。まあ、森の情報収集のための行動だが……しかし、奴らもこのゲリラを叩くだけではどうにもならないのはわかってはいるはずだ。ならばどうする？」

「どうする？」とネオットスがオウム返しする。「敵は……おれたちの決勝点を叩きたいんですね。おれたちの決勝点は、エムノン將軍だから……エムノン將軍をおびき出す？」

「そうだ。だが、おれは少数の兵を率いて向こう岸でゲリラ活動を行おうとは思わない。敵もそうは思っていないだろう。ならば？」

「こちらが大規模で攻められる状況を……作り出す」とストルーツスが答えを返す。「そうしたらエムノン將軍もあちらに渡ることを考える」

「おれが決勝点でなくとも」エムノンが続ける。「こちらの全ての兵力を決勝点と考えていても同じことが考えられる。敵は、おれたちイムサ軍を一気に撃滅できる状況を作るはずだ」

ネオツトスが引きつった顔で訊く。

「それがさっきの……火責めですか？」

「わからん」エムノンが首を振る。「しかし、アレクトリスの情報を聞く限りそうではない。ネオツトス？ 思い出せ。敵は決勝点に何を投入する？」

「そうか、ギャロップの率いる騎馬部隊だ」

「そうだ。おそらく奴らは火責めと言う不確実な攻めはしない。火責めなんてものは敵に逃げ場がない時に使うもんだし、あちら側の森を全て焼き尽くしておれたちを全て殺せたとしても、森と言う防壁を失うことを考えると……損益はどちらが大きいかわかるはずだ」

潮の川の攻略が両国ともに難しいのはその両方に深い森があるからである。

森の持つ防衛力と言うのはそれなりに高い。森があれば敵騎兵の機動力を削ぐことができるし、自分に地の利がある森ならば簡単に敵を翻弄することもできる。また、森の中に兵力を隠しておき、敵に戦力を見破られないように工作することも可能である。

後世の戦術書でも森の持つ地形効果を『見通しがきかないために深く進入する決心がつきにくくなるし、持っている兵力を全て投入することは困難になる』としている。また、『かといって、森は兵力を分散させるのには大きな力を持っていない』と言われており、防御のために兵力を投入しても、それを分散させて一隊あたりの防御力を低下させなくても済むのだ。

それならば川一つしか隔てていない敵の森を燃やしてしまえばいいのだが、そんなことをすると敵にも同様のことを実行されるので、両国は暗黙の了解としてそれはしないことになっている。

「それなら橋を建てよう」ストルーツスは微笑みながら言う。「きつと簡単に立てられるぞ。だって、敵は兵と兵のぶつかり合い……」

決戦を望んでいるのだから」

「大丈夫なんですか？」ネオットスが心配そうに尋ねる。「橋なんて建てていたら、敵兵に攻撃されて積もり積もって大きな損害を被ることになりますよ？」

「こちらとの決戦を望んでいるのに？ こっちは決戦のための準備をするんだぞ？ 敵はそれを邪魔するようなことはしないさ。まあ、少なからずの攻撃は加えてくると思うが、こっちが橋を建てるのを止めたくなくなるくらいの熾烈な攻撃はしてこないだろう」

「敵が望むのは決戦」タオースが鼻息を荒くしながら言った。「こっちが望むのも決戦だ」

ネオットスが立ちあがりながら質問する。

「ぼくたちが建てる必要はあるんですか？ 敵が橋を建てることは考えられないのですか？」

「ない」エムノンが言った。「理由は簡単。侵略しようとしているのは、おれたちだからだ」

そしてエムノンが立ちあがった。彼は声を張り上げて言う。

「決戦の場所はおそらく潮の川に建てられた橋。敵の目標はおれかこちらの全兵力。敵の目的はサウルスへの侵略行為は絶対に成功せんといい現実をイムサ国に突きつけることだ！ しかしおれたちの目標は？ ネオットス？」

「はい、潮の川攻略制圧。その後の二つの要塞の支配」

「おれたちの目的は？」

「……サウルスの……富ですか？」

「違う！」

「おれたちの目的は！」突然、隊長たちが立ちあがる。隊長たちは皆が皆、熱っぽい、ぎらぎらした目で自分たちの将軍を見つめていた。彼らは絶叫するように言った。「おれたちの目的は、戦争そのものと完全なる勝利！」

言つと小屋の外で大きな歓声が上がった。隊長たちは顔を見合わせた後、すぐに小屋を出て、外にいた兵士たちを散らした。

15・モーキリニアの將軍（後書き）

おっす！ おれ、ギャロブン。

いやゝ、びつくりするぐらいに寒い所に来ちまったなあ。

おっと、そーいや、北国一武道会が北都ウチノホークで開かれるんだってな。シャンティによると北部中から武士^{もののふ}たちが集まってるんだってよ。

くゝっ！ おれ、ワクワクしてきたぞ！

そういうわけで次回、亡国の幻将。

「なに、モーキリニアの武将が入り込んでるだって？ 波乱の幕開け、北国一武道会」

絶対に見てくれよなっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0693x/>

亡国の幻将

2011年10月10日03時12分発行